苺畑の午前五時

松村雄策

筑摩書房

CamScannerでスキャン

角畑の不両石崎・目次

I

1 赤チン少年 1963 …… 7
2 ウェシェゲロベペアン 1964 …… 30
3 三人の町 1965 …… 51
4 F列十二番 1966 …… 74

Ⅱ

1 昼休みの踊り場 1967……97
2 遠い暗闇 1968……122
3 十月の更衣室 1969……146
4 苺畑よ永遠に 1970……173

CamScannerでスキャン

1

赤チン少年

給食が終わって午後の授業になると、教室の中はのんびりとした雰囲気になってくる。午前中のはりつめたような新鮮な空気は消え去って、けだるいようなゆったりとした気分になってくるのだ。長い夏休みの後の二学期が始まって、まだ一週間も経っていないからなのだろう、きっと。

亮二はぼんやりと自分の眼を見ていた。焦点を合わせないで前を見ていると、かけている眼鏡のレンズに自分の瞳が映っているのが見えるのである。鏡で見るとどうということはないのだけど、こうやって眼鏡のレンズに映して見ると、眼というものはとても神秘的なもののように、亮二には思われた。

特に黒眼が興味深い。周囲は暗い茶色であって、光の加減に依っては放射状に線のようなものが見えることもあった。その中心の黒は真の闇で、奥にはなにかとんでもないものが隠されているような気になることもあった。映画で見たことのある、遠い宇宙のようでもあった。指を突っ込んで奥を調べてみたいと、思うこともあった。

教師の声が聞こえて、亮二は我に帰った。そして、さっと教室の中を見まわして、胸の奥で〝ざまあみろ〟と呟いた。こういうふうに自分の眼を見られるのは、眼鏡をかけているからなんだ。眼鏡をかけていない奴は、自分の眼を見られないんだ。ざまあみろ。

亮二が初めて眼鏡をかけたのは、三年生の時であった。その頃眼鏡を使用していたのは、学年では亮二ひとりだけであったから、仇名はすぐに〝メガネザル〟になった。亮二は大村崑のようにわざと眼鏡を鼻の上にずらしておどけてみせたりもしたのだけど、本当は眼鏡が嫌で嫌でしょうがなかった。

しかし、四年生五年生と進級するにつれて、だんだんに眼鏡をかける者も増えてきて、六年生のいまではどのクラスにも必ず五人や六人はいるようになった。眼鏡はもう珍しくもなんともなくなったのである。しかし、亮二にとっては、この四年間はとても長かった。ずいぶんと嫌な思いをしてきたのである。

メガネザルという仇名はともかくとしても、無神経な大人に「おい、そこのメガネ」などと呼ばれるのは我慢が出来なかった。友達の母親に「坂口君は眼が四つあるのね」と言われて、口惜しくて口惜しくて泣きながら家に走って帰ったことも何度かあった。

しかし、自分の眼を見るということに関しては、立場は逆なのである。眼鏡をかけているからこそ、自分の眼を見ることが出来るのである。眼鏡をかけていない奴は、自分の眼を見ることが出来ないのである。ざまあみろ。

こういうふうに自分の眼が見えることに亮二が気がついたのは、五年生の時であった。それ

から一年間、このことは誰にも喋ってはいない。眼鏡をかけている他の連中にも、話してはいない。彼等も知っているのかも知れないとも思うのだけど、それでも言わない。
　隣の席に座っている一番仲が良い文康が、このごろ黒板の字がよく見えなくなってきたという。そのうちに眼鏡をかけるようになるかも知れない。そうなったら文康だけには教えてやろうと、亮二は思っている。
　その文康が「赤チン」と、小声で亮二を呼んだ。いまの亮二の仇名は、赤チンである。眼鏡をかけている者が珍しくなくなったから、メガネザルという仇名も成立しなくなったのである。赤チンという新しい仇名がついた時、変な仇名だなあという思いと、やっとメガネザルから解放されたのかという思いとで、亮二は複雑な気分になったのであった。
　ここらへんの子供達の間では、長ズボンに関しては問題はなかったのだけど、半ズボンについてはある決定がなされていた。つまり、腿が全部隠れてしまうようなそれは、〝半長ズボン〟とか〝田舎半ズボン〟などと呼んで、馬鹿にすることになっていたのである。脚の付け根いっぱいまでの短い半ズボンが、もっともかっこいいとされていたのであった。
　当然、亮二もそういう短い半ズボンをはいて、走りまわっていた。そして、何故かしょっちゅう転んでもいた。だから、亮二の膝小僧には右か左かどちらかに、時には両方にいつも大きく赤チンで丸が描かれていたのである。短い半ズボンから伸びた白い脚の真ん中に、赤チンの日の丸である。それで、亮二は赤チンになったのであった。
「赤チン、忘れてたけどさ、あのナイフ、すっごくきれいになったぜ。昨日、父ちゃんがやっ

てきてくれたんだ。今日、持ってくんの忘れちゃったけどさ」

数日前の始業式の日に亮二が拾ったそのナイフは、泥にまみれていて錆びついていて、刃を出すのにもかなりの力を必要とした。次の日、亮二はナイフを学校に持ってきて、文康に手入れを頼んで預けた。文康の父親は刃物工場で働いていたから、文康もナイフぐらいならば扱えるだろうと思ったのである。

「なあに、お父さんに頼んじゃったの。大丈夫?」

不安になって、亮二は言った。

「平気、平気。もうぴっかぴかでさ、まるで新品みたいだぜ」

文康は得意そうに、鼻を鳴らした。

「なんてったって、俺んちの父ちゃん、工場じゃ一番だからな」

「じゃあ、今日学校の帰りにさ、文康んちにいっしょに取りに行くよ」

文康は下を向いて、鉛筆で消しゴムを転がしてから言った。

「ちょっと、今日は駄目なんだ。用があるんだ、悪いけどさ」

「あっ、そう。そんならいいんだよ、また明日でもさ」

「明日、明日。明日、きっと持ってくるからさ」

亮二はうなずいた。

「凄いんだから、もうぴっかぴかでさ。赤チン、きっとびっくりするぜ」

五時間目が終わるまでの二十分ほどの間に、文康はぴっかぴかと十回は言った。

二学期の始業式の日に、亮二達のクラスに転校生がやって来た。クラス替えは二年毎にすることになっているのだから、五年生の時にこの組になってからもう一年半が経っていた。このクラスでは、初めての転校生であった。星野みどりは、その緊張を身体中から発していた。

「赤チン、どうして今頃転校なんかして来んだろうね？」

不思議そうに、文康が言った。

「六年生の二学期じゃん。もうちょっとで卒業なのにさ」

「もうちょっとで卒業だから、転校して来んだよ」

「どうして？」

文康は不満そうだった。

「俺達はみんな三中に行くわけだろ、区立だからさ。三中って有名なんだよ、毎年たくさん日比谷に入ったりしてるからさ。だからさ、六年のうちに転校して来れば、三中に入れるわけだよ。そうじゃなきゃ、越境ってことになっちゃうじゃん」

「ふうん。赤チンって、よく知ってんだな」

それは、亮二も、つい最近、母から聞いた話であった。

「だからさ、家族みんなで引っ越しなんかしないんだって。小学校の卒業から中学校の入学まで、ほんのちょびっとだけ本人だけがこっちに住んでるだけなんだってさ」

「へえ。そういうの、いいのか？」

「いいんだろ」

「じゃあ、星野みどりもそうなのかなあ」

「そうなんじゃないかな」と亮二はどうでもいいように言って、それ以上のことは喋らなかった。

亮二の家の近所にある木村の家に、みどりは引っ越してきたのであった。その家にそれまでひとりで住んでいた老女と、死んでしまった亮二の祖母とは、ずいぶんと仲が良かったという。だから、木村家に横浜からみどりという孫がやってくるということは、母から聞かされていて亮二はとっくに知っていたのである。

しかし、何故か亮二はそのことを文康に伝える気にはなれなかった。亮二は覚えてはいないのだけど、幼稚園ぐらいの頃に亮二とみどりは何度もいっしょに遊んでいるとも母は言っていた。なんとなく亮二は文康にうしろめたいような、おかしな気分になっていた。

そして、隣の列に座っているみどりに、いまの会話を聞かれなかったかどうか心配にもなった。そっと盗み見ると、みどりは揃えたばかりと思われる新品の教科書を、真剣な顔をして読んでいた。亮二はいいなと思った。

その日、亮二は落ち着かなかった。午前中に学校が終わって、家に帰ってからも同じだった。どうもみどりが気になって、しょうがなかったのだ。昼御飯を食べてから、亮二は外に出た。

亮二達の住んでいる町の中心は、バスが走っている柳本通りという商店街であった。そこから京浜東北線や東海道線の線路を越えて海のほうへ行くと、工場街があった。逆に内陸部へ入

って行くと、静かな住宅街になる。

だから、亮二の通っている小学校には、工場街の子供も商店街の子供も住宅街の子供も、みんな集まっていた。冬になると、住宅街の子供は、みんなコートを着てきた。工場街の子供は、みんなジャンパーを着ていた。

亮二の家は、商店街の真ん中にあった。みどりが住んでいるという家は、亮二の家から住宅街のほうに入って、神社まで行く途中にあった。外に出た亮二は、なんとなくぶらぶらと神社に向かって歩き出した。

生まれた時から何百回何千回通ったのか、よくわからないぐらいに知っている道である。しかし、その日の亮二には、初めて通る道のように思えた。まるでジャングルの中の一本道のように思えた。

亮二は神経を尖らせて、ゆっくりと歩いた。前方はもちろんのこと、左右にも後方にも注意して歩いた。ひょっとしたら、どこからかみどりが出て来るかも知れない。木村家の前を通る時は、特に注意した。不自然に見えない程度に、ゆっくりとゆっくりと歩いた。しかし、誰にも会わないまま、神社の入口に着いてしまった。

亮二はふっと息をついて、ズボンのポケットからハンカチを出して汗を拭いた。そして、とりあえず神社の境内に入るか、もう一度商店街を通って家まで戻るか、少し考えた。このま[illegible]亮二は入

[illegible]

この石段も、もう何百回何千回登り降りしたのかわからない。ずっと亮二の遊び場であったのだ。石段を登り切ると、そこには誰もいなかった。つい二〜三日前までは、子供達がいっぱい遊びまわっていたのに。夏休みが終わって、夏も終わってしまったのだろうか。蟬時雨だけがうるさかった。わけもなく、亮二は境内を歩きまわった。

そして、神楽殿の後の草むらで、ナイフを見つけたのであった。亮二の膝小僧の赤チンを隠すぐらいまでにのびた夏草の中に、その青いナイフはあった。しゃがんで手に取ってみると、すぐには刃も出ないほどに錆びついていた。誰が落としたんだろうか。いや、捨てたのかも知れない。こういうのが欲しかったんだけど、どうしようかな。

子供達のはしゃぐ声が、石段の下のほうから近づいてきた。反射的に、亮二はナイフをズボンのポケットに入れた。そして、上がって来た子供達と入れ替わりに、石段を下りた。亮二は嬉しくなってきた。

母親に見つかったら捨てなさいと言われるのに決まっているから、黙って隠しておこう。泥を洗い流して、紙やすりで錆を落として、油を塗れば、使えるかも知れない。いやそれよりも、明日学校へ持っていって、文康に見せよう。あいつのほうが、よく知っているだろうから。

うきうきして亮二が歩いていると、突然目の前にみどりがいた。木村家の前だった。老女もいた。

「あら、亮ちゃん。こんにちは」

亮二はあわてた。

CamScannerでスキャン

「あら、あら、こんにちは」

「ゆうた良かったね。この子がみどりなのよ。仲良くしてね」

みどりは黙っていた。

「あっ、あの、同じクラスです」

「あら、そうなの。それは良かったね。いろいろと教えてやってくださいね」

「はっ、はい」

「あなた達は、ちっちゃい時、仲良しだったのよ。覚えている？」

みどりは黙ったまま、首を横に振った。

「ゆうちゃん、仲良くしてやってくださいね」

「はっ、はい」

ゆうたは急いで家に向かって走った。顔が赤くなっているようだ。ずいぶんと得をしたような気分であった。

学校に着くと、下駄箱のところで父親が待っていた。そして、新聞紙でくるんだ小さな包みを、手渡してくれた。

「他の奴に見つかるとうるさいからさ、いま出さないほうがいいよ」

と父親は小声で、なおかつ自慢たっぷりに言った。

「はっ、わかったよ」

授業が始まってから机の下で包みを開いてみると、ナイフは生まれ変わっていた。泥だらけだった柄も、すべすべになっていた。錆びついていた刃も、するりと出てきた。
「ほんと、ぴっかぴかだな」
「なっ?」
鉛筆を削ってみると、その手応えは殆どなかった。
「ボン・ナイフなんか、めじゃないな」
午前中の四時間は、亮二と文康はずっとナイフの話をしていた。午後になってから、文康がぼそっと言った。
「あの女のひと、引っ越してっちゃったよ」
「誰のこと?」
「ほら、うちのアパートの前に住んでた、あの女のひと」
文康の家は、工場街のはずれの、アパートの二階であった。そこらへんはアパートが立て込んでいて、文康の住んでいるアパートと隣のアパートとは三メートルも離れていなかった。
夏休みも後半に入ったある日、その文康のアパートで、開け放った窓に寄りかかって、亮二と文康は『少年マガジン』と『少年サンデー』を読んでいた。すると、急に隣のアパートの窓が開いて、ひとりの女が顔を出した。
「ちょっと、あんた。文康っつんだってね、ぼうや」
突然のことで亮二はびっくりしたのだけど、文康は驚きもしないでにこっとしてうなずいた。

CamScannerでスキャン

「あたし帰る、ありすなんか出ていかも知らないんだからね」

「あ、そうですか」

父親はにこりもせずに言った。

「勝手だな、ほんと」

父親は小さく笑ってしまった。

「ほら、これやるよ、スキンシップを取ったんだからな」

女は啞然としたが、チョコレートを一枚投げてよこした。寝る間まで、さっき部屋から出て行くような気がした。帰ってきたら、ちょうどその時、それは父親が差しだしたチョコレートの包み紙を開いた。そんなこともあったのだ。

「あのチョコレートくれたひとのことか」

「そう、二十三日前から、自転の練習してたみたいだったから、そろそろかなって思ってたの、昨日は一緒にいるって言ったんだ」

「それで、昨日俺が行くって言ったら、駄目って言ったのか」

父親は少し考えたように首を傾げた。

「そういうのはいいもんじゃないんだからね」

「なんだよ、悪いことなんかしてないって、ありすとどういうことだったの？」

「ないしょだから、わかんないことないよ、お母さんも知らないって言ってたもん」

「だからさ、ショートパンツをはいたの、なんで食べちゃったの」

文康は上眼づかいで教壇を見てから、声を落として言った。
「赤チン、言わないか?」
「うん、言わない」
「絶対、誰にも言うなよ」
「うん、絶対誰にも言わない」
文康は決心したように、唾をごくりと飲み込んだ。つられて、亮二もごくりと喉を鳴らした。
「夏休みになってすぐにさ、やっぱり窓開けっ放しにしてて、部屋の隅っこでマガジン読んでたんだよ」
「うん」
「あの女のひとの部屋の窓はさ、閉まってたんだ」
「うん」
「そいでさあ、ふっと気がついたら、窓が開いててさ、あの女のひとがいたんだよ」
なにかよくわからないけれど、亮二は文康に顔を近づけた。
「そしたらさ、洋服脱ぎ始めちゃったんだよな」
「ええっ」
「シャツとかスカートとかさ、脱いじゃったんだ」
「凄いじゃん、文康」
「きっとさ、向こうからはさ、俺は見えない位置だったんだろうな」

CamScannerでスキャン

亮二は文康のアパートの内部の位置関係を、急いで思い出そうとした。
「アパートがぴったしくっついてるからさ、他からは見えないんだよな」
今度は文康のアパートの外部の位置関係を、急いで思い出そうとした。
「うちはさ、父ちゃんも母ちゃんも働きにいってるじゃん。だから、誰もいないって思ってたんだろうな」
「うん」
「俺が夏休みだってこともさ、知らなかったんだろうな、きっと」
「よくわかったな、そんなこと」
「だからさあ、あとからずいぶん考えたんだよ」
「ふうん」
「それでさ、ブラジャーとパンティーだけになっちゃってさ、化粧台に向かってお化粧始めたんだよ」
亮二はもう一回唾を飲み込んだ。
「だからさ、俺は畳にうつぶせになってさ、ホフクゼンシンしたの」
「なんだよ、ホフクゼンシンって？」
「ほら、『コンバット』なんかで、よくやるじゃん。寝っ転がってさ、肘と膝だけで前進していくやつ。あれ、匍匐前進っていうんだよ」
「ああ、ああ、あれね」

「それでさ、窓のとこまで行ったんだよ、俺」

凄いなこいつはと、亮二は思った。

「それで、見ちゃった」

「どうだった?」

「そりゃあ、凄かったよ」

文康の顔が、少し赤くなった。

「なにが?」

「なにがって……だって、ブラジャーとパンティーだけだぜ」

「そりゃあ、そうだな。うん、そりゃあ、凄いな。それで、それからどうしたの?」

「そのうち、お化粧が終わっちゃってさ。別の洋服着ちゃった」

「それで終わりなの?」

「そう」

「凄えな、文康」

「そいでさ、俺、次の日も同じ時間に同じ場所に隠れてたんだ」

「……」

亮二は文康の顔を見た。

「そしたらさ、また前の日と同じでさ」

「また、脱いじゃったの?」

「そう。それにさ、今度はブラジャーも脱いじゃってさ」
「ええっ」
「タオルで汗拭いてやんの。俺、やんなっちゃったよ」
「………」
「おっぱい見えちゃってさ」
亮二は思わず教壇のほうを見てしまった。文康もつられて見た。
「そいでさ、俺、少し顔上げ過ぎちゃったんだな。女のひとと、眼と眼が合っちゃったんだ」
「ええっ」
「なに、ぼうや、とか言いやんの」
「大変じゃん。文康、どうしたの？」
「だからさ、こんにちはって言ったんだ」
「………」
「そしたらさ、学校行かないの？　なんて言うんだよ。タオルでおっぱい隠してさ」
「………」
「だから、夏休みですって言ったんだ」
「それから、どうしたの？」
「そしたらさ、ふうんって言って、窓閉めちゃったんだ」
「それから？」

「それだけ」
「じゃあ、怒られなかったんだ」
「うん」
　何故か、亮二はほっとした。
「母ちゃんに言いつけられたら大変だなって思ってたんだけどさ、大丈夫だった」
「ふうん、良かったじゃん」
「それからはさ、着替え終わってから、窓開けるようになっちゃってさ」
「どういうことよ？」
「それからもずっと毎日見てたんだけどさ、いつも窓開けると服着てるんだよな」
「……」
　亮二は感心してしまった。
「そいでさ、昨日帰ったらさ、もういなかったんだよ。次にあの部屋に入るひとも、ああいう女のひとだったらいいんだけどなあ」
「……」
「そしたらさ、今度は赤チンも頼んでやるからさあ」
　気をつけてはいたのだけど、少し声が大きくなってしまったのだろうか。周囲の何人かが、亮二と大輔の席のほうを振り向いた。教師は黒板に向かっていた。亮二はみどりに聞こえなかったかどうか、また心配になった。

授業が終わって、亮二と文康はプールの前の階段に座っていた。
「あのさあ、文康さあ、パンツとパンティーって、どう違うんだよ?」
「どうって……つまりさ、女のひとがはくのがパンティーだよ。そいでさ、男や子供がはくのがパンツだろ」
「どう違うんだよ?」
「どう違うったってさ……」
「文康、見たんだろ?」
「見たけどさ……」
文康は考え込んでしまった。
そこへ、同じクラスの健次と正夫がやって来た。
「おい、文康。おまえ、覗きやったんだってな」
文康の顔色が変わった。
「やらないよ、そんなもん」
「嘘つけ、やったね」
健次は得意そうに言った。
「おまえが覗きやった女のひとな、川沿いの『おかめ』っていう焼鳥屋で働いてたんだよ。うちの父ちゃんなんかも、よく行ってたんだよ。そしたらさ、辞める日にさ、隣のアパートの小

学生の男の子に覗かれたって、言ってたんだってよ。隣のアパートって、おまえんとこじゃないか。あそこで小学生ったら、おまえだけじゃないか」

文康は真赤になって、下を向いて黙ってしまった。代わりに、亮二が言い返した。

「違うね。文康が覗いたりなんかするわけないだろ。おまえだろ、そんなことすんの」

「そうだね。文康は女の裸覗いたんだね。やあい、文康のスケベー」

今度は、正夫が前に出て来た。

「おい、赤チン。おまえ、さっきナイフ持ってただろ」

「持ってないね」

「嘘だね、持ってたね。俺、国語の時間におまえがナイフで鉛筆削ってんの、ちゃあんと見たね。先生に言ってやろ」

喧嘩が始まるのを期待しているのだろうか、亮二達の周囲に何人かが集まってきた。その一番後にみどりがいるのが、亮二の眼の中に入ってきた。

「おい、赤チン。おまえ、生意気だぞ」

「うるせえな。生で生きてなきゃ、どうやって生きるんだよ。焼いたり煮たりして、生きてられるかよ」

亮二はみどりを、充分に意識していた。

持っていたマジック・ヨーヨーを振りまわしながら、健次が言った。

「おまえなあ、あとから春日橋の下へ来いよな。決闘だからな」

「ああ、いいよ。いいけどな、おまえ、また兄貴連れて来んだろ。汚ねえぞ」
「うるせえな。赤チンなんか、赤チンだらけにしてやっからな」
健次と正夫は、ノゾキー、ナイフー、と怒鳴りながら、裏門から出て行った。亮二と文康は黙りこくったまま、正門のほうに向かって歩いた。さてと、どうしようかな。
みどりが走って来て、亮二と並んで言った。
「坂口君、喧嘩するの？」
「えっ、うん」
「やめなさいよ、喧嘩なんて」
校門を出てパン屋の角を曲がったところで、文康が顔を上げて言った。
「赤チン、俺も行くぞ」
「いいよ、文康は来なくたって」
「どうせ、健次ひとりだけのわけはないんだから。正夫も来るだろうし、健次の兄ちゃんも来るに決まってんだから。俺も健次の奴を殴ってやるんだ」
亮二は立ち止まって、文康の顔を見た。文康はなにか思い詰めているようであった。だいたいが、文康は身体があまり丈夫なほうではなかった。力もそれほどなかった。自分から喧嘩をするなどということは、いままで一度もなかったはずである。女の裸を覗いたことだって、そうである。夏休みの間に文康の性格が少し変わったように、亮二には思えた。
「よし、行こう、文康。いざとなったら、これがあるしな」

亮二はポケットから、ナイフを取り出した。
「駄目よ、そんなの。危いじゃないの」
その声を聞いて、文康は初めてみどりがいることに気がついたようであった。何故ここにみどりがいるのだろうか、また何故亮二に話しかけているのだろうか、不思議そうな顔をした。
「ねえ、やめなさいよ、喧嘩なんて」
「うるさいな、いいじゃないか。関係ないじゃないか」
「だけど……」
みどりと口をきくのはこれが初めてだということに、突然亮二は気がついた。
「ねえ、一度うちに帰ってから、行くんでしょ?」
「そうだよ」
「じゃあ、あたしも行く」
「えっ、いいよ。来なくたって」
「行くからね、あたしも」
みどりは柳本通りに向かって、走って行った。スカートの裾が跳ね上がって、ちらっと白い腿が見えた。亮二が文康の顔をうかがってみると、喧嘩のことを考えているのか下を向いていた。みどりの白い腿は、見なかったようであった。
「じゃあ、赤チン、あとでな」と言って、文康も家に帰って行った。
亮二は家に向かいながら、考えた。それは、文康の性格が変わったことでも、健次との喧嘩

のことでも、ぴっかぴかになったナイフのことでもなかった。亮二の頭の中は、みどりの白い腿でいっぱいになっていたのであった。

もしも窓の向こうでみどりがシャツやスカートを脱ぎ始めたら、亮二はいったいどうするだろうか。文康があの女のひとを見ていたように、亮二もみどりを隠れて見ているだろうか。みどりの下着は、パンツなのだろうか、パンティーなのだろうか。

亮二も文康もみどりも、四時には春日橋の下にいた。文康は興奮しているのだろうか、殆ど口をきかなかった。みどりも興奮しているようで、文康とは逆にやたらと喋りまくっていた。祖母にこの場所を教えてもらうのが大変だったとか、そういえばちっちゃい時にここに来たことがあるなどと、喋り続けであった。

亮二は適当に返事をしながら、ちらちらとみどりを盗み見ていた。みどりもブラジャーをしているのだろうか。パンツなのだろうか、パンティーなのだろうか。眼が自然に、みどりの胸と脚にいってしまう。

五時半まで待ってみたけれど、結局健次も正夫も来なかった。

次の朝、亮二が学校に行くと、もう正夫は教室にいた。

「おい、正夫。なんで、昨日来なかったんだよ。恐くなったんだろ」

しかし、正夫は亮二の挑発に全く乗ってこなかった。

「大変だったんだよ、昨日は」

「なにが、大変だよ。俺達は五時半まで、春日橋のとこにいたんだぞ」
「昨日さあ、健次の父ちゃんがさ、工場で機械に巻き込まれちゃったんだよ」
「………」
「そいでさあ、大怪我しちゃってさ、病院に入院しちゃったんだよ」
「………」
文康が教室に入って来て、亮二達を見ると、近づいてきて、言った。
「大変だったんだってなあ、健次の父ちゃん」
工場街ではこのニュースは、もう知れ渡っているようであった。
集まって来る級友達の真ん中に立って、正夫は喋り続けた。
「もしもさあ、父ちゃんが働けなくなっちゃったらさ、健次んち大変なんだよな。母ちゃんがいないからさ、兄ちゃんとふたりっきりになっちゃうじゃん」
「うん」
「そうすっとさ、健次は名古屋のおばさんとこ行くことになるかも知んないんだって」
正夫は興奮気味で、同じことを何度も何度も繰り返した。
そこへ、みどりが教室に入って来た。そして、向かい合って声高に話している亮二と正夫を見て、ふたりの間に強引に割り込んできた。みどりは「もう、やめなさいってば」と言って、亮二の腕を力を込めて引っ張った。

CamScannerでスキャン

2 ウェシェゲロベベアン

亮二は犬が大好きであった。もしも飼うことが出来るのだったら、自分ひとりですべての世話をしてもかまわないと思っていた。一日中いっしょに遊んでいても、飽きることはないだろう。そのことを考えるだけでも、なんとなく楽しくなってくるのであった。

しかし、母は犬を飼うことを、許してはくれなかった。動物は死ぬから嫌なのだと、いつも言っていた。死ぬと悲しくてしょうがないという。それはそうだろう。しかし、だからといって飼ってはいけないというのは、どこかおかしいような気が亮二はしていた。

母の妹の家には、大きなコリーがいた。亮二はこいつがとても気に入っていた。実際には別の名前がついていたのだけど、亮二はこの犬をラッシーとしか呼ばなかった。このラッシーの唯一の難点は、亮二のいうことをきかないところであった。叔母のいうことしか、きかないのである。叔母はこのコリーを、放し飼いにしていた。家の中はもちろんのこと、外へ連れて行く時にも鎖は使わなかった。

亮二が叔母の家に遊びに行くと、そのコリーは必ず寝転がった。亮二の姿を認めると、腹を

見せるのである。つまり、腹を撫ぜてくれというのである。しょうがない、撫ぜてやるしかない。亮二は二十分でも三十分でも、コリーの腹を撫ぜてやっていた。それでも、犬といっしょにいられて、亮二は満足であったのだ。

当然テレビ番組も犬の出てくるものが、亮二は好きであった。「名犬ラッシー」、「名犬リンチンチン」、「名犬ロンドン」などは、絶対に見逃さなかった。特に、飼い主の少年の乗った自動車の後を追いかけて、名犬が走って行くというような場面などを見ていると、亮二は泣きたいような気分になるのであった。

いつの頃からか、亮二は電車に乗ると、ドアに寄りかかって立って、窓の外を見ながら、想像の世界に入るようになった。亮二の乗っている電車を、亮二の飼っている幻の名犬が追いかけて走って来るのである。

線路が町の中を走っていようと、高架のガードの上を通っていようと、橋を渡っていようと、その名犬は必ず追いかけてくるのであった。そして、亮二はその名犬に、がんばれと応援をしたり、ごめんねと謝ったりするのであった。そうやって窓の外を眺めていて、本当に泣いてしまったこともあった。

兄が仔犬をどこからか貰ってきたのは、亮二が小学校二年生の時であった。しかし、いくら亮二と兄が頼んでみても、母は返してくるようにとしか言わなかった。そっと物置き小屋に隠してもみたのだけど、すぐに見つかってしまって、結局返しに行くことになった。

その仔犬を抱いて家を出ると、兄は実は貰ってきたのではなくて拾ってきたのだと言った。

CamScannerでスキャン

だから、どこか貰ってくれる家を、探さなければならないという。亮二と兄は心当たりの家を何軒かまわってみたのだけど、どこでも断わられた。二時間ぐらい歩いて夕方になってから、隣町のお寺の墓地に仔犬を置いて、走って帰って来た。その晩、亮二はずっと泣いていた。

電車に乗っている亮二を追いかけて走って来るのは、どうやらその時の幻の名犬のようであった。五年前はまだ仔犬だったのだけど、いまでは立派な成犬になっていた。そして、亮二が電車に乗ると、必ず追いかけて来るのである。中学一年になっても、それは変わらなかった。

ぼんやりと外を見ていた亮二を、想像の世界から連れ戻したのは文康であった。

「えっ、なに?」

「だからさ、なんていう映画館なの?」

亮二に代わって、父が答えた。

「松竹セントラルっていう映画館だよ」

「松竹セントラル、ですか」

中学生になっても亮二も文康も学校以外の外出の時には、まだジャイアンツのマークのついた野球帽をかぶっていた。小学生の名残りが、まだ抜けないのである。さすがに、2Bやマジック・ヨーヨーとは、手が切れたようであるけれど。

電車は田町を出たところであった。亮二は父と文康との会話を聞いて、なんとなく安心していた。文康は亮二の家に遊びに来る度に、赤チンのお父さんは背が高くてかっこいいなあと言っていた。大学を出ているなんて凄いなあとも言った。本当は中退であるということも、また

それが夜学であるということも、亮二は黙っていた。
文康が家に遊びに来る時はいつもうまい具合に父が酒を飲んでいないのも、亮二が安心出来る理由のひとつであった。いや、父が酒を飲んでいる時は、絶対に友達を家に呼ばないようにしている、といったほうが正しいだろう。それでも、近所に住んでいる何人かは、父が酒飲みであるということを知っているはずである。
亮二と父と文康の三人は有楽町の駅で京浜東北線を降りて、八月の銀座を築地のほうに向かって歩いた。

亮二も文康もみどりも、四月に同じ中学に入学した。そして、三人とも別々のクラスに分かれてしまった。一学年がK組まである学校だから、校内で顔を合わせる機会もあまりなかった。四クラス二百人の小学六年から、十一クラス五百五十人の中学一年への変化は、亮二が思っていたよりもずっと大きかったようであった。
どうしても文康やみどりと、離れがちになってしまう。このごろは登校下校の途中の道や校内の廊下などでみどりとばったりと出逢うと、亮二はなにを喋ったらいいのかわからなくなってしまう。どぎまぎしてしまうのだ。自分でもこれはおかしいなと、思ってはいるのだけど。文康なら、平気なのだ。
亮二がビートルズの映画を観に行こうと誘った時、文康はあのおまじないの楽団だねと言った。それは、文康が教科書を持ってくるのを忘れて、その日別の時間に同じ授業があった亮二

のところに借りにきた時のことであった。

授業が終わって返しに来た時に、文康は教科書に書かれてあったある落書きを示して、これはなにかと亮二に訊ねた。そこには、"ウェシェゲロベベアン"と書いてあった。なにかのおまじないなのかとも、文康は言った。

これはビートルズというイギリスのポピュラー・グループの「ツイスト・アンド・シャウト」という曲の歌詞だと、亮二は答えた。英語だからなんと言っているのだかよくわからないのだけど、ともかく聞こえるとおりに片仮名で書いてみたのだ。だけど、僕達も英語を習い始めたのだから、すぐにどういう意味かわかるようになるさと、亮二は言った。

亮二がポピュラー音楽を聴くようになったのは、小学校の三年生ぐらいからであった。すぐに、テレビのポピュラー音楽番組は必ず見て、ラジオのヒット・パレードは欠かさず聞いて、ベスト・テンの順位をノートにつけるようになった。父や母にねだって、日劇のウエスタン・カーニバルも、毎回行くようにもなった。

小学六年の正月に、亮二はお年玉でポータブル電蓄を手に入れた。三千円であった。その電蓄を買って一か月も経たないうちに、ビートルズが日本でレコード・デビューをしたのである。ビートルズはそれまで亮二が聴いていたポピュラー音楽とは、全く異なったものであった。それからの亮二の小遣いは、その殆どがビートルズに費やされることになったのである。

「プリーズ・プリーズ・ミー」「抱きしめたい」「シー・ラヴズ・ユー」「キャント・バイ・ミー・ラヴ」「フロム・ミー・トゥー・ユー」「ツイスト・アンド・シャウト」「ドゥ・ユー・ウ

ント・トゥー・ノウ・ア・シークレット」「オール・マイ・ラヴィング」「プリーズ・ミスター・ポストマン」……。

亮二は発売されるビートルズのシングル・レコードは、すべて買った。LPレコードを買うために、昼食のパン代もためるようになった。いまの調子でいけば、二学期に入ってすぐにLPが一枚買えるはずである。

そのビートルズの映画「ビートルズがやって来る　ヤア！　ヤア！　ヤア！」であった。亮二は本当はみどりも誘いたかったのである。しかし、父に連れて行ってもらうのだ。なんとなく、恥ずかしい。それで、文康だけを誘ったのであった。

橋を渡って劇場に着くと、父は入口にいた女の受付に名刺を渡して、「支配人はいるかい」と訊ねた。彼女は「少々お待ちください」と言って、奥へ消えた。すぐに支配人という男がやって来て、父の顔を見ると「これは、どうも」と言った。父は「ちょっと子供に観せてやりたいのだが」と言った。支配人は「どうぞ、ごゆっくり」と答えた。

席に着いて父がトイレに行っている間に、文康が訊ねた。

「赤チン、いつもこうやれば入れるの？」

「うん。だけどね、たいていは招待券で入るんだけどね」

「凄いんだなあ、赤チンのお父さんって。あの支配人ってひと、知ってんの？」

「そうじゃないかな。銀座の映画館だったら、どこでもこうだよ」

亮二は少し父が誇らしくなった。

「赤チンは、しょっちゅう映画観に来てんの?」
「月に二〜三回ぐらいかなあ」
「いいなあ、月に三回も映画が観られるなんてさ。それも、銀座だろ、封切りだろ」
「まあね」
場内は六分ぐらいの入りであった。満員にはなってはいなかったけれど、何人かの若い女性客がまるで眼の前にビートルズがいるかのように、キャアキャアと騒ぎまくっていた。父が
「ああいうのは、金を払って雇ってるんだよ」と、訳知り顔で言った。
「ビートルズがやって来る　ヤア! ヤア! ヤア!」は、亮二には言葉では言いあらわせないような、とんでもない素晴らしい新しい世界であった。

不二家でホット・ケーキを食べてから有楽町の駅に行って、父は亮二と文康に大森までの切符を買ってくれた。気をつけて帰りなさいと言って、父はまた銀座の町へ入って行った。
電車の中で亮二の買ったプログラムを見ながら、文康が面白かったねと言った。亮二はうんと答えはしたけれど、面白いというのとはちょっと違うような気がした。楽しいというのとも違うように思えた。
「工事現場で女のひとが穴ん中落っこっちゃったりさ、川にカメラ落としちゃったりさ」
やはり、文康は観たところが、亮二とは少し違うようであった。
「そういうとこよりさ、すっごく走ってたじゃん、初めから終わりまでさ。空地のとこもそう

がしさ、お母さんに追っかけられるとこもそうだったじゃん。あれ、『キャント・バイ・ミー・ラヴ』っていうんだけどさ、あそこが良かったよなあ」
「ふうん」
「それからさあ、最後のほうでさ、演奏してると、前髪が汗でおでこにぴったりくっついてたじゃん。あれも、かっこ良かったなあ」
「そうなの」
文康は興味のなさそうな顔になって、窓の外に眼を向けてしまった。それでも、亮二は続けて言った。
「だけどさ、かっこ良かったよなあ。俺もさ、こんな刈り上げの頭、もうやめにしたいよ。あれぐらい髪の毛のばしてみたいな」
文康があっと声を出して、窓の外を指さした。電車は品川駅の京浜東北線のホームに停まったところであった。文康は隣の山手線のホームを、指さしていた。
「なんだよう？」
「あれ、そうじゃないか」
「なにがっ？」
「ほら、あの柱の横にいんの、星野みどりじゃないか」
電車が来るのを待っている午後の人込みの中に、大き目のバスケットを持ったみどりが立っていた。横からみどりの肩に手をかけているのは、みどりの母親なのだろうか。

「降りようか?」
亮二の顔を見て、文康が言った。
「降りて、どうすんだよ?」
亮二が言った途端に、電車のドアが閉まった。みどりの姿は、右のほうに流れて行った。文康がああと言った。
「どこ行くんだろうね、星野みどり?」
「知らないよ、そんなこと」
「そういえば、中学に入ってから二~三回しか、星野みどりと逢ってないなあ、俺」
「俺だって、そうだよ」
「赤チン、家が近所なんだろ?」
「近所だって、逢わないもん」
亮二が変に不機嫌になってきたので、文康も黙ってしまった。言葉がつっけんどんになっているのが、亮二は自分でもわかっていた。しかし、何故そうなっているのか、その理由がわからなかった。
もしも今日みどりを映画に誘ったとしても、ああいうふうに他の用事があったのなら、きっと断わられていただろう。誘わなくて、良かった。しかし、こうやって実際にみどりの姿を眼にすると、誘えば良かったという口惜しいような気分になった。
大森駅まで、亮二は黙っていた。文康もしかたなさそうに黙っていた。何故突然亮二が不機

嫌になったのか、文康にはわからなかったようだ。駅の前で「それじゃあ、来週の登校日ね、バイバイ」と言って、ふたりは分かれた。

その夜、亮二はなかなか寝つけられなかった。ビートルズの映画を観て興奮していたせいもあったのだけど、気になっていたのはみどりのことであった。中学に入ってからほんの数回しか、みどりとは口をきいていない。それも学校の教材のことなどの、どうでもいいことばかりであった。亮二にわかっているのは、横浜の家には帰ってはいなくて、木村家に住んでいるということだけであった。

授業中にふと校庭を見たら、みどりのクラスが体操をしていたことがあった。教師にはわからないように、亮二はその時間中ずっと校庭のみどりの動きを眼で追っていた。そして、みどりのクラスの体育の時間を、心待ちにするようにもなっていた。

今日の品川駅のバスケットを持って立っていたみどりが、亮二の頭の中でちらちらしていた。そういえば、中学生になってからのみどりの私服を見るのは、今日が初めてであった。小学六年のみどりは、いかにも子供子供した膝の上までの短いスカートをはいていた。ところが、今日の中学一年のみどりは、膝が隠れてしまう大人ふうのスカートであった。

亮二はみどりのスカートの中の、白い下着を思い出そうとした。スカートが変わったように、下着も変わったのだろうか。パンツからパンティーになったのだろうか。亮二が蒲団の中で考えていると、階下で父の声がした。帰って来たのであろう。時計を見ると、もうすぐ十一時半であった。

父がどういう職業についているのだか、亮二ははっきりとは知らなかった。たぶん会社員なのだろう、ぐらいにしか思っていなかった。学校へ持っていく家庭調査表には、会社員と書いたり会社役員と記してあったりする。ともかく、いちおうは背広を着てネクタイを締めて、外に出かける仕事ではある。しかし、平日に子供を連れて、映画を観に行くのである。普通の会社員ではないだろう。

父は酒飲みであった。朝起きてから夜寝るまで、一日中酒を飲んでいる。それが、ある日突然、今日でもう酒はやめると言う。そして、それから半年ぐらいは、本当に一滴も飲まないのだ。毎朝背広を着て出かけて行く。ところが、ある日べろべろに酔っ払って、帰って来る。そして、それから半年ぐらいは、毎日飲み続けるのだ。もちろん、背広など着ないし、外出もあまりしなくなる。亮二が物心ついてから、父はずっとその繰り返しであった。

小学校の低学年の頃、亮二は毎日夕方になると一升壜を持たされて、酒を買いにやらされた。その時母に教えられた文句は、「セイシュノニキュウシュニゴウクダサイ」というものであった。亮二はこの呪文を、毎日声に出していたのである。これが「清酒の二級酒二合ください」だとわかったのは、中学生になってからであった。

亮二が一番気をつけているのは、父が酔っ払っているところを学校の友達に見られないようにすることであった。だから、父が酒を飲み続けている期間は、絶対に家に友達を呼ばなかった。

CamScannerでスキャン

もっとも嫌だったのは、近所の居酒屋や蕎麦屋や鮨屋の店員が家に来ることであった。
「おたくのお父さんが店で酔っ払っちゃって、困ってるんだよね。迎えに来てくんないかな」
父は大きくて、重かった。正体もなく酔っ払っているから、よけいにこたえた。にぎやかな商店街を父を背負って歩くのは、とても恥ずかしかった。友達に逢ったら、どうしようか。裏通りをぐるっと遠まわりして、家まで連れて帰るということになる。
父が酒さえ飲まなければ。いや、飲んでもあんなにひどく酔っ払わなければ。亮二はいつも思っていた。

登校日に学校に向かって歩きながら他の生徒の服を見て、亮二は初めて気がついた。殆どの男子生徒は、夏用の薄い生地のズボンをはいているのだ。亮二は普通の学生服上下の、一本しかないズボンをはいていた。あれは涼しそうだな。
中学校に入って亮二が一番ほっとしたのは、学校に毎日同じものを着て行っても誰もなにも言わないということであった。学生服というのは、実に便利であった。一着だけあれば、それでいいのだ。そう思っていたのだけど、夏用の薄いズボンなどというものもあったのだ。
校庭で文康を見つけたので、亮二は訊いてみた。
「文康、それさあ、夏用のズボン?」
「えっ、なにが?」
「ズボン。何本持ってるの

「学校にはいてくる奴かい。一本だよ」
「そうだよなあ。俺も一本なんだ」
「じゃあ、いいじゃないか」
「だけどさあ、たいていの奴はさあ、夏用のも持ってるみたいだぜ」
　文康は周囲を見まわした。
「本当だ。へえっ、知らなかったなあ」
　文康はそういう奴もいるのかというような、不思議そうな顔をした。
　朝礼台に向かって並びながら、亮二はみどりのクラスの列に眼を向けていた。ほんの少しでもいいから、みどりと話をしたいと思っていたのだ。そのために今日はわざわざ遠まわりをして、木村家の前を通って登校して来たのだ。しかし、木村家は静かだった。そして、みどりの姿は、列の中にはなかった。
　教師の伝達と注意があって、学校は簡単に一時間で終わった。運動部が校庭を走っているのをぼんやりと眺めながら、みどりはどうしたのだろうと亮二が考えていると、文康が肩を叩いた。
「あいつら、馬鹿じゃないの。この暑いのにさあ」
「クラブだろ」
「いくらクラブだって、夏休みまでやることないじゃん」
「他にやることないんじゃないの」

「赤チン。宿題、もうやった？」
「まだ。全然、やってない」
「俺もそうなんだ。いっしょにやんないか？」
「いいよ」
亮二は文科系が得意であって、文康は理科系に強かった。しかし、もしも文康が亮二の家に来てやるつもりだったら、困る。昨晩父が酔っ払って帰って来たのだ。
「だけどさあ、うちはちょっと駄目なんだ。文康んちでやんないか？」
「うちでもいいんだけどさ」
文康は言いよどんだ。
「図書館行って、やんないか？」
「図書館。どこにあるの？」
「本門寺のとこ」
小学生の頃の亮二や文康は、よく本門寺まで遠出をした。池にザリガニを取りに行ったのだ。
「ずいぶん、遠いじゃん」
「遠くないよ。自転車で行けば、すぐだよ」
「すぐじゃないよ。三十分はかかるぜ」
「だけどさあ、あそこ、冷房してるんだぜ」
「へえ、それはいいな」

CamScannerでスキャン

しかし、何故あの図書館が冷房しているということを、文康は知っているのだろうか。

「なんで、冷房してるって知ってんの。行ったことあんの?」

「まあね」

「ふうん」

「それにさ、あすこの図書館さあ、他の学校の奴も来んだよね」

「そりゃあ、そうだろ」

文康は声を小さくして言った。

「けっこう可愛い子も来てんだ」

「……」

「まだ名前は知らないんだけどさ」

「……」

文康が駄目を押すように言った。

「いいな、行くな、赤チン?」

「うん、いいよ。今日、これからか?」

「うち帰って自転車とってくんの面倒くさいからさ、明日からにしようぜ」

「そうだな」

「じゃあさ、明日九時半に区役所の前な」

「いいよ。なにやる」

CamScannerでスキャン

「じゃあ、明日は国語にしよう」

「うん」

主導権は完全に、文康がとっていた。小学生の頃は、全く逆だったのに。

「そういえば、星野みどり、来てなかったみたいだな」

亮二が一番気にしていたことを言って帰って行く文康を見て、亮二はあいつは夏休みになると変わるなと思った。

亮二の部屋は、商店街のバス通りに面した二階にあった。通りを歩いている人達が、窓からみんな見える。一週間ほど前から、亮二は新しい遊びを始めた。それは、双眼鏡で外を見ることであった。

最初はふとなにかのはずみで、双眼鏡で自分の部屋の中を見たのであった。亮二は驚いてしまった。世界が全く変わってしまったのだ。まるで映画でも観ているような気分になった。

次に、双眼鏡で写真を見てみた。これも、いままでとは全く異なったものに見えた。新鮮であった。双眼鏡でビートルズの写真を見ながら、ビートルズのレコードを聴くというのが、すぐに亮二の毎晩の日課になった。

そして、写真は隠れて買った『平凡パンチ』のヌード・グラビアにもなった。文康が女のひとの着替えを覗いた時も、こんな気持ちになったのではないだろうかと思えるぐらいに、亮二は胸がどきどきした。

文康のようによその家の中を覗くのは、亮二の持っている双眼鏡の倍率では無理であった。しかし、目の前の通りを歩いているひとぐらいは、大丈夫であった。外からはわからないようにカーテンの影に隠れて、亮二は双眼鏡で通行人を盗み見た。

もちろん、みんなちゃんと洋服を着て、歩いている。しかし、相手に気づかれないでこちらはじっと見ているという行為は、亮二には覗きをしているのと同じように興味深かった。

文康と図書館へ行く約束をしていたので、亮二は八時過ぎに起きた。朝食の前に、国語の宿題に目をとおしておこうと思ったのだ。着替えて机に向かうと、そこには双眼鏡が前の晩のままに置いてあった。

亮二は双眼鏡で、通りを覗いてみた。歩いている人達の殆どが、駅のほうに向かっていた。みんな大人だった。少し双眼鏡を動かしていると、ひとりだけ駅のほうから歩いて来るのが眼に入った。セーラー服だった。亮二の中学の制服だった。ピントを合わせると、みどりだった。

双眼鏡でみどりの顔を見ながら、亮二は三十秒ぐらい考えた。そして、部屋を飛び出して、階段を駆け降りて、通りに立った。変に思われないように呼吸を整えてから、何気ない素振りでみどりのほうに顔を向けた。

「おっ、おはよう」

「あらっ。おはよう」

みどりはきょとんとした顔をしていた。

「坂口君、なにしてるの?」

「なにって……うん、いま起きてさ。ちょっと散歩でもしようかなって、思ってさ」
少し声が上ずっているようであった。
「星野さんこそ、なにしてんの。なんか、クラブに入ってたっけ?」
「クラブなんか、入ってないわよ、あたし。なに言ってるのよ、遅刻しちゃうじゃない。早くしなきゃ」
遅刻。なんだ、それは。
「馬鹿ねえ。今日は登校日じゃないの」
亮二はすぐに理解した。
「なに言ってんの」
「なによ」
「一日、間違えたんだよ。登校日は昨日だぜ」
「えっ?」
みどりはまたきょとんとした顔になった。
「だから、昨日来なかったのか」
「……本当に昨日だったの?」
「本当だよ。俺、昨日行ったもん」
「そういえば、誰も歩いていないんで、おかしいなとは思っていたんだけど……」
みどりの身体から、力が抜けたようであった。逆に、亮二は力を入れなければと思った。

「あたし、夏休みになってから、ずっと横浜に帰っていたから」
「関係ないじゃん。予定表に書いてあるんだからさ」
「そうね」
みどりは周囲を見まわした。
「じゃあ、学校行っても、しょうがないんだ」
「クラブ活動の奴しかいないよ」
「せっかく早起きして来たのに」
「どれぐらい時間かかるの?」
「一時間ぐらいかな」
そろそろ話題を学校から変えなければならない。
「あのさあ、こないだ、星野さんのこと、見たよ」
「えっ、いつ?」
「ええと、一週間ぐらい前かな、品川駅で。おっきなバスケット、持ってたな」
「ああ、わかった。お母さんと親戚のうちに行ったのよ。なんだ、呼んでくれればいいのに」
「だってさあ、俺、京浜東北線に乗ってたからさあ。窓から見たんだよ」
「へえ、よくあたしってわかったわねえ」
「うん、文康といっしょにいてね。文康が見つけたんだよ」
「そうなの」

「おっきな荷物だったね」
「あれねえ、仔犬なの」
「……」
「うちでシェパード飼っててね、仔犬生んだの。それで、一頭、叔母さんちにあげることになってね。持ってくとこだったの」
　仔犬か。犬か。シェパードか。名犬リンチンチンだ。名犬ロンドンだ。みどりは犬を飼っているのだ。
「さっきねえ、坂口君、だから昨日来なかったのかって言ったじゃない？」
「うん」
「どうしてわかったの？」
「どうしてって……」
　亮二は口ごもってしまった。みどりは下を向いてしまった。おかしな沈黙の時間になってしまった。なんでもいいから、喋らなければならない。
「あのさあ、今日、これからどうするの？」
「そうねえ、しょうがないから、せっかく大森まで来たんだから、おばあちゃんちに行くわ」
「宿題、もうやった？」
「まだ全部はやってないけど」
「あっ、そう。俺、ちょっとわかんないとこ、あるんだけどさ。教えてくれないかな、やるこ

CamScannerでスキャン

とないんだったら」
「いいわよ」
「そう。じゃあ、やろう。今日、宿題」
「ええ」
どこでやるんだ。うちは駄目だ。だいいち文康との約束はどうするんだ。文康の家には電話はないんだ。どうすればいいんだ。みどりの顔を見つめたまま、亮二は必死になって考えていた。

3 三人の町

亮二は奇妙な夢をよく見た。目を覚ましてから思い出してみるのだけど、わけのわからないものが多かった。わけはわからないけれど、それらは基本的に恐ろしい夢であった。それに気がつくのは、いつもその夢を見てからしばらく時間が経ってからであった。

授業中にぼんやりとしている時とか、学校から家まで歩いて帰っている時などに、突然三日前に見た夢がとても恐いものであったということに気がつくのであった。なんとなく、死にまとわりつかれているような気分になることもあった。

どこへ行ってもひとが死んでいる、という夢を見たことがあった。道を歩いていて何気なく小石を蹴飛ばすと、それが子供の頭に当たって死んでしまうのだ。その子といっしょに遊んでいた子供達に追いかけられて、走って逃げるということになる。

近くのパン屋に逃げ込むと、そこには天井から首吊り死体がぶら下がっていた。あわててそこから飛び出して、大きな古い洋館のドアを開けると、口から血を吐いた男が、床に倒れていた。その家からも逃げ出して、次に行くと……。

これが、ずっと続くのである。この夢を見た時は、起きてからもしばらくの間は気持ちが悪かった。まるで小泉八雲ののっぺらぼうだなと思った。しかし、目を覚ました直後は、恐怖感はないのである。例によって、何日か経ってからぞっとするのであった。

苺畑へ行って一所懸命になって、苺を踏み潰しているというのもあった。畑は真赤になってしまって、まるで血の海のようであった。畑から出て本物の海へ行くと、そこでは何人もの男がひとりの男をよってたかって日本刀で斬っていた。どうすればいいのかわからなくて、ただ黙ってそれを見ているのである。

直接死とは関係はないけれど、おかしな夢もあった。階段の手摺の上をすべるのである。小学校でよくやったようにうつぶせにではなくて、滑り台のように仰向けになってすべって行くのである。そして、手摺の終わりのところで、そのまま身体が浮いてしまうのであった。

ふわふわと浮くのである。窓から外へ出て、そのままふわふわと浮いて行くのである。身体の状態が、例えばスーパーマンのようにうつぶせではなくて、仰向けに椅子に腰かけたような形なので、自分でも不自然だと思っている。しかし、そのままふわふわと、町の上を浮いて行くのである。空を浮かんで、飛んで行くのである。

風邪をひくと、必ず見る夢もあった。そこいらのあたりいっぱいに、綺麗な色とりどりの宝石のようなものが輝いている。ところが、しばらくするとその美しい宝石が、全て雪か灰のような白いものに変わってしまう。その真ん中にちょっとでも触ったらぼろぼろと崩れ落ちてしまいそうな、白い棒が一本突き刺さっているのである。

今回の風邪でも、亮二はその夢を見た。夕方目を覚ました時に、あの棒は骨なのではないだろうかと思った。火葬場のお骨なのではないだろうか。亮二は物心がついてから、すでに五回葬式に立ち会っている。

父のほうの祖父、祖母、母のほうの祖父、祖母、そして叔母。中学二年で五回は、多いほうだろう。その五回とも、火葬場の骨揚げに出ている。灰の中の白い骨なのかも知れない。

何故こんな夢ばかり見るのだろうかと考えているうちに、今日は骨の夢の他にビートルズの夢も見たことが脳裏に甦ってきた。風邪で学校を休んでいながら、午前中はずっとビートルズのレコードを聴いていたのだ。ポータブル電蓄を枕もとに持ってきて、蒲団の中に入ったままで、亮二はビートルズを聴いていたのであった。

夢の中で、ビートルズは演奏をしていた。曲がなにかはわからないけれど、実に気持ちが良さそうに演奏していた。「これがビートルズだ」や「ビートルズがやって来る　ヤア！　ヤア！　ヤア！」や「エド・サリバン・ショウ」などで見たとおりに、ビートルズはかっこ良かった。

並び方もいいのだなと、夢の中で亮二は思った。ジョンが右のスタンド・マイクの前で、足を開き気味に立って歌っている。ポールとジョージが左のスタンド・マイクの前で、顔をくっつけてバック・コーラスをつけている。その二本のスタンド・マイクのちょうど真ん中あたりの後方で、リンゴがドラム・セットに座っている。

なおかつ、左端のポールが左利きで、ベース・ギターのネックが左に向かっているから、隣

のジョージとの対比もとれるし、全体の形も整う。四人とも、汗で前髪がぴったりとおでこにはりついていた。ビートルズは一曲を何十分も演奏していたようだった。

亮二は蒲団から脱け出ると、パジャマの上にセーターを着て、階段を降りて行った。母が夕食の仕度をしていた。

「目が覚めたの？」

「うん」

「熱はどう？」

「もうないみたい」

「でも、まだ気をつけなきゃ駄目よ」

「うん」

父も兄も、まだ帰って来ていないようであった。

「さっきね、木村さんちのみどりちゃんが来てくれたわよ」

「へえ」

「学校のプリントを持ってきてくれたの」

二年生になって、亮二はまたみどりと同じクラスになったのであった。

「おあがりなさいって言ったのに、すぐに帰っちゃったのよ。そういえば、みどりちゃんがうちに来たのは、初めてだったわねえ」

「そうお」

亮二は無反応を装っていた。そして、遠まわしに話を進行させた。
「兄ちゃんは？」
「まだ帰ってきてないわよ。もうそろそろじゃないかしら」
母は時計を見上げた。五時半であった。
「お父さんは？」
「まだよ」
「今日は、何時頃出てったの？」
「お昼過ぎかしら。どうして？」
「べつになんでもないけどさ」
良かった。みどりは酔っ払った父とは会っていないのだ。
「御大事にって言ってたわ、みどりちゃん。明日から学校行きますからって、言っといたわよ」
「あっ、そう」
亮二はテレビのスイッチを点けた。

小学校の時のように、亮二はみどりと普通に話が出来るようになっていた。二年になって同じクラスになって、よけいに平気で喋れるようになった。しかし、それは別の見方をすると、ただのクラス・メイトに戻ったということでもあったのだ。

たしかに、みどりのことを考えるだけで胸がうずく、というようなことも少なくなっていた。話をしているだけで心臓の音が聞こえないだろうかと、不安になる回数もずっと減ってきていた。

つまり、学校の中だけでの、仲の良い友達にすぎないのである。変わったところといえば、クリスマス・カードと年賀状が来るようになったというだけなのである。これではいけないとは思っている。しかし、これ以上どうすればいいのか、亮二にはわからなかった。

なにかふたりだけの秘密のようなものを作らなければいけないのではないだろうかと思いながら、亮二は教室に入って行った。みどりはもう席に着いていて、亮二を見ると近づいて来て言った。

「あら、もういいの?」

「うん。昨日プリント持ってきてくれたんだってね。ありがとう」

ふたりだけにしかわからない話題を探さなければならない。なにかないかなあ。数日ぶりにみどりの白い顔を見ながら亮二が焦っているところに、隣の席の斉藤レイがやって来てしまった。

「おい、坂口。もういいのか?」

「うん、もう大丈夫」

「本当か、俺にうつすなよ」

「心配すんなよ、大丈夫だから」

斎藤は鞄の中身を机に入れてから、みどりを見て言った。
「明後日さあ、俺の誕生日なんだ」
「へえ、そうなの。斎藤君、おめでとう」
みどりが嬉しそうに言った。
「だからさあ、今度の日曜にうちでバースデイ・パーティーをやろうと思ってるんだけどさ、来ない？」
なんだ、こいつは。みどりを誘っているのか。
「ええ、行くわ」
なにがバースデイ・パーティーだ。誕生会って言え、誕生会って。馬鹿野郎。
「坂口は、もちろん来るだろ？」
あっ、俺も誘われていたのか。
「ああ、行くよ。おまえの誕生日ならさ」
斎藤の父親は、アメリカ人であった。レイという名前は、レイモンドの略であると聞いたことがあった。つまり、混血児なのである。レイの姉はテレビ・タレントで、亮二も何度かバラエティー番組で見たことがあった。
「こないだの『エド・サリバン・ショウ』で、ビートルズがはいてたブーツあったじゃん」
レイが今度は亮二のほうを向いて言った。
「ああ、なんか細くてさ、かかとが高くなってる奴だろ」

「そうそう。あれと同じの、姉ちゃんが見つけたんだって。それで、それ買ってもらうんだ、誕生日のプレゼントに」

「へえ、いいなあ、おまえ」

なにかプレゼントを買って、持っていかなければならないのだ。困ったなあ。そんな亮二の心配も知らずに、斎藤は続けて言った。

「ビートルズが着てるのって、みんなかっこいいもんな」

みどりがくすっと笑って言った。

「坂口君はねえ、夏休みの間、髪の毛のばしていたのよ」

「へえ」

斎藤が驚いたような顔をした。

「本当かよ。登校日なんかどうしたんだよ」

「平気だよ。先生に訊かれたけどさ、病気で寝てましたって言っちゃった。あとからばれちゃったけどさ」

「へえ、俺、夏休み、アメリカ行ってたからな。ちっとも知らなかったよ」

「六月の終わりに床屋行ってから、八月の終わりまでのばしてたんだよ」

「じゃあ、始業式のぎりぎりに切ったんだ」

「そう、八月三十日。床屋でバリカンで刈り上げられちゃってさあ、やんなっちゃったよ」

一時間目のベルが鳴った。席に戻る前にみどりが顔を近づけて、「あとで、ちょっとね」と

言った。なんだ、あとでちょっとねというのは。斎藤の家に行く相談だろうか。
休み時間の度に亮二はみどりに訊ねてみたのだけど、みどりはあとであとでと言うだけであった。なんだろう。亮二は気になって、しょうがなかった。どうも他の人間には聞かれては困るようなことのようである。亮二とみどりだけの、ふたりだけの秘密の話のようであった。なんとなく、亮二は嬉しくなってきた。

昼休みになって、みどりが亮二のところにやって来た。
「なあに?」
「いいから、ちょっと来て」
みどりは亮二を、あまりひとのいない校庭のはずれまで連れて行った。なんなのだろうか。
亮二は久し振りに、胸がどきどきしてきた。
「このごろ荒川君と会ってる?」
「そうだなあ、そういえばしばらく会ってないなあ」
なんだ、文康のことか。
「どうして?」
「どうしてったって、クラスも違うしさあ」
みどりは思い切ったように言った。
「あたしが一年の時同じクラスだった子が、いま荒川君と同じクラスなの。その子が言ってた

んだけど、荒川君ねえ、変な友達とつきあってるんだって」
「なんだよ、変な友達って?」
「だから、不良よ」
「まさか。誰だよ、そんなこと言う奴。文康だぜ、文康。星野さんだって、知ってんだろ。不良とつきあえるわけないじゃん、あいつが」
「初めはあたしも、そう思ってたの。だけどね、荒川君ね、このごろ学校もずる休みしてるみたいよ」
「まさかあ。あいつ、そんなこと出来ないって」
「坂口君が風邪で三日間学校休んでたじゃない。その最初の日に聞いたの。だから、その子のクラスに見に行ったの。やっぱり休んでいたわ」
「あいつも風邪ひいたんじゃないのかなあ。あいつ、俺なんかより、身体弱いほうだから」
「だって、一週間に一回は、必ず休んでいるのよ」
「じゃあ、ちょっと、いまから文康のクラスに行ってみようか」
「駄目よ。今日も休んでるから」
亮二の胸のときめきは、なくなっていた。なんだ、文康のことなのか。
「昨日、坂口君ちに行った時も、出来たらその話をしようと思ってたの」
「ふうん」
「だからね、坂口君、一度、荒川君と会って話してみてよ。その子に聞いたら、荒川君、あの

クラスには友達いないみたいだから」

「そんなの簡単だけどさ。不良っつったって、どんな奴なんだろうな?」

「よくわかんないんだけど、高校生みたいよ。荒川君、喫茶店でいっしょに煙草も吸ってたんだって」

「喫茶店って、どこ?」

「駅前のコンドルだって」

「なんで、そいつ、知ってんの?」

「あそこ、ガラスばりじゃない。外から見えたんだって」

「不良っつったってなあ。髪の毛のばしてた時、俺も不良みたいだって言われたもんなあ」

「坂口君、休んでたでしょ、ずっと。もし今日も坂口君来なかったら、あたしが場所聞いて荒川君ちに行こうと思ってたのよ」

「あっ、それ、やめたほうがいいよ。俺が行くよ、今日、学校の帰りにさあ」

文康の住んでいるあたりには、荒れた雰囲気があった。小学生の頃に亮二は何度も遊びに行っているのだけど、自分の住んでいるあたりとは異なった感覚があって、いつも少し身がまえるような態度で歩いていたのだった。みどりなんかには、ちょっと無理である。

「あたしもいっしょに行くわ」

「いいよ、大丈夫。俺ひとりで行くから」

何故みどりは文康のことなどを、こんなに気にしているのだろうか。俺のことを気にしてく

れればいいのにと、亮二は思った。

「話って、それだけ?」

「そうよ」

他になにかあったかしらというような顔を、みどりはした。

校門を出て、臼田坂までは、亮二はみどりといっしょだった。みどりはいつものように、このまままっすぐに歩いて行く。亮二は右に曲がって、文康の家のほうに行くのである。

せっかくみどりとふたりだけの秘密が出来たというのに、それは文康のことであった。出来ることならこのままみどりといっしょにいたいと、亮二は思った。しかし、そういうわけにもいかない。

「じゃあ、俺、文康んち、行くから」

「あとで、うち来てね。電話でもいいけど」

みどりはもう一度あとでねと言って、歩いて行った。みどりのうちか。そういえば、みどりが亮二の家に入ったことがないように、亮二もみどりの家に行ったことはなかったのだ。みどりのほうから、うちに来てねと言ったのである。亮二は楽しみが増えたような気になった。だけどこれが文康のことでなかったらもっと楽しいのに、とも思った。

柳本通りを横切って、つい二年前まで通っていた小学校の横を通って、線路ぞいに少し歩いて、京浜東北線のガードをくぐって、もう少し行くと、街の雰囲気は一変した。

CamScannerでスキャン

荒川は殆ど流れていなかった。ガスのあぶくが浮いてきていた。橋の横には砂利が積まれてあって、通りにくくなっていた。一升壜やビール壜が割れて、道路の真ん中に散乱していた。機械の音がつけっぱなしのラジオを、完全に圧倒していた。ある工場の前では油の匂いが流れてきて、ある工場の前では鼻につんときた。煙突の先から、もくもくと煙が出ていた。不思議な色の煙だった。

文康の住んでいるアパートは、日の当たらない湿った路地の裏にあった。入口で靴を脱いで、手に持って上がる。二階の文康の部屋に向かう。「荒川」と書いた紙切れが、画びょうがずれてはずれそうになっていた。

亮二はドアをノックしてみた。予想していたとおりに、返事はなかった。文康と呼んでもみたけれど、同じように返事はなかった。亮二が声を出したら、周囲の部屋の物音がしなくなったように思えた。

隣の部屋から子供が出て来て、階段を降りて行った。亮二はあわてて声をかけた。

「ねえ、ここのお兄ちゃん、荒川さんの文康兄ちゃん、知らない？」

「知らねえよ」

子供は振り返りもしないでそう言うと、飛び出して行った。

五分ぐらい待って、亮二はあきらめた。一度うちへ帰って着替えて、コンドルに行ってみようかな。靴をはいて路地を出たところで、声がした。

「あら、坂口君じゃないの」

文康の母が帰ってきたのであった。

「こんにちは」

「どうしたのよ、久し振りじゃないの。元気?」

「ええ」

「文康といっしょなの?」

「いえ、いま来てみたんですけど、文康君いないんで、帰ろうかと思ってたんです」

「じゃあ、まだ学校じゃないの?」

「……」

「なんか、このごろクラブで遅くなるのよ、帰りが」

「……そうですか」

「中学になって、クラス変わっちゃったんだってねえ。三年から六年まで、四年間同じだったのに」

「ええ。だから、あんまり学校でも顔合わせなくなっちゃったんですよ。で、今日ちょっと来てみたんですけど」

「文康の教室に行けば、いいじゃないの」

「……ええ、そうなんですけど。今日は久し振りだから」

「まあ、おあがりなさいよ」

「いや、いいんです。また来ますから」

CamScannerでスキャン

亮二は会釈をして、また機械の音のする道路に出て行った。

亮二は家に帰って、着替えをした。そして、母に本屋に行ってくると言って、駅前に向かった。しかし、こんな服装で、喫茶店に入れるのだろうか。普通のシャツに普通のズボンである。もっと不良っぽい格好をしてきたほうが良かったかな。だけど、これしかないじゃないか。亮二は不安であった。

十分も経たないうちに、亮二は喫茶店コンドルの前に着いてしまった。どうしようかな。入ろうかな。不良がいるのかな。だいいち、入れてくれるのかな。亮二は店の前の大きなガラス窓の前を何度も行ったり来たりして、中を覗いた。

どうやら文康はいないようであった。文康がいないのだったら、わざわざ店の中に入る必要もない。なんとなく、亮二はほっとした。みどりに電話しよう。家にもコンドルにも、文康はいなかった。明日でも明後日でも、会って話をするよ。

いや、電話をすることはないんだ。家に行って、直接みどりに話せばいいんだ。みどりの家に行くんだ。どうしようか。いま来た道を戻りながら、亮二は不安になってきた。柳本通りを郵便局の前で右に曲がって、亮二は参道に入った。

二年前、そこにみどりがいるかも知れないというだけで、亮二はこの道を意味もなく歩いたのであった。そして、今日はみどりに家に来てねと言われて、行くのであった。そういえば、あのナイフ、どこにしまってあったっけ。

木村家の格子戸を開けて入ると、左側は庭になっていた。池があって、なにか魚がいるようであった。外から見るよりも、内部はずっと広いようである。玄関のベルを押すと、みどりの祖母が出てきた。

「あら、坂口さんの亮ちゃんじゃないの」

「こんにちは」

こんにちはと言いながら、亮二はもう夕方だからこんばんはのほうが正しいのではないだろうかと思った。

「なあに、みどりですか?」

「ええ。あの、いらっしゃいますか?」

「ちょっと待ってくださいね」

祖母は家の中に向かって、「みどり、亮ちゃんがいらっしゃったわよ」と声をかけた。みどりがすぐに出てきた。

「亮ちゃん、おあがりなさい」

「いえ、もうここで」

亮二は祖母に対して、いちおう遠慮をしてみせた。

「そんなこと言わないで、どうぞ。せっかくいらっしゃったんだから。亮ちゃんのおばあさんとは、御芝居や御相撲をよくごいっしょしたんですよ」

うちが芝居や相撲を観に行けたのなんて、いったい何年前のことなのだろうか。

「さあ、どうぞ。お遊びにいらっしゃったんでしょ」

なんと言ったらいいのだろうか。

「いや、あの、遊びにきたわけじゃあないんですけど。学校の……科学の教材で使い方がよくわかんないのがあるんで……」

それをさえぎって、みどりが言った。

「あれでしょ。あの実験のでしょ。今日、学校で言ってたのでしょ」

「そう、あれ、教えてもらおうと思って」

「さあ、どうぞ、どうぞ」

祖母は奥に消えて行った。

「ねえ、あたしの部屋へ来て」

「うん」

亮二はうなずいて、靴を脱いだ。

みどりの部屋は、洋室であった。外観は日本家屋であるし、玄関からみどりの部屋までもずっと和風であったのに、ここだけは洋室なのである。

「へえ、星野さんの部屋って、洋室なんだ」

「そうなの。六年生でこっちに来た時に改築したの。中学校の三年間、ずっとじゃない。ひょっとしたら、高校もここから行くかも知れないし」

「俺は中学に入ったら、すぐに横浜へ帰っちゃうんじゃないかって思ってたんだけどさ。だけど、いいなあ。俺んとこなんか畳でさ、その上にカーペット敷いてんだぜ」

　いい匂いがする。

「ベッドなんかも、本物なんだ」

「何よ、本物って?」

「うちなんかさあ、こないだまで兄貴と二段ベッドで寝てたんだよ。それをちょん切って、いまふたつに分けて使ってんだ」

「変なの」

　みどりが笑った。

「広いんだね、星野さんちって」

「いま、あたしとおばあちゃんしかいないからね。あたしの部屋とおばあちゃんの部屋と茶の間ぐらいしか、使ってないから」

「その他に、いくつ部屋あんの?」

「三つかな」

「二人で六部屋か。うちなんか、四人で三部屋だぜ。俺が生まれた頃なんて、親戚がいっぱいでさ、十一人もいた時があったんだって」

「でも、にぎやかなほうがいいわよ」

　みどりは下を向いてしまった。なにをしにここへ来たのだろうか。そうだ。

CamScannerでスキャン

「文康んち行ってみたんだけどさ、いなかったよ」
「そう」
「コンドルにも行ったんだけどさ、やっぱりいなかった」
「中へ入ったの？」
「うん、まあね」
亮二は見栄をはった。
「喫茶店なんかよく行くの、亮二君も？」
「いや、二〜三回かな、行ったの」
「へえ」
話を変えなければ。
「だけど、文康が煙草吸ってたなんて、信じられないなあ」
「そうね。だけど、本当みたいよ。亮二君は煙草吸ったことあるの？」
「一回だけね。斉藤といっしょにね」
「どうだった？」
「うまくないよ、あんなもの。いがらっぽいだけで」
「お酒は？」
「ビール、飲んだことあるよ」
「どうだった？」

「苦いだけ。よくあんなもの飲むよな」

まずい、酒の話はやめにしよう。

「文康さあ、明日は学校に来るだろうからさあ、俺、話してみるよ」

「そうね」

「来なかったら、もう一度家に行ってみるしさ」

「みどり、お紅茶取りに来なさい」という声が聞こえた。みどりがちょっと待っててねと言って、部屋を出て行った。

亮二はひとりで、みどりの部屋にいた。みどりの勉強机の椅子に座っていた。俺はいまみどりの部屋にいるのだ。目の前にあるベッドには、いままでみどりが座っていたあとが窪みになって残っていた。みどりはここに寝ているのだ。あの箪笥には、みどりの服が入っているのだ。

紅茶とケーキを持って、みどりが部屋に戻ってきた。

「あたしの部屋に男の友達来たの、亮二君が初めてよ」

「俺だって、女の子の部屋って初めてだよ」

いま俺はみどりの部屋で、みどりとふたりっきりでいるんだ。変な気分になってきた。胸がどきどきしてきた。亮二はみどりに襲いかかりそうで、自分で心配になってきた。

「ねえ、亮二君。今度ビートルズのレコード貸してね?」

「いいよ。普通はさあ、貸さないんだけどさ、星野さんだったらいいよ」

「どうして?」

「どうしてったって……」
突然、みどりが亮二のことを亮二君と呼んでることに、亮二は気がついた。いつだって、坂口君だったのに。
「あたしねえ、今度ステレオ買ってもらうの」
「へえ。ちゃんと音が分かれる奴？」
「なに、音が分かれるって？」
「俺のはねえ、ポータブル電蓄なんだよ。だから、分かれないの、ステレオのレコードでも」
「へえ。あたしのはね、ちゃんと分かれるの」
亮二は思い切って言った。
「だけど、どうしてなの、みどり？　斉藤みたいに、誕生日なの、みどり？」
ちょっと露骨だったかなと、亮二は思った。
「べつにそうじゃないけど、お父さんが買ってくれるっていうから」
みどりという呼び声がして、みどりはまた部屋を出て行った。また亮二は、ひとりになった。
庭の木がざわざわいった。風が出てきたようだ。亮二は手をのばして、みどりが座っていたベッドの窪みを触った。暖かかった。
みどりが部屋に戻ってきて言った。
「おばあちゃんがおつかいに行ったの」
ということは、この家の中は亮二とみどりのふたりだけということになる。

「亮二君、ビートルズのレコード、なに持ってんの?」

「シングル盤は、全部持ってるよ。LPは『ビートルズがやって来る』と、こないだ買ったばかりの『ヘルプ!』の二枚だけだけど」

「へえ、LPレコードも持ってるの」

「シングル盤はモノラルだから、音分かれないけどさ、LPはステレオだから、音分かれるんだよね」

「ステレオ買ったら、貸してね?」

「いいよ。俺もさ、ステレオのレコードなのに、ステレオで聴いたことないからさ。聴きにくるよ」

　風が強くなってきたようだ。雨が降るのだろうか、暗くなってきた。いや、もう夕方なのだ。部屋が夜の中に入ってきた。

　話が途切れてしまった。しかし、黙ったままでもいい、このままみどりといっしょにいたい。しかし、亮二の口から出た言葉は、全く違っていた。

「じゃあ、帰るよ」

　玄関まで行くあいだ、亮二もみどりも黙りこくっていた。亮二は座って、ズック靴の紐を結び直した。

「明日、荒川君、学校来るといいんだけどね、亮二君」

　みどりが立ったまま言った。

「そうだね、みどり」

亮二が顔を上げると、目の前にみどりの白い小さな膝小僧があった。見上げると、みどりがなあにというようなきょとんとした顔をしていた。亮二は立ち上がって、さっとみどりのスカートをめくった。夕方の薄闇の中でみどりの白い下着が一瞬光ったように、亮二には見えた。

みどりは声も出さずに、息を呑んで立っていた。そのまま時間が止まってしまったように、亮二は思われた。長い長い時間が経ったような気がした。しかし、実際にはそれは十秒ほどであったのだろう。みどりが手でスカートを押さえて、二〜三歩下った。

「亮二のエッチ」

みどりが小さな声で言った。

「ごめんね」

亮二も小さな声で言って、外へ出た。

その晩、亮二はみどりのスカートを、夢の中でもめくった。それだけではなくて、白く輝く下着も脱がせた。みどりの下着の中には、なにもなかった。それも恐ろしい夢には違いはなかった。

4　F列十二番

うちから大森駅まで、歩いて十分。バスに乗れば、三分ぐらいだろう。大森駅から京浜東北線に乗って、有楽町まで行く。これが二十分ぐらいはかかるだろう。有楽町の新橋寄りの改札口から出て、日劇の裏側から新聞社の輪転機の見える道を通って、西銀座デパートのところで右に曲がって、ラジオのサテライト・スタジオの前まで歩く。五分もかからないだろう。そこから都電に乗って、九段下まで。これも、二十分ぐらいだろう。停留所から歩いて五分で、武道館である。

これが最短距離ではないかも知れないけれど、ともかく亮二の知っている行き方の中では一番時間のかからない方法である。うちから武道館まで、一時間ぐらいで行けるはずである。一時間半あれば、充分である。いや、念のために二時間前には家を出ればいい。

五月の最後の日曜日、亮二は武道館まで行ってみた。かかった時間は、だいたい予想どおりであった。武道館の中には入れなかったので、亮二はそこいらへんをうろうろと歩きまわった。本当にここでビートルズが演奏をするのだろうか。そして、その時亮二は客席に座っていられ

るのだろうか。

六月三十日から七月二日までといえば、ちょうど中間テストの時である。高校入試の内申書にも関係してくるからよく勉強をするようにと教師は言っていたけれど、そんなことはどうでもいい。高校入試とビートルズの公演とどちらが大切かといったら、ビートルズに決まっているじゃないか。

午前中には学校は終わってしまうから、家に帰って昼食をとってから出かけても間に合う。これで、当日あわてなくても、武道館に来られる。問題は、ただひとつである。切符が買えるかどうかということだ。

往復葉書で申し込んで、抽選で五万人しか当たらないのだ。亮二は当たるのだろうか。もしも当たらなかったとしたら、いったいどうすればいいのだろうか。また、当たったとしても、その代金をどうしよう。千五百円、千八百円、二千百円、の三段階である。

そんな余分な金は、亮二にはなかった。ここのところの家の経済状態では、父や母にも頼めるはずがない。父はまた毎日酒を飲んでいるのだし。しかし、なんとかしなければならない。いまからアルバイトをしようか。無理だ。

ともかく行きたい。席なんかどこでもいいから、ともかく武道館でビートルズを観たい。ビートルズが演奏している同じ屋内に、亮二もいたいのだ。しかし、切符は手に入るのだろうか。代金を支払えるのだろうか。それでも、往復葉書の申し込みだけはした。

しかし、大好きなビートルズが日本で公演をするというのに、何故こんなに考え込まなけれ

ばならないのだろうか。こんなことになるのなら、日本に来ないほうがいいくらいだ。俺が観れないのだったら、日本公演なんて中止になったほうがいい。
　ビートルズの日本公演が正式に発表されてから、日が経つにつれて亮二は不機嫌になっていった。毎日みどりは亮二に、ビートルズの話をするようになっていた。ステレオを手に入れたみどりは、すぐに亮二よりもたくさんのビートルズのレコードも手に入れた。LPに入ってい
る亮二のまだ聴いたことのない曲も、みどりはもう知っていた。亮二はLPは、まだ全部そろえられなかったのだ。
「なんか、亮二君、このごろ変よ」
「なにが？」
「なにがって、なんとなく」
「いいじゃん」
「いいんだけど……日曜日に武道館行くって言ってたけど、行ったの？」
「行ったよ」
「どうだった？」
「どうだったって、あったよ。大きかったよ」
「それだけ？」
「うん」
「変よ、亮二君。おかしいわよ、このごろ。ビートルズが来るっていうのに」

みどりはビートルズ来日公演に、切迫感はないのだろう。亮二よりもたくさんのビートルズのレコードを持っていても、公演が観られなくてもそれほどのことではないようだ。いちおう申し込み葉書は出しておいたという。それも、「もしあたしが当たって、亮二君が外れたら、あたしの亮二君にあげるね」というのである。

亮二とみどりは三年になって、また別々のクラスに分けられてしまった。それでも、一日に一度は顔を合わせていた。なんとなく、おたがいにボーイフレンドとガールフレンドの関係である、というような意識が出来あがっていた。

つきあっているといえるほどではなかったけれど、みどりは亮二の一番の女の友達であって、亮二はみどりの一番の男の友達である、とふたりとも認識するようになっていた。会うのは、学校か家の近所だけであった。もっとも遠くに行ったのが、本門寺の図書館であった。

普段はなんともないのだけど、ふたりっきりになるといつでもみどりは身がまえるような態度になった。あのスカートめくりがいけなかったのだと、亮二は思っていた。いまではみどりがそんな態度をとると、亮二は「大丈夫だよ。スカートなんか、めくらないよ」と冗談めかして言うようになっていた。

しかし、その言葉を言う度に、亮二はそのあとの言葉を胸の中で呟いていた。「大丈夫だよ。スカートなんか、めくらないよ。もっと別のことがしたいんだよ」。もっと別のことというのは、なんなのだろうか。それが亮二にはわからなかった。

手を握るなどというのは、すぐにでも出来るはずだ。誰もいない道で手をつないで歩いたこ

とは、何度もあった。しかし、スカートめくりよりももっと別のことという意味で手を握ったら、それからどうすればいいのだろうか。キスをするなんていうのは、映画やテレビで見ると簡単そうに見えるけれど、実際に自分でやると考えたら、亮二にはとても難しそうで無理のように思えた。

　しかし、スカートめくりよりももっと別のことよりも、ビートルズの日本公演のほうが、いまの亮二には、ずっと大きな問題であった。

「ああ、そういえばねえ、斎藤君ねえ、ビートルズの切符、買えることになったんだって」

「えっ、もう当たった葉書が来たの？」

「そうじゃなくて、お姉さんの仕事の関係で、買えることになったんだって」

「へえ。でも、なんかずるいな」

　斎藤とも、クラスは別になった。それでも、時々家に遊びに行くことはあった。アメリカから送られてくるビートルズのレコードを聴かせてもらうためであった。

「亮二君も、頼んでみたら？」

「うん。だけどなあ……」

　なんかずるいな、それでは。それに、もし斎藤のおかげで切符が手に入ったとしても、代金はどうすればいいのだろうか。

　亮二が不機嫌なのは、母にもわかっているようであった。しかし、そのことにはあまり触れてこなかった。亮二も武道館に行ったことは、母には黙っていた。しかし、夕食の時、母はわ

さと明るい声で言った。
「どうしたの、亮二。なにかあったの?」
父はウイスキーの瓶を前にして、食卓に座っていた。兄はまだ高校から帰ってきていない。
亮二はぼそっと言った。
「ビートルズが来るんだ」
「知ってるわよ、それぐらい」
「観に行きたいんだ」
「そうねえ……」
父がグラスのウイスキーを一口飲んで、ひとり言のように言った。
「ビートルズなんざあ、俺が東興の伊藤にそう言やあ、簡単だあな」
亮二は黙っていた。それが本当なら、それが一番である。しかし、どうなのだろうか。母も黙っている。いま、父は毎日酒を飲んで、家にいる。最近は興行関係とも、あまりつきあってはいないようだ。銀座の映画館に連れて行ってくれることも、ずっとない。
「ビートルズなんざあ、おまえ。なあ、亮」
亮二は黙って、食べていた。母が言った。
「ビートルズねえ……でも、あれ当たらなきゃ、行けないんでしょ。当たると、いいけどね」
「当たっても、二千百円なんだ。一番安いとこでも、千五百円なんだ」
「二千百円ねえ……」

父は「ビートルズなんざあ」と、何度も繰り返し言った。しかし、無精髭を生やして、ステテコ姿で、ウイスキーをあおっている父に、それだけの力があるとは、亮二にはとても思えなかった。

学校から帰ってくると、郵便受けの中に亮二あての葉書が入っていた。ビートルズ日本公演の切符が買えるという返信であった。七月一日の金曜日、六時半の部、A席二千百円。当たったのであった。

亮二は自分の部屋に入って、その葉書を見ながらビートルズのレコードをかけた。最新アルバムの『ラバー・ソウル』である。こんなことになるのだったら、このレコードを買わなければよかった。いま亮二は、五百円しか持っていなかった。これでは、交通費でおしまいだ。いまから二千百円手に入れる方法が、なにかないだろうか。

階下で、電話が鳴った。母も兄もいない。帰ってきた時に寝ていた父は、どこかに出て行ったようだ。亮二は葉書を持ったまま階段を駆け降りて、受話器を取った。

「もしもし」

「もしもし、坂口さんのお宅ですか?」

文康の声であった。こういう時には、やけにていねいな言葉を使うのである。

「ああ、文康か。俺、俺」

「ああ、赤チン、いまなにしてるの?」

「そっか」
「ちょっと来ないか?」
「どこに?」
「コンドルにいるんだけど」
「なあに?」
「ちょっと、ちょっとな」
「わかった、行くよ」
　ここのところ、月に一度は必ず文康に会うように、亮二は心がけていた。高校には行くつもりだからそんなにずる休みはしないと、文康は言っていた。はっきりと説明はしないのだけど、どうも文康はどこかの工場で月に何回かアルバイトをしているようであった。不良と呼ばれる友達も、そこの工場の仲間のようであった。
　コンドルに入って行くと、奥のほうの席から文康が手を振った。隣の席には亮二や文康よりも二～三歳は上だろうと思われる、男がふたりと女がふたりいた。その中には、亮二にも見覚えのある顔もあった。きっと文康の連れなのだろう。
　文康の前の席に座ると、隣の席の四人がいっせいに亮二の顔を見た。
「赤チン、コーヒーでいいだろ?」
「うん」
　文康は大きな声でウェイトレスに注文をして、ハイライトを出した。文康と会うと、いつも

煙草を吸うようになっていた。もう噎せたり気持ちが悪くなったりすることもなくなった。
「なんだよ、文康?」
「いや、ちょっとさ」
　隣の席の女のひとりが、こっちを向いて言った。
「文康、これがおまえのダチかい?」
　たぶん、高校生だろう。目の周囲の化粧と口紅の色が派手であった。よしゃあいいのにと、亮二は思った。
「そう。こいつが、さっき言った亮二」
「いま赤チンって言ったじゃない。なによ、赤チンって?」
「ああ、赤チンね。それ、こいつの仇名」
　四人がいっせいに笑った。ひとりの男が、おかしそうに言った。
「赤チンかよ。おまえのチンポコ、赤いんじゃねえのか」
　亮二は黙っていた。よく見ると、いま亮二をからかった男は二年上級だった奴であった。そうすると、高校二年か。それとも、文康の行っている工場の工員なのだろうか。
　文康がとりなすように、亮二にハイライトを差し出した。少し落ちつかなければと思って亮二が一本くわえると、文康がすぐにマッチの火を点けた。
「おまえ、坂口だよな?」
　もうひとりの男が言った。

「そうだろ、堀口の弟だろ?　おまえの兄貴と、俺、中学の時同じクラスになったことあるんだよ」

「そうですか」

亮二はぼそっと言った。そうすると、こいつも高校二年だ。

「文康、用はなんなんだよ?」

「うん……」と文康が口ごもっていると、最初の男が立ち上がって亮二の隣に座った。

「よう、赤チン君よう。おまえ、斉藤って知ってんだろ?」

男は煙草の煙を、亮二の顔に吹きつけた。

「よう、知ってんだろ?」

「知ってますよ」

「やっぱなあ」

「だから、なんなんですか?」

文康があわてて、さえぎって言った。

「あのさあ、赤チン。斉藤と仲いいんだよな?」

「仲いいってほどじゃないけどさ」

「でも、家に行ったりしてるんだろ?」

なんだろう、これは。

「斉藤レイにさあ、姉さんいるだろ?」

「うん」
「姉さんも知ってるんだろ?」
「知ってるけどさ、それがどうしたんだよ?」
「あのさあ、あの斉藤の姉さんと会いたいんだって」
「誰が?」
亮二は嫌な気分になってきた。亮二の兄と同じクラスだったという男が言った。
「俺達だよ、俺達。他に誰もいねえじゃねえか」
文康がその男の顔と亮二の顔を見比べて、続けて言った。
「だからさあ、電話で呼び出してもらえないかなあ、赤チン?」
もうひとりの男も、文康の隣の席に移ってきた。ふたりの女は、亮二の後の席に来た。亮二は囲まれてしまったのだ。
「いいだろ、おい?」
「電話番号、知りませんから」
亮二はしらばっくれてみせた。亮二の隣の席の男が、嘘つけと呟いた。もうひとりの男が言った。
「じゃあ、家行ったことあるんだろ? 家行って、呼んできてくれよ」
「文康、これはどういうことなんだよ?」
亮二は文康を、にらみつけた。

CamScannerでスキャン

「だからさ、ちょっと会いたいだけなんだよ」
隣の男が、声を荒くして言った。
「なんで嫌がってんだよ、おまえ」
「嫌がってはいませんけど、俺が呼んでも来ないと思います。もう夕方だし、それにいないかも知れないし」
「それでもいいから、行けって言ってんだよ」
もうひとりの男が、ポケットから写真を一枚出した。
「おまえ、こういうの見たことあるか？」
裸の女の写真であった。
「欲しけりゃ、やるからよ。こんなの、何枚だってあるからよ」
「欲しくありません」
「無理すんなよ、見たいんだろ？」
隣の男が振り向いて、まだ口をきいていない女を指さした。
「なんだったら、こいつの裸見せてやったっていいんだぜ」
四人が声をたてて笑った。亮二はちらっとその女を見た。もうひとりの女と同じように、派手な化粧であった。しかし、その顔にも見覚えがあった。こいつも上級生なのだろうか。
「赤チン、これでレコードでも買えよ」
文康が千円札を二枚、テーブルの上に出した。

「いいな、おまえ。二千円とマリコの裸が見られるんだぞ」

隣の男が、楽しそうに言った。斎藤の姉のケイトがいくらテレビ・タレントだとはいっても、ただ会うだけのためにこんなことをするだろうか。二千円、そして女の裸。

いままで黙っていたマリコと呼ばれた女が、初めて口をきいた。

「なんだったら、ペッティングぐらいだったら、やらせてやってもいいよ」

また、四人が声をたてて笑った。

「文康、俺、帰るぞ」

立ち上がった亮二を隣にいた男が腕をつかんで、また座らせた。

「ふざけんなよ、おまえ」

どう考えても、これは恐喝だ。店の人間は、いったいなにをしているのだろうか。見まわすと、店の中に他の客はいなかった。ウェイトレスは関係がないとでもいうように、カウンターの中のボーイと話をしていた。

文康を見ると、困ったような顔をしていた。しかし、斎藤の姉を呼び出せないと困るという顔ではなかった。こんな恐喝のようなことになって困っているという顔であった。文康も本当はこんなことはしたくないのではないかと、亮二は思った。そうすると、俺がうまくここから逃げ出せば、それですむのだ。

「よう、おまえ。あんまし格好つけんなよ」

隣の男がそう言った時に、亮二は立ち上がって、マリコという女の横をすり抜けて、出口に

走った。

文康の隣の男が、立ち上がって言った。

「おまえ、逃げる気かよ」

「逃げるもなにもないだろ。あんた、うちの兄貴と同じクラスだったんだろ。文句あんなら、うちへ来りゃあいいじゃないか」

文康には可哀相だけど、しょうがない。亮二はドアを押して、外に出た。

念のために、亮二は裏道を通って、家に帰ることにした。歩きながら、二千円とマリコという女の裸のことを考えた。横をすり抜ける時に、女が立ち上がりかけたので、邪魔をされると思って、女を押し返した。その時、女の胸に触ってしまったのだ。その女の胸のふくらみの感触が、まだ亮二の手に残っていた。

「二千円と女の裸か」と、亮二は声に出して言ってみた。あの女、ペッティングと言っていたな。ペッティングって、なんなんだろう。たぶん、性的なことには、間違いはないだろう。しかし、それがなんなのか、亮二にはわからなかった。それよりも、金だ。二千百円だ。金だ、金だ、金だ。亮二は何度も呟いた。

バス通りから一本裏に入っただけだというのに、この道にはひと通りは全くといっていいほどになかった。夕方の中に、道が続いている。まっすぐに行くと、参道にぶつかる。そこを左に曲がると、すぐにみどりの住んでいる家があって、商店街に出ることになる。

CamScannerでスキャン

この裏通りには、ぽつんぽつんと自動車が止めてあった。ふと思いついて、出来るだけゆっくりと、一番近くに止めてあった自動車に、亮二は近づいて行った。誰も乗ってはいない。助手席のドアに手をかけようとした瞬間、そこの家の電気が点いた。亮二はあわてて自動車から離れて、なにもなかったかのように歩いた。

二十メートルぐらいのところに、次の自動車があった。周囲をよく見まわしてから、亮二はドアを引いた。ドアは開かなかった。次の自動車も、キーがかけてあった。亮二は腹が立って、ドアの把手に手をかけたまま、自動車を揺さぶった。バック・ミラーにぶら下がっていたピエロが、亮二を馬鹿にするように揺れた。

参道から十メートルぐらいのところにあった六台目の自動車のドアを確めると、なんとドアが開いた。亮二は驚いてしまって、焦った。もう一度通りを見まわしてみたけれど、誰もいなかった。どうしようか。亮二はドアを開けて、車内を覗いた。シートの上には、なにもなかった。

このまま半開きのドアに上半身を突っ込んでいるのを見られたら大変だ。亮二は自動車の中に入った。出来るだけ頭を低くして、ダッシュ・ボードを開けてみた。中には地図しか入ってなかった。

フロント・ガラスの向こうに人影が来た。亮二はあわてて床に屈んだ。見つかったらどうしよう。ここらへんのひとだったら、亮二だということはすぐにわかるはずだ。しかし、その人影は何事もなく、通り過ぎて行った。

もう嫌だ。早くここから逃げ出そう。起き上がろうとした時に、アクセルの下にハイライトが一箱落ちているのが見えた。亮二はその封の切られた煙草を、手に取った。するとその下から、今度は上等そうなライターが出てきた。女物のような、ガス・ライターであった。亮二は煙草とライターをポケットに入れて、外をうかがって自動車から出た。

道には、誰もいない。亮二は煙草を一本出して、ライターで火を点けた。こんなもんなんだろうな。金を盗もうなんて、考えたほうがいけないのだ。そんなにうまくいくはずがない。それでも、煙草とライターは自動車には戻さないで、ポケットに入れた。

角を曲がって、参道に出ると、ひとつの人影がやって来た。六月の夕方のぼんやりした空気の中から、みどりが現われたのであった。

「あら、亮二君」

危ないところであった。あと一分遅れていたら、見られていたかも知れない。

「なによ、煙草吸ってるの？」

「あっ、うん。いいじゃん、これぐらい」

「こんなところで吸ってたら、誰かに見つかるわよ」

「いや、ちょっとね。いま文康といっしょにいてさ、それで貰っちゃったんだ」

あわててはいけないと、亮二は思った。

「どこ行くの、みどり？」

「いまねえ、ママが横浜から来たの。それでね、自動車の中に煙草とライターを忘れてきちゃ

ったんだって。本当に忘れっぽいんだから、うちのママって。だから、あたしが取ってきてあげるって、出てきたの」

みどりはキーを持っていた。亮二はポケットを押さえてしまった。どうしよう。

「へえ、みどりんちって、自動車あるのか。ちょっと見せてよ」

「いいわよ」

みどりにわからないように、どうにかうまく煙草とライターを戻さなければならない。思っていたとおりに、みどりはさっき亮二が忍び込んだ自動車の前で止まった。

「あっ、ちょっと待って」

「なあに？」

「俺にドア開けさせてくれない？」

「いいけど、どうして？」

「俺、自動車好きなんだよ」

ドアに鍵を掛け忘れたことも、悟られてはならない。みどりからキーを受け取って、亮二はわざとガチャガチャとやった。

「ちょっと運転席へ座ってもいいかな？」

「いいわよ。へえ、亮二君って、自動車好きだったの。知らなかったわ」

亮二が運転席に座ってポケットに右手を突っ込んでいると、みどりも助手席に入ってきてしまった。どうしよう。みどりの注意をなにかでひいて、その隙に煙草とライターを出さなけれ

ばならない。

「ふたりっきりになるの久し振りだねえ、みどり」

みどりが身体を固くした。

「大丈夫だよ。スカートなんか、めくらないからさ」

少し力を抜いて、みどりは笑った。

「だけど、もう一度見てみたいな」

「駄目よ。亮二のエッチ」

みどりは明るく言った。その声が終わったのと同時に、亮二は左手をみどりのスカートにのばした。みどりの身体が、また固くなったようだった。亮二は裾をつかむと、ゆっくりとスカートをめくり上げ始めた。

「駄目よ、やめて」

みどりがか細い声で言った。亮二は右手でポケットから煙草とライターを出して、みどりに見えないようにシートの上に置いた。もうこれでいい。スカートを元に戻そう。

「ねえ、お願い、やめて」

みどりが顔を近づけて、泣きそうな声で言った。その声を聞いて、亮二は逆にもっとスカートをめくり上げたくなってきた。眼を落とすと、薄暗い自動車の中に、みどりの白い腿が浮かび上がっていた。

もっとめくり上げようかどうしようか。そのままの姿勢で、亮二は三十秒ほど考えた。そし

て、スカートを元に戻した。

夕食が終わって、兄は自分の部屋に入って行った。だらだらと酒を飲んでいた父も、寝てしまった。テレビを見ている亮二の横に、母が来て座った。

「亮二、葉書来てたわね。当たったのね。良かったね」

当選通知葉書を電話の横に、置きっ放しにしてあったのだ。

「うん。でもさ……」

「これでいいんだろ」

母は千円札を一枚と五百円札を一枚と百円札を六枚、テーブルに並べた。

「二千百円だったよね」

「うん」

亮二は葉書と千円札と五百円札と百円札を持って、自分の部屋に入った。兄の邪魔にならないように、小さな音で『ラバー・ソウル』をかけた。眼鏡が曇って、レコード・ジャケットの上に涙が落ちた。

「ウィズ・ディス・ソング、ウィー・マスト・セイ・サヨナラ」

ポールはそう言って、ベースの弦を一回弾いて音を採った。

ということは、イントロなしの曲のはずだ。なんだろう。最後の曲なら、「のっぽのサリー」

だろうか。

〝ユウテルライシンキンアイキャンシー、ユウキャンクライコゾヨラフアラミ……〟

ポールがヘフナーのベースを振りまわして、絶叫する。ジョンとジョージが顔をくっつけて、バック・コーラスをつける。

〝アンダン――アンリリーダン、アンダン――ダンオンザグラン……〟

リンゴは自暴自棄になったように、叩き続ける。間奏の間中、ポールはステージを走りまわった。ジョンは顎を突き出して、二本の足はステージを踏み続けていた。

曲が終わった。ビートルズは三十分前に登場した時と同じように、あっという間にステージの上から消え去ってしまった。

隣の席でさっき双眼鏡を貸してあげた名前も知らない女の子が、プログラムを握りしめて泣いている。斜め前では学生服のガードマンに引きちぎられたイギリスの国旗を持った女の子が、うわごとのように「ポール、ポール」と呟いている。

E・H・エリックが終了の挨拶をして、ステージから消えて行った。それを合図のようにして、かなり前のほうにいた中年の女が、ふたりで立ち上がって、亮二の横を歩いてきた。女達は「本当にうるさかったわね」と言いながら、泣き続けている女の子達を軽蔑したような目つきで見た。

「うるせえ、馬鹿野郎」と、亮二は心の中で叫んだ。しかし、それは心の中だけではなかったようだ。ふたりの中年の女はぎょっとしたような顔になって、亮二の顔を見た。

「うるせえ、馬鹿野郎。早く帰れ、ばばあ。てめえらなんか、来るんじゃねえよ」

「まあ、恐い。不良だらけね」と言って、女達は足を早めて消えて行った。

亮二は席を立つ気にはなれなかった。ぼんやりとステージを見ていた。たぶん、「アイム・ダウン」でジョンが弾くはずだったのだろうけれど、全く手もつけられなかったヴォックスのオルガンが、淋しそうにステージの端に置かれてあった。

亮二はもう自転車に乗って、ザリガニを取りに行くことはないだろうと思った。蒲田のグリコに景品を貰いに行くこともないだろう。多摩川の巨人のグラウンドに練習を見に行くこともないだろう。マジック・ヨーヨーもかんしゃく玉も、遠い世界になったような気がした。亮二の子供の時代は、たったいま終わったのであった。

一九六六年七月一日。日本武道館南東スタンド二階F列十二番。

1　昼休みの踊り場

渋谷駅で山手線から降りて、地下鉄の改札口に向かっていく途中で、十メートルぐらい先を藤原久美子が走っていくのが、竜二には見えた。声をかけてみようかなと一瞬思ったのだけど、朝のラッシュ・アワーで周囲はひとでいっぱいである。呼んでも聞こえるわけがなかった。久美子は人込みをかき分けて、階段を登って行った。

竜二が地下鉄のホームに着いた時には、どこにも久美子の姿は見当たらなかった。ということは、竜二と同じ山手線に乗って来て、地下鉄は一本先の電車に乗って行ったということになる。あいかわらずすばしこい奴だなと、竜二は思った。

藤原久美子は竜二と同じクラスであった。高校一年生にしては妙に大人びたところのある子だなと、竜二はずっと思っていた。クラスの他の女子生徒達は、いつでも何人かで固まって動いていた。しかし、久美子だけはそういった群れには入らないで、ひとりきりで行動していた。かといって、仲間はずれにされているといったふうでもなくて、ただひとりで自由気ままにふるまっているように見えた。そのために久美子を嫌っている女の子も何人かはいるようだけ

ど、それが問題になるわけでもなかった。

そして、久美子の肢体を熱っぽく横目で見つめる男子生徒の数は、彼女を嫌っている女子生徒の何倍もいた。亮二達のクラスの中だけでも、五人や十人ではきかないだろうと思われた。殆どクラス中の男子が、久美子になんらかの興味を持っているようであった。

しかし、自由気ままに行動しすぎるためか、久美子に声をかける者は女子も男子もあまりいなかった。だから、噂だけが飛びまわっていた。放課後三年生が誘いに来たというのもあったし、若い教師がプレゼントを渡したというのもあった。真夜中に横浜の本牧で踊っていたというあてになりそうもないものや、あいつはセックスの経験があるはずだというなんの根拠もないものもあった。

噂の中ではそれだけ派手な存在でありながら、学校の中ではむしろ目立たないようにわざと控え目にしているようなところが、久美子にはあった。成績も普通であるし、風紀の教師や週番につかまるようなこともしなかった。

しかし、学校の中は、学校の中である。それよりも、一度学校から出て制服を私服に着替えてしまったら、どうなるのだかわからないといったような謎めいた匂いを、亮二は久美子から受けていた。

学校の帰りに電車の中で久美子といっしょになったことが、亮二は何回かあった。そんな時、いつだって久美子は亮二のほうを向かなかった。それは意識的に亮二を拒絶しているといったふうではなくて、用もないのに意味もない会話はしないというように思われた。

CamScannerでスキャン

亮二も顔を知っている程度のクラス・メイトには、声をかけない時があった。下手に話しかけて言葉がとぎれた時の、あの気まずさを味わいたくなかったのである。だから、久美子が亮二のほうを向かないのは、かえって嬉しいぐらいであった。しかし……。それは一週間ほど前のことであった。

学校の帰りの山手線で、亮二はぼんやりとドアに寄りかかっていた。ふと気がつくと、もうひとつ向こうのドアに、久美子が本を読みながら寄りかかっていた。久美子がどういう本を読んでいるのだか、亮二は少し気になった。表紙の題名を見ようと亮二が身体の位置を動かしたと思ったら、久美子が顔を上げた。そして、まっすぐに亮二のところまで歩いて来て、訊ねた。

「坂口君、アンチョコ使ってる?」

亮二はびっくりした。初めから久美子は亮二の存在に、気がついていたのだ。亮二が無言でいると、久美子はにっこり笑った。

「わたしねえ、殆ど全部アンチョコ使ってるの」

亮二はアンチョコを使う気にはなれなかった。狡猾な気がするからだ。しかし、久美子が殆ど全科目アンチョコを使っているというのは、なんとなく愉快だった。教師や学校なんか相手にしていないのだという気分が漂っていて、小気味がよかった。

「見る?」

久美子は持っていた本を、亮二の目の前に差し出した。古文のアンチョコであった。

「いいよ。こんなとこで見たって、しょうがないじゃん。今度、授業中にでも、見せてくれよ」

その日の久美子は、何故か喋りっぱなしであった。自分の家は五反田で乗り替えて池上線であるとか、今日は用事があってこれから大井町まで行くところだとか、殆ど一方的に喋りまくっていた。亮二はただあいづちを打つだけであった。そして、派手で目立ちはするけれど、いつもおとなしく黙っている久美子が、これほど明るい表情で喋るのに、驚いてしまった。

品川の駅で山手線から降りて、京浜東北線のホームへ階段を昇って行く時に、亮二は言った。

「そうやってさ、いつも明るく喋ってればいいのにさ」

久美子は亮二を見上げた。

「わたしって、いつも明るくない?」

「明るくないだろう、そりゃあ。だから、変な噂なんかたてられちゃうんだよ」

「なあに、噂って?」

大井町で久美子が電車を降りてから、亮二は考えた。何故、久美子は話しかけてきたのだろうか。アンチョコを読んでいるところを見つかったから、機先を制してきたのだろうか。しかし、まっすぐに亮二のほうに歩いて来たということは、亮二の存在に気がついていたということになる。

久美子が大井町まで行くところだと言った時に、亮二は自分の家はその隣の大森だと言った。しかし、その時久美子はなんの反応も示さなかった。ひょっとしたら、亮二が大森に住んでいるということを、初めから久美子は知っていたのではないだろうか。となると、話ははっきりする。

いつもは同じ電車の中にいても、渋谷から五反田までの三駅分の間だけだから、黙っていてもおかしくはない。しかし、大井町までということになると、そういうわけにもいかない。七駅分の間も、いっしょにいるのだ。それも、乗り替えたり、電車を待ったりするのだ。黙っていたら、気まずくなる。それで、わざとアンチョコを出して、亮二の気をひいてから、話しかけてきたのではないだろうか。

亮二がこの答を発見したのは、それから三日経ってからのことであった。久美子は違うなあと、亮二は思った。そして、男子生徒がみんな興味を持っている久美子が、自分から話しかけてきたのだと、気分を良くしていた自分が、実に単純な人間のように思えてしょうがなかった。

久美子の亮二に対する態度は、あの次の日からも前と全く変わらなかった。ただ、すれちがったりする時に、亮二の顔を見てにっこり笑うことが何度かあった。自分よりもずっと大人で、派手な噂があって、なおかつ可愛い女の子。興味はあるけれど相手にはならないように、亮二は思っていた。

たしかに、また電車の中で逢わないかなあというような、淡い期待は亮二にもあった。しかし、一度も逢わなかった。それが、気がつかなかったとはいえ、今朝はいっしょだったのだ。久美子だってただの同級生じゃないかと、亮二は思うようにした。

地下鉄の駅で降りると、同じクラスの男子生徒と顔が合った。

「おい、坂口。やばいぞ、ぎりぎりだぞ」

「そうか」

「遅刻だよ、これじゃあ。俺、いつもはふたつ前の電車に乗ってんだよ」

亮二は電車の時刻表なんか、見たこともなかった。

「走んなきゃ、遅刻だぞ」

そいつはもう一度怒鳴って、走って消えて行った。

この駅から学校まで、歩いて十分ぐらいだろうか。亮二は走る気にはなれなかった。同じ制服の男女がひとかたまりになって、どっと走って行った。彼等が消えると、朝の青山通りは静かになった。

秋である。街路樹の枯葉が道に落ちて、歩くとがさごそと音をたてる。朝である。空気が綺麗で、冬の気配の風が心地良い。亮二はこのまま絵画館のほうまで、歩いて行きたいような気分になった。神宮第二球場の早朝野球を、ぼけっと見たりするのもいいなと思った。

通り道にある日本プロレスのオフィスは、まだ開いていない。この事務所の前に、よくプロレスラーが立っているのだ。学校の帰りにここでアントニオ・猪木やジャイアント・馬場や大木金太郎を見るのは、亮二の楽しみのひとつであった。

また、もうひとかたまりの制服が、走って来た。ひと電車あとの連中である。そいつらが枯葉を蹴散らして校内に消えて行ったあとを、亮二はゆっくりと歩いて行った。こういう気分の良い日は、一年に何回ぐらいあるんだろうか。こういう日は、学校に行かなくともいいんじゃないだろうか。

小学校中学校ともう九年間も、毎朝学校へ行っているんだ。今年で十年目だ。もういいんじゃないかな。そう考えながらも、足は自然に校門を通ってしまった。風紀の教師と週番の生徒は、校舎に入ろうとしていたところであった。

「まだいたのか」

教師が舌打ちをした。

「遅刻じゃないか」

亮二はポケットから、生徒証を取り出した。

「すみません」

教師は生徒証をチェックしてから、亮二をにらんだ。

「おまえの前に入って来た生徒はなあ、みんな走って来たんだ。だから、ぎりぎりだったけど、間に合ったんだ。おまえは息も切れていないじゃないか。走らなかったんだろう。だから、遅刻になったんだ。おまえはどうして走らなかったんだ、えっ?」

前に遅刻した時に、身体が弱いんですと答えて、担任の教師に伝えられて、あとから叱られたことがあった。

「すみません。下痢なんです。渋谷の駅でも、地下鉄の駅でも、トイレに入っちゃって。走れば間に合うとは思ったんですけど、どうしても走れなくて」

週番の女子生徒が、くすっと笑った。教師はもう一度亮二をにらみつけて、校舎のほうに歩いて行った。

教室に入って席に着くと、すぐに担任が入って来てホーム・ルームが始まった。
「危なかったな、坂口」
隣の席の木戸直彦がささやいた。
「駄目だよ、生徒証を取られちゃったよ」
「馬鹿だなあ、おまえは」
「しょうがないだろ」
「おまえさ、週に一度は遅刻してんじゃないの？」
「そんなことないよ、二週間に一回ぐらいだよ」
「たいして変わんないよ。いったい、何時に家を出て来んだよ？」
「いつも『ヤング720』の最初の歌のとこ見てから、出て来んだよ」
「じゃあ、間に合うはずじゃあないか」
「そうなんだけどな、どうしてかなあ？」
担任の教師が出て行って、入れ替わりに一時間目の学科の教師が入って来た。
直彦が「おい、これ見ろよ」と言って、机の下から一枚のシングル・レコードを亮二に手渡した。「ストロベリー・フィールズ・フォーエヴァー/ペニー・レーン」の、アメリカ盤のシングルであった。
「へえ、凄いな。どうしたんだよ、これ？」
「ヤマハに予約して、輸入したんだよ」

「へえ。おまえ、シングルまで輸入盤なのかよ?」
「これはさ、気に入ったからさ。特別だよ」
「そうだな、これは特別だな」

嵐のような日本公演のあと、ビートルズの活動は静かなものになった。その静けさを破って発売されたのが、「ストロベリー・フィールズ・フォーエヴァー」であった。髪を短くして、口髭を立てて、スカーフを巻いたビートルズは、それまでとは全く異なっていた。ビートルズ自身も言っているように、彼等の音楽はもうギター、ベース、ドラムスだけでは成立しなくなっていた。それまで聴いたこともなかったような電子音楽や、ビッグ・オーケストラなどを使うようになっていた。

日本公演のあとに発表された『リヴォルヴァー』は、凄まじいショックを亮二達ビートルズ・ファンに与えた。ビートルズは大きく変わりつつあったのだ。しかし、『ミュージック・ライフ』や『ティーン・ビート』といった日本の音楽雑誌は、そのことについてあまり大きくとりあげなかった。なかには、これはロックではないなどという、よくわからないレコード評さえあった。つまり、彼等はビートルズの変化がわからなかったのであった。

次に発表されたこの「ストロベリー・フィールズ・フォーエヴァー」も、日本のロック雑誌は理解しなかった。初夏に出た『サージェント・ペッパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド』も、同じことであった。ところが、このレコードが英米で大絶賛をされると、手の平を返すように誉め始めたのであった。日本のロック雑誌はあてにならないと、亮二も直彦も痛感

した。

亮二と直彦は、殆どビートルズに関する話しかしなかった。直彦ほど熱狂的なビートルズ・ファンに会ったことは、亮二はいままでに一度もなかった。直彦は亮二と対等に、ビートルズの話をすることが出来たのであった。『ビートルズ・マンスリー』や『シックスティーン・マガジン』などの洋書の存在を教えてくれたのも、直彦であった。ビートルズのレコードも日本盤だけではなくて、アメリカ盤やイギリス盤も何枚も持っていた。

しかし、直彦は亮二以外の他のクラス・メイトとは、あまり口をきかなかった。特に、女の子は苦手のようであった。レコードや本を買う時でも、店員が女だと声が上ずってしまう。赤面対女恐怖症と、亮二はからかった。どうも、直彦は子供の頃から身体が弱かったようで、中学校の時も入院と退院を繰り返していたようであった。

四時間目が終わったところで、直彦が亮二に言った。

「おい、五時間目の古文、今日はおまえが当たる日だぞ」

「そうか、今日はサ行か」

「そうだよ、やってあるのか?」

「駄目だ。忘れてた。おまえ、やってある?」

「やってるわけないだろ、あんなもの」

「困ったな、どうしようかなー

「昼休みの間にやればいいじゃん」

「馬鹿、やれるわけないだろ。俺、古文なんて大っ嫌いなんだよな」

いちおう教科書を開いてはみたけれど、亮二には全くわからなかった。さあ、どうしようかな。亮二の頭の中に、久美子のアンチョコが浮かんだ。そうだ、久美子に教えてもらおう。

しかし、久美子には声をかけにくかった。亮二が「藤原さん……」と言ったと同時に、クラス中の眼が亮二を見るだろう。それでも、そんなことは言ってられない。席を見ると、久美子はまだ座っている。食堂に行ってしまう前に、声をかけなければならない。

亮二は思い切って立ち上がって、ひとりでいる久美子に近づいて行った。

「おい、久美子」

亮二が言った途端に、クラス中の眼が集まったように思われた。久美子もびっくりした顔をして、亮二を見上げていた。

「えっ、なあに?」

亮二は顔を近づけて、小声で言った。

「古文さあ、やってあるだろ?」

「ええ……」

「見せてくれないか。今日、俺、当たるんだけどさ、やってないんだよ」

久美子はほっとしたような顔になった。

「それだけなの?」

CamScannerでスキャン

「うん」

「ああ、びっくりした。なにかと思ったわ、わたし」

「ごめん。見せてくれるか？」

「いいわよ、もちろん」

竜二も久美子も小声で喋っているつもりなのだけど、クラス中が聞き耳をたてているように思えた。

「坂口君、六時間目の英訳はやってある？」

「ああ、英訳は大丈夫だよ」

「今日、わたし、当たりそうな気がするの。だけど、写してくるの忘れちゃったの。見せてくれない？」

「もちろん、もちろん」

「じゃあ、どうしようか」

「昼めしが終わってから、ノートを写し合えばいいんじゃないか」

「そうね。それじゃ、あとでね」

久美子は教室を出て行った。教室の中は、異様なくらいに静かであった。生徒はまだ半分くらいは残っているというのに、まるで誰もいないようであった。

竜二が自分の席に戻ると、直樹が言った。

「ええな、おまえって楽しいな」

「なにが?」
「なにがってさあ、クミコーだもんな」
「あいつ、古文のアンチョコ持ってんだよ」
「へえ。なんで知ってんの、そんなこと?」
「ちょっとな」
亮二と直彦が弁当を食べ終わったところに、久美子が食堂から戻って来た。古文と英訳のノートを持って久美子が近づいて来ると、直彦が急にあわて始めた。
「こ、ここの席、俺の席、使っていいよ」
そう言って、直彦は教室から出て行ってしまった。久美子は不思議そうに、直彦の後姿を見ていた。
「なあに、木戸君って?」
「いいんだよ、あいつは。女が恐いんだから」
「へえ、なんでなの?」
「知らないよ、そんなこと」
「じゃあ、坂口君は?」
「俺? 恐かったら、こうやって話なんか出来ないじゃないか」
並んで座ってノートを写し始めると、教室に残っている者達の視線を強く感じた。
鉛筆の手を止めて、亮二は言った。

CamScannerでスキャン

「なんかさ、ここでやんのやだな」
「どうして?」
「みんな見てるじゃん」
　久美子がノートから顔を上げて教室を見まわすと、みんなあわてて目をそらした。
「本当ね。どうしてかしら?」
「よく言うよ。目立つんだよ、目立つの」
「誰が?」
「誰がって……久美子に決まってんじゃん」
　藤原さんと言おうか久美子と言おうか、一瞬亮二は迷った。
「へえ、どうしてだろう?」
「わかってるくせに」
「坂口君が目立つんじゃないの?」
「違うよ、久美子だよ」
「どうしようか、それじゃあ」
「屋上の踊り場に行って、やろうか」
　久美子の顔が、さっき亮二が声をかけた時と同じ顔になった。
　四階建ての校舎の、その屋上のドアはいつも閉められていた。つまり、誰も行かないのであった。そして、その踊り場は三年生の男女が放課後に隠れて会うところだというのが、一部の

生徒の間で噂になっていた。四か所にある踊り場に行く必要が、十六段をかけ上がって探検し ないか確かめなければならない、という不安も与えられていた。
　人見子の眼は、疑いの眼になっていた。
「なんだ、人見子も知ってるのか」
「まあね」
「じゃあ、体育館の道具室に行こうか」
　体育館の道具室は一部の生徒だけではなく、部活での生徒にとって重要な場所であった。男子部員と女子生徒が忍んで会っていた、という噂が流れたこともあった。それに尾鰭がついて、女は殺されていたのは男子生徒であった、などというのもあった。
「いやよ、そんなとこ」
「じゃあ、踊り場に行こうぜ。あの時間が、なんでもないしな。こんなところで待ってて、教師が来たら、やばいじゃん」
「……そうねえ」
　しぶしぶ、人見子は立ち上がった。

　踊り場の下まで来ると、人見子が無言で第二の腕を引っぱった。
「ああ、そうか」
「愛とはすべて」のイントロのチャンス国歌が、第二は口笛で吹いた。反応はなかった。

「ほら、大丈夫だよ」
　亮二は先に立って、踊り場に上がった。
「さあ、やっちゃおうぜ」
　踊り場の手摺の影に隠れるように座って、亮二はノートを開いた。踊り場の幅は狭かったので、久美子は亮二と向かい合う形になって壁にもたれて座った。
　ノートを写しながら、亮二は初めていまの状況がわかったような気になった。男女が隠れて会う場所で、久美子とふたりっきりでいるのである。それも、一メートルも離れていないで、向かい合って座っているのだ。
　亮二は上目使いに、久美子を見た。久美子は初めは横座りになっていたのだけど、それでは書きにくいのか、いまでは膝を立ててノートを写していた。スカートが上がって、膝小僧が見えていた。
　五分ほど経って、亮二はノートを写し終わった。顔を上げてみると、久美子はまだ一所懸命にやっていた。脚が少し開いて、スカートの奥の白い腿が見えていた。
「ねえ」
　突然久美子が言って、亮二はどきっとした。
「なに？」

CamScannerでスキャン

「そう」
久美子が腰の位置を、少し変えた。二本の腿の間から、白い下着が見えた。亮二は気がつかれないようにしなければと思いながら、その一点をじっと見つめた。
久美子がそのままの姿勢で、顔も上げないで言った。
「坂口君、もう終わったの？」
「うん、終わったよ」
「じゃあ、場所を変わってくれない。ここ、座りにくいの」
亮二は黙っていた。久美子が不審そうに顔を上げた。
「ねえ、変わって？」
「やだよ」
「どうして？」
「見えなくなるから」
久美子はその言葉の意味を、数秒考えていた。そして、亮二の視線に、気がついた。あわてて足を下げて、手でスカートを押さえた。
「見えたの？」
「見えたよ」
「嘘よ？」
「嘘じゃないよ」

「いやだ、嘘よ」
「嘘じゃないってば」
「……エッチ」
久美子は立ち上がって、亮二の隣に無理矢理に座った。久美子の髪の匂いがした。
とがめるように、久美子は亮二の顔を見て言った。亮二も黙って、久美子の顔を見た。顔と
顔が、十センチぐらいしか離れていなかった。肩や腰は、ぴったりとくっついていた。
「こら、このエッチ、あっち行きなさいよ」
亮二は久美子のあごに手をかけて、くちびるを合わせた。怒って逃げたりはしないだろうと
は思っていたけれど、久美子は亮二のするがままになっていた。久美子のくちびるは、柔らか
かった。
亮二は初めてのキスだった。胸がどきどきいっていた。この心臓の音は、久美子にも聞こえ
ているのだろうか。亮二の口の中に、久美子の舌が入ってきた。
亮二は左手で久美子の髪を撫でて、右手を制服の上着の中に入れて胸のふくらみに触わった。
ブラウスのボタンをはずしかけると、それまで黙っていた久美子がくちびるを離した。
「駄目よ。こんなところで」
「なんで?」
亮二はなんと言えばいいのか、わからなかった。
自分でもなにを言っているのだか、よくわからなかった。

「ここ、学校じゃない」

「……そうか」

久美子は髪に手を当てて、くすっと笑った。

「坂口君って、けっこうやるのね」

亮二は黙っていた。

「ねえ、ここに来ようって言ったのは、初めからこういうつもりだったの？」

亮二は意地を張って、答えた。

「あたりまえじゃん」

亮二はもう一度くちびるを合わせて、久美子の中に舌を入れた。

授業開始のベルが聞こえた。

「ちえっ」

亮二は舌打ちをした。

久美子がくすっと笑った。

「次の時間、さぼっちゃおうか？」

「駄目よ、そんなの」

「いいじゃん」

「それで、ずっとここにいるの？」

「そう」

「そんなことしたら、よけいに目立っちゃうじゃない」

「そうか」

「次の時間のために、ノートを写したんじゃない」

「そうか。忘れてた。そんなこと」

　久美子が、また笑った。

「じゃあ、早く残りを写しちゃえよ」

「大丈夫よ。英訳は六時間目だから」

　久美子は立ち上がって、スカートのほこりを手ではらった。

「さあ、行かなくちゃ」

「先に帰ってくれよ」

　浩二は納得していたのであった。

　浩二と久美子が教室に戻ると、またクラス中の眼がふたりを見たように思えた。しかし、浩二はそんなことには、もう平気であった。

　六時間目の英語の授業は、教師が休みで自習になった。

「そうか、ちゃんとノートを写したのにな」

　浩二はそう言ったが、それはそうだった。授業中の間に、浩二が久美子とふたりのやりとりを思い浮かべてい

く、英語の教師が戻ってきた教室に戻ってきたのだ。そのことについてはなにも言わな

かった。たぶんクラス中の奴がそれを気にしているだろう、と思われるのにである。
休み時間に、久美子が亮二の英訳のノートを持って来た。直彦はまた席をはずしてしまった。
「座れよ」
亮二はもう他の生徒の眼など、どうでもよかった。
「目立つんじゃないの?」
久美子は笑いながら言った。
「もういいよ、そんなこと」
亮二はノートを一枚破いて、電話番号を書いて久美子に渡した。久美子も同じようにした。
「わたし、今日、クラブがあるの。帰りは遅くなっちゃうと思うわ」
「夜になったら、電話するよ」
久美子は黙ってうなずいた。
「クラブなんかに入ってるようには、見えないんだけどな。なに、やってるの?」
「きっと、びっくりするわよ。生け花なの」
「へえ」
「坂口君は?」
「俺は文芸部に入ってたんだけどさ、行ってたのは一学期だけだったな」
「なんで、行かないの?」
「あんまりくだらなくてさ」

また、ベルが鳴った。

英訳の時間、久美子は当てられなかった。五時間目の自習の時間もそうだったけれど、この時間も亮二は教師の話など聞かないで、ずっと考えていた。隣の席の直彦も、話しかけてこなかった。

亮二は久美子のことを、考えていた。初めてキスをした。初めて女の胸を触った。くちびるも胸も柔らかかった。それが、自分では相手にならないと思っていた、藤原久美子であったのである。

ブラウスのボタンをはずそうとした時に、久美子はここでは駄目よと言った。ということは、学校でなければいいということになる。よし、決めた。俺の初めてのセックスは、久美子に決めた。

朝気分が良かったとおりに、今日は特別の日になったようだ。学校をさぼって草野球なんか見に行ってたら、なにも起こらなかったのである。危ないところだったなあと、亮二は思った。

「おい、今日は〝散歩〟にしようぜ」

亮二が小声で、直彦に言った。

「よし、わかった」

それまで押し黙っていた直彦が、答えた。

亮二と直彦の〝散歩〟というのは、渋谷まで地下鉄に乗らないで、歩いて帰ることであった。この面白さを発見したのは、午後に地下鉄が事故で止まってしまった時であった。他の生徒は

国電やバスで遠まわりをして帰ったのだけど、亮二と直彦は意地で青山通りを渋谷まで歩いたのであった。

青山通りは人通りが少なくて、気持ちが良かった。町並みは普通の商店がずっと続いているのだけど、時々最近出来たブティックなどがあって、店の中を覗くとミニ・スカートのモデルのような女の子がいたりした。紀ノ国屋や青山学院大学のあたりだけに、喫茶店が二～三軒あった。

そこまでぶらぶらと歩いて来て、ガソリン・スタンドの横の洋書屋に入って、ビートルズの載っている雑誌を買って、喫茶店に入るというのが、いつものコースであった。帽子を脱いで詰襟のバッジをはずして鞄に入れてしまえば、普通の学生服である。青学の大学生にも学生服の奴はいたから、喫茶店にも平気で入れた。

だいたい月に二～三回は、〝散歩〟をすることになっていた。喫茶店を出てからは、宮益坂を下りて行って、渋谷の駅を通って、道玄坂のヤマハへ行って、レコードを見た。もしくは、大盛堂か紀伊国屋で、本を見ることになっていた。

ホーム・ルームのあと、亮二は職員室に呼ばれた。きっと、今朝の遅刻のことだろう。直彦に校門のところで待っていてくれと言って、亮二は職員室に行った。亮二は担任の教師に叱られた。生徒手帳を返してもらって、部屋を出ようとしたら、今度は風紀の教師に呼び止められた。髪が長い、後が詰襟にかかっている、横が耳に被さっている、明日までに切ってこい。大きな御世話だ、馬鹿野郎。亮二ははいと答えて、職員室を出た。

　廊下を歩いて行くと、向こうから他の女子生徒といっしょに、久美子が花を抱えて歩いて来た。久美子は亮二を見て、にこっと笑った。久美子の笑顔はいままでに見たどんな顔よりも可愛いと、亮二は思った。
「どうしたの?」
　久美子が立ち止まって言った。
「遅刻したからさ、生徒手帳」
「坂口君、遅刻多いね」
「うん」
　今朝は渋谷まではいっしょだったんだぜと、亮二は胸の中で言った。
　他の女子生徒はみんな行ってしまって、廊下には誰の姿も見えなかった。
「あのさあ、いま気がついたわけじゃあないんだけどさ」
「なあに?」
「久美子って、可愛いな。一番だな、久美子が」
　久美子が微笑もうとした瞬間、亮二はすばやく久美子のくちびるにキスをした。
　久美子はびっくりして、周囲を見まわした。
「大胆ねえ、坂口君って」

　校門の外で、直彦が待っていた。

「どうした?」
「殴られたよ」
「まあ、そんなとこだな」
「今日一日にあったこと、みんなおまえに話してやるからな」
「どうでもいいけどさあ」
「まあ、そういうなって」
亮二はゆっくりと校門から出て、枯葉が敷きつめてある青山通りを歩き出した。

CamScannerでスキャン

2　遠い暗闇

直彦が新しいビートルズのレコードを買った。まだ日本盤は発売されていない、アメリカの輸入盤であった。いっしょに亮二も渋谷のヤマハへ行って、その真っ白のレコード・ジャケットを見た。

内容の予想は、全くつかなかった。『ラバー・ソウル』、『リヴォルヴァー』、『サージェント・ペッパーズ』ときて、『マジカル・ミステリー・ツアー』で一段落したので、ビートルズがこの先どうなるのかは、ちょっと亮二にもわからなかった。

いつものとおりに、アルバムに先がけて発表された「ヘイ・ジュード／リヴォリューション」のシングル・レコードは、亮二も買って聴いていたのだけど、二曲に統一というものがないので、予想は出来なかった。

どうだったと亮二が訊くと、直彦はなんかごちゃごちゃだよと言っていた。二枚組だというから、全部聴くと一時間半にはなってしまう。まさか、その五千円以上もするレコードを、貸してもらうわけにもいかない。

亮二も直彦も、レコードの貸し借りを好まなかった。小遣はもちろんのこと昼食代までもためて買った、大切なレコードである。それをつい貸してしまって、返ってきたら傷だらけになっていた、という嫌な思い出が、ふたりとも何度かあった。

金曜日の放課後、亮二は直彦の家に行くことになった。翌日の土曜日は休日になっていたから、その日は直彦の家に泊まって、その新しいビートルズの一時間半の二枚組のレコードを、充分に聴く予定であった。そして、直彦が買ったばかりの、エレキ・ギターとアンプも見せてもらうつもりであった。

亮二がフォーク・ギターを買ったのは、今年の正月であった。ビニール・ケースつきで三千円の、大森の楽器店で一番安いギターであった。ようやく、簡単なコードを押さえて、少し弾き語りが出来るようになったところであった。

直彦は高校入学の時にフォーク・ギターを買ってもらっていたというから、もう一年半の技術があることになる。そして、エレキ・ギターである。亮二はエレキ・ギターを弾いたことは、まだなかった。とても、楽しみであった。

また、ふたりで二本のギターで、ビートルズのようにハーモニーをつけて歌うのも楽しみにしていた。亮二は「オール・マイ・ラヴィング」の三度のハーモニーというのを、覚えたばかりであった。

エレキ・ギターは、亮二がいま一番欲しいものであった。他にも皮ジャンパーやハイ・ヒール・ブーツなど欲しいものはあったけれど、エレキ・ギターとまともなステレオが手に入れば

当分は我慢が出来そうであった。

去年の正月に、亮二は卓上ステレオを買った。横幅五十センチ奥行三十センチ高さ二十センチぐらいのもので、その中にプレイヤーもアンプもスピーカーもみんな入っているというものであった。

買ってきた日に初めてそれでビートルズをステレオで聴いた時は、嬉しかった。音が左右に分かれるのである。電蓄では聴こえなかった音も、亮二には聴こえた。しかし、何枚目かのレコードの時に、音が分かれなくなってしまった。気がつくと、亮二がステレオに対して直角の位置にいたのであった。同じように、五メートルも離れると、音は分かれては聴こえなかった。

直彦はもっとちゃんとしたステレオ装置も持っていた。そして、ビートルズの新しいレコード、エレキ・ギターである。亮二は直彦の家に泊まりに行くのを、楽しみにしていた。

亮二が着替えの服を体操服を入れるバッグに詰め込んできたのを見て、久美子が笑った。

「なにがおかしいんだよ?」

「べつに」

「しょうがないじゃないか。学校の帰りに外泊するなんてわかったら、停学だぜ。着替えの服を持ってるなんてばれたら、どうなるかわからないだろう」

久美子が冷ややかな眼をして言った。

「馬鹿ねえ。それなら、わざわざ学校まで持ってくることないじゃない」

「じゃあ、どうするんだよ?」

「駅のコイン・ロッカーに、入れておけばいいのよ」

そんなことは、亮二には思いもつかなかったことであった。

「どうせ、木戸君の家に行ってから、着替えるんでしょ。それなら、渋谷の駅のコイン・ロッカーに入れておけばいいのよ」

「……そうか」

久美子は亮二が考えてもいなかったことを、突然あたりまえのようにぽつんと言うことがあった。

「そういうの、久美子はやったことがあるのか?」

久美子は黙って笑った。亮二は久美子に子供あつかいをされているような気分に、時々なることがあった。

久美子とは、土曜日に会うことにしている。たぶんそのことについてだろう。久美子は遠まわしに言った。

「せっかくの連休なのにね。ちょっと考えれば、二泊三日なんだけどなあ」

これも、亮二には思ってもいなかったことであった。

「……旅行か」

久美子は他のクラスのある男女の名前を挙げた。

「あのふたりね、家にはクラブの合宿だって言って、軽井沢へ行くんだって」

不満半分諦め半分といった顔を、久美子はしていた。高校二年で男女で旅行をするというこ

と自体、亮二の考えの中にはなかったのである。

「わざわざ、男の友達の家に泊まることもないのに。ねえ、坂口君っ」

久美子は機嫌が、あまり良くないようであった。亮二は黙っていた。

「じゃあ、今晩は必ず電話してね」

「うん」

亮二はようやく放免されたような気分であった。

初めて入った直彦の部屋は、ビートルズとヒットラーとサンダーバードであった。壁にはハーケンクロイツの旗が貼ってあって、机の上にはサンダーバードの登場人物の人形が置かれてあった。『ビートルズ・アンスリー』とヒットラーの『我が闘争』が、本棚に並んで入っていた。亮二はエレキ・ギターはぴかぴかに光っていたし、アンプはものものしく置かれてあった。亮二は手に取って、普通のコードを弾いてみた。音は、ギャーンと聞こえた。フォーク・ギターでは、ジャーンである。

亮二と直彦はふたりで出来る限りの曲を、弾き合った。直彦は「デイ・トリッパー」のイントロが出来たし、亮二は「サンデイ・アイ・ラヴ・ハー」のイントロも間奏も弾けた。演奏出来るようなその曲がなくなると、ふたりは「想い出の渚」までやった。

直彦は[illegible]であった。医者である父は、よく出かけているようであった。亮二と直彦[illegible]その夜は大変な御馳走が出された。直彦の母は坂口君も飲

みますかと言って、ビールを注いでくれた。直彦はなれたもののようで、ビールを飲む習慣を持っていた。

亮二も少しずつビールを飲んだりセブン・スターを喫ったり、しおらしくしているようであった。父も母も、それを見てもなにも言わなかった。あまりすごしてはならない、と言うくらいであった。十七歳という年齢ならまあしょうがない、というふうでもあった。

しかし、木戸家では直彦がビールを飲んだりケントを喫ったりしているのを、母親が喜んでいるようにもみえた。亮二はあまり飲まないようにした。一本の半分ぐらいだったろうか。直彦は二本は飲んだように、亮二には思えた。

八時になって、亮二はテレビでプロレスを見せてくれるように頼んだ。この家ではプロレスを見る習慣は、ないようであった。試合はジャイアント・馬場、アントニオ・猪木組のインターナショナル・タッグ選手権で、二対一で日本組が勝った。猪木のコブラ・ツイストが決まったので、亮二は満足であった。

食事が終わって直彦の部屋に戻って、待望のビートルズのレコードを聴くことになった。一面から亮二は圧倒されて、なにも言えなくなってしまった。統一されたものは、なにもなかった。ジョンが、ポールが、ジョージが、リンゴが、各々が各々の好き勝手なことをやっているのであった。それでも、ビートルズは存在しているのである。とんでもないバンドだと、亮二は思った。ジョンの「ヤー・ブルース」が、凄まじかった。

レコードを一回聴き終わったところで、直彦がこれを親父の買い物だからと言ってウイスキ

ーを持ってきた。少し音を小さくしてレコードをもう一度かけながら、ふたりはちびちびとウイスキーを飲んだ。

二杯目のウイスキーを注ぎながら、直彦が言った。

「亮二、バンドやらないか？」

「いいな、やりたいけどさ……」

亮二はあとの言葉を呑んだ。バンドはやりたい。しかし、エレキ・ギター、アンプ、マイク、みんな高価なものばかりである。そんな金をどうすればいいのだろうか。亮二は黙って、考えた。

春に中学二年の時のクラス会があった。その時、斎藤レイにもバンドを組まないかと、亮二は誘われていたのであった。斎藤はドラム・セットもエレキ・ギターも持っていて、すでに同じ高校の同級生とバンドを組んでいると言っていた。一度遊びに来いよと言われて、亮二は近いうちに練習を見に行くつもりであったのだ。

直彦はロック・バンド結成の話を、熱心に始めた。亮二は適当にあいづちを打ちながら、別のことを考えていた。そのクラス会に顔を出さなかった、みどりのことを考えていたのであった。

高校に入ってすぐに、みどりは引っ越して行ってしまった。北海道の札幌であった。中学への越境入学のために、みどりは大森へ引っ越して来たのだとばかり、亮二は思っていたのだけど、実際にはそうではなかったのだ。

父親の転勤が多かったので、とりあえずみどりだけ東京の祖母の家に預けられていたのであった。その父親の勤務先が最終的に札幌に落ちついて、みどりもいっしょに行ってしまったのであった。

引っ越して行って十日もしないうちに、みどりから手紙が来た。淋しいと繰り返し書いてあった。亮二もすぐに返事を書いた。しかし、そういった手紙の遣り取りも、だんだんに間が空くようになってしまった。今年の亮二の誕生日には、みどりからのバースデイ・カードは届かなかった。

たしかに、クラス会ぐらいでは、札幌から東京まで来ることは出来ないだろう。そうすると……。そうすると、亮二はもう二度とみどりと会うことはないのだろうか。一生みどりとは会えないのだろうか。

直彦が三杯目のウイスキーを、亮二のグラスに注いだ。だいぶ、酔いがまわってきているようであった。

「なあ、坂口。タイガースやテンプターズぐらいのことは、俺達にだってすぐに出来るぜ」

直彦の声が聞こえた。

文康と最後に会ったのは、今年の春のことであった。大森駅でばったりと逢った文康は、亮二に重要な話があると言って喫茶店に誘った。そこで、文康はある新興宗教の話をした。文康もそこに入っていて、亮二も入らないかという勧誘であった。

亮二はかなり強い調子で、断わった。文康は淋しそうな顔をしていた。それでも、亮二は店

を出てしまった。あれが最後であった。一か月程してから気になって文康の家に行ってみたら、そこにはなにもなかった。アパートは取り壊されていたのであった。

あんなに仲が良かった文康もみどりも、中学を卒業して一年ほどで亮二の前からいなくなってしまった。文康やみどりと同じように、目の前でウイスキーを飲んで喋っている直彦も、いつかいなくなってしまうのだろうか。そして、久美子も……。

亮二は久美子に電話をする約束だったことを、突然思い出した。しかし、時計を見ると、もう十二時に近くなっていた。しまった。どうしようか。困ったな。亮二は立ち上がろうとしたのだけど、身体はそうはならなくて、床に倒れてしまった。

「おい、どうした。坂口、大丈夫か?」

直彦の声が聞こえた。

「グッド・ナイト、スリープ・タイト」

リンゴの声も聞こえた。

土曜日、川崎の駅に着いた時には、もう十二時を過ぎていた。朝九時には起きたのだけど、頭が痛くて、胃がむかむかして、身体に力が入らなかった。すぐに電話をしてみたけれど、久美子は家にはいなかった。川崎駅で十二時という約束はしてあったのだけど、亮二は少し心配になった。

一度家まで帰って、学生服や鞄を入れた風呂敷包みを置いてこなければならない。小田急線、

井の頭線、山手線、京浜東北線、と乗り継いでの一時間半は、この日の亮二には辛かった。乗り替えの度に、ホームのベンチで休まなければならなかった。

家にも久美子からは、電話はかかっていなかった。もう一度電話をしてみたのだけど、久美子は不在であった。待ち合わせ場所にも、久美子はいなかった。三十分遅れたからなと、亮二は思った。昨晩電話もしなかったから、きっと久美子は怒っているに違いない。

そうだ、一度家まで帰ったりしないで、駅のコイン・ロッカーに荷物を入れてしまえば、約束の十二時には無事にここに着けたのだ。馬鹿だったな、俺は。しかし、映画館の名前も言ってあるのだから、先に行っているかも知れない。亮二はふらふらの身体で、映画館に向かった。

亮二は川崎の町は、初めてではなかった。もう何度も、来たことがあった。しかし、あまりこの町には、馴染むことが出来なかった。亮二にとって川崎とは、多摩川を渡った川向こうの町であったのだ。それは東京ではないということを、意味していたのである。

亮二が一番落ちつく盛り場は、銀座であった。ほんの子供の頃から中学生になるまで、毎週のように行っていた銀座は、町の隅から隅まで知っていた。次に好きなのは、渋谷である。学校の帰りに、しょっちゅう直彦と歩きまわっている。

何回か行った新宿は、あまり好きにはなれなかった。ゴミゴミとしすぎていた。川崎には新宿ほどの嫌悪感はなかったけれど、銀座のように愛着が持てるとも思えなかった。雰囲気としては二〜三度行ったことのある池袋に似ているように、亮二には思えた。

目あての映画館は、すぐに見つかった。何軒か並んだ映画館の中に、もう見慣れてしまった

「ビートルズがやって来る　ヤア！　ヤア！　ヤア！」と「HELP！　4人はアイドル」のポスターが貼ってある一館があった。

ビートルズの映画を観に行こうと誘った時、久美子はなんの反応も示さなかった。観に行っても観に行かなくても、どちらでもいいというようなふうであった。久美子はビートルズに、興味を持ってはいないようだった。

ビートルズだけではなくて、すべてのものに久美子は興味を持っていないような態度をとった。ビートルズ、ロック、音楽。小説、映画、絵画……。すべてに無関心のようであった。しかし、絶対に久美子はなにかを隠していると、亮二は確信していた。

上映時間を見ると、「ビートルズがやって来る」の途中であった。映画を途中から観たり、また逆に途中でやめたりするのが、亮二は大嫌いであった。久美子が待っているかなと思って覗き込んでみたけれど、ちっちゃな待ち合い室には誰もいなかった。

こういう時いつもするように、亮二は町をぶらぶら歩くことにした。身体の調子も、だいぶ良くなってきていた。ひとりで待ち合い室に座っていても、気分が暗くなるだけである。あまりよく知らない街をぶらぶら歩くのが、亮二は大好きだったのである。

渋谷から大森までのすべての駅のある町を、亮二は歩いて知っていた。学校の帰りに意味もなく降りて、意味もなく歩きまわっていたのである。だから、いまでは目黒であろうと大崎であろうと、どこからでも家に歩いて帰り着くことが出来るはずである。

駅前でもう一度電話をしてみたけれど、今度は誰も出なかった。家にもいない映画館にもい

ない、いったい久美子はどこに行ってしまったのだろうか。しかし、久美子だ。心配することはないと、亮二は思った。

　映画館へ戻ると、ちょうど休憩時間になっていた。中に入って、亮二はまず客席を見た。久美子はいなかった。ただ灰皿と椅子だけが置かれてある待ち合い室にも、姿は見えなかった。

　亮二と同じぐらいの歳格好の連中ばかりのその待ち合い室で、顔見知りのひとりが煙草を吸っていた。彼は亮二の顔を見ると、にやっと笑った。名前も知らなければ、歳も知らない。もちろん、住んでいるところも、学校も知らない。しかし、月に一度は、必ず逢う顔であった。

　亮二はその少年の隣に、腰を下ろした。

「川崎まで来るの?」

「まあね」

「あのさあ、再来週は三軒茶屋なんだって」

「知ってるよ。今日逢ったら、教えてやろうと思ってたんだ」

　亮二達の横に、同じように何回か顔を見たことがある別の少年が来て訊ねた。

「三軒茶屋って、どこにあるの?」

　最初の少年が行き方を説明して、その三軒茶屋の映画館までの地図を描いてやった。

　立って煙草を吸っていた別の少年が近づいて来て、来月の第三週は三鷹であると言った。亮二達三人は、彼にその映画館への行き方を教わった。亮二達の周囲に五人ほどの女の子達がやって来て、黙ってその遣り取りを聞いていた。

上映のベルが鳴った。

「やばい。俺、まだ席取ってないんだ」

「大丈夫だよ。半分ぐらいしか入ってないからさ」

亮二がビートルズの映画を追いかけ始めてから、もうどのくらいの時間が経ったのだろうか。「ビートルズがやって来る」と「HELP!」の二本立てが二番館をまわり始めてから、もうずいぶんになるはずである。

月に一度は、必ず東京のどこかの映画館でやっている。しかし、新聞の映画欄で探してみても、二番館三番館はなかなか載っていないのだ。そのために、亮二はスポーツ新聞を買ったりもした。

そういうふうにして何回か観に行っているうちに、同じように東京中をビートルズの二本立て映画を追いかけて来ている奴等が何人かいることに亮二は気がついた。亮二も含めて彼等は一日中、映画館の中で過ごすのであった。弁当を持って来て、三回分六本観るのであった。

そのうちに亮二は彼等と顔見知りになって、口をきくようにもなった。そして、休憩時間の待ち合い室で、今後のビートルズ映画の上映館の情報が交わされるようになったのであった。

この情報は、重要なものであった。次は、いつどこでやるのか。また、その映画館には、どのようにして行くのか。

おたがいに、名前も知らなければ、歳も知らない。映画館の中だけでの、つきあいであった。

CamScannerでスキャン

そういう仲間に女の子が入ることは、殆どなかった。亮二達が情報を交わし合っている時には横にいて聞いているくせに、彼女達は自分から情報を出すことはなかった。

亮二の隣に座っている少年も、女は駄目だと言っていた。彼女達は騒ぐだけであった。例えば、「ビートルズがやって来る」で、テレビ・ディレクターがポールの祖父に「ゲット・ヒム・アウト」と繰り返し言う時には、彼女達もいっしょになって声を出す。「HELP!」で、ジョンが「ロンドン」という時にも、いっしょに叫ぶ。リンゴが虎に襲われそうになる場面では、「ジュリー、やめて」などと声を出す。

他の客を意識して、やっているのだろう。たしかに、客席からはそれなりの反応が起こる。しかし、亮二達の顔見知りの連中にとっては、うるさいだけであった。彼女達自身にもそれはわかっているようで、情報交換の時以外にはあまり近づいては来なかった。

次の休憩時間、亮二は待ち合い室の汚ないソファーに座って、久美子が現われないか入口を見張っていた。

最初の少年が、亮二の隣に座った。

「風呂の中でジョンがパンツはいてるの、知ってる？」

亮二はうなずいた。

「知ってるよ。あのさ、最初に汽車から降りて、タクシーに乗るじゃん。あの時ジョンの服が変わっちゃうの、知ってた？」

少年はとんでもない重要な見落としでもしていたかのように、びっくりしたような声を出し

た。
「本当かよ?」
「汽車の中ではさ、背広の下はワイシャツにネクタイだろ。それが、汽車を降りてタクシーの中になると、タートル・ネックのセーターになってるんだよ」
「知らなかったな」
「それからさ、記者会見の前に階段の下でビートルズを待ってる男がふたりいるじゃん。あの背の高いほうの男、ブライアン・エプスタインじゃないかなって思うんだけどな」
「本当かよ。次の時、よく見てみるよ」
少年は逆襲を始めた。
「『恋におちたら』で、ジョージがアンプ倒しそうになるの、知ってる?」
「知ってる、知ってる」
「警察から逃げる時、ジョンが警官のあとを走っているのは?」
「あれっ、あれリンゴじゃないの?」
「それは一回目だよ。二回目はジョン」
「それ、知らなかったな。二回とも、リンゴだと思ってたよ」
ふと気がつくと、売店のところに久美子が立っていた。亮二のほうを見ながら、電話をかけていた。亮二が立ち上がると、じゃあねと言って電話を切った。あの電話はつながっていなかったと、亮二は確信した。

自分から声をかけたり近づいて来たりするのが苦手なので、亮二の気がつきそうなところでずっと待っていたのだろう。ということは、亮二が話に夢中になっていた間に入って来て、話の間中ああやって電話の受話器を持っていたのだろうか。

そのビートルズ映画をやっている二番館で、久美子は明らかに異質であった。ビートルズ・ファンというのは、男も女もみんなあまり服装に気をつかわない。普通のセーターに普通のズボンかスカートであった。

この薄暗い映画館の中で、久美子の立っているところだけに、スポット・ライトが当たっているように、亮二には思えた。あまり目立つような服は着ないのだけど、それでもいつも光っていた。いっしょに町を歩くと、すれちがう男の半数以上が久美子を振り返って見た。

そして、今日はいつものような、目立たない服装ではなかった。もう秋も終わりだというのに、久美子は鮮かな緑色のミニ・スカートをはいていた。東京で一番素晴らしい女の子は久美子だと、亮二は思った。

亮二が近づいて行くと、久美子の眼がより輝いた。

「なんか、言ってみなさいよ」

亮二は久美子に、呑まれてしまった。

「昨日、直彦の家で、酒飲んじゃってさ。電話しなかったのは、悪かったよ。ごめん。だけど、十二時に川崎って言ってあったから、大丈夫だと思ってさ」

亮二をにらんでいる久美子の眼は、光り輝いていた。

CamScannerでスキャン

「十二時に来なかったじゃない」
「うん……それも、ごめん。三十分ぐらい、遅れちゃったんだ」
久美子はハイ・ヒールのかかとで、亮二のバスケット・シューズの先を踏んだ。
「朝、電話したんだけどさ、いなかったから」
久美子はそれには答えなかった。
上映のベルが鳴った。みんな客席に入って行った。亮二と話していた少年も、不思議そうな顔をして入って行った。
「まあ、とにかく中に入ろうよ」
「いや」
久美子は横を向いた。
「ビートルズなんか、見たくない」
亮二はびっくりした。久美子の声が、涙声になっていたのだ。
「わたしね、お昼にも一回、ここに来てるのよ」
とすると、最初に亮二が映画館の前まで来た時に、久美子は客席にいたことになる。
「だけど、あなたが来ないから、また出たの」
久美子が顔を上げた。眼が濡れていた。こんなことは、初めてである。あなたと呼ばれたのも、亮二は初めてであった。
「そうか、ごめんごめん。ちょうど行き違いになっちゃったみたいだな」

「もう、いやよ」
久美子が顔を、亮二の胸に押しつけた。亮二はどうすればいいのかわからなかった。
「じゃあ、出ようか」
久美子の肩を抱いて、映画館の外に出ると、久美子が顔を押しつけたまま、言った。
「おい、亮二。酒飲みに行くぞ、高いぞ」
亮二は手持ちの金を、頭の中で計算した。

亮二と久美子は、自由が丘に来た。亮二は外の店で酒を飲んだことは、まだほんの数えるほどにしかなかった。それも、ビールを一杯程度であって、いつも渋谷であった。だから、亮二は渋谷に行こうと言った。しかし、久美子はさっき涙ぐんだのも忘れてしまったかのように、半分怒ったように言った。
「馬鹿ねえ。休みの日の渋谷や新宿なんて、風紀の教師がうろうろしているだけじゃない。もっと、はずれたところにしなきゃ」
「はずれたところって、どこだよ?」
「そうね、横浜へ行こうかな」
久美子が本牧で踊っていたという噂があったことを、亮二は思い出した。
「駄目だよ、横浜なんて。遠いしさ。それに、俺はよく知らないしさ」
「ここは、川崎よ。ここからなら、渋谷へ行くよりも、横浜のほうが近いじゃない。お店だっ

て、わたしは知ってるわよ」

亮二は横浜だけは、なんとか避けたかった。久美子の噂の件もあったけれど、昨晩酔っ払って考えたみどりが住んでいたところというのも気にかかった。

「いやだ。横浜は絶対に、俺はいやだ」

亮二の強い調子に、久美子は少し驚いたようであった。

「なによ。じゃあ、どこへ行くのよ」

「自由が丘にしよう」

自由が丘なら、距離的にも近い。何度も行ったことがある町でもある。酒を飲みに行ったことはないけれど、そういう店のある場所もわかっている。久美子は不満そうではあったけれど、すぐに同意した。

自由が丘に着くと、久美子は先に立って歩き始めた。そして、亮二が考えていたのとは別の通りの、少し高級そうな店に入ってしまった。亮二は勘定が、心配になった。足りなかったら、どうしようか。

席に着くと、初めて久美子は、いつものようににこっと笑って、言った。

「おい、亮二。覚悟しろよ」

店の中は、半分ぐらい客が入っていた。スタンダードのジャズ・ヴォーカルが、静かに流れていた。久美子は店員を呼んで、自分の名前を言った。すぐに、亮二の初めて見る外国のウイスキーが、ボトルのまま運ばれて来た。

亮二が黙っているのを見て、久美子がくすっと笑って言った。
「大丈夫よ。本当はね、ここはね、お父さんのよく来る店なの。だから、支払いもしなくてもいいの」
「そうか。それを聞いて、ほっとしたよ。俺はどうしようかって、思ってたんだぜ」
久美子は笑いながら、水割りを作った。亮二は久美子と酒を飲むのは、初めてであった。だいたい久美子が酒を飲めるということも、知らなかったのである。
「木戸君と飲んだって、どれぐらい飲んだの？」
「ウイスキー三杯」
久美子が笑ったので、亮二はあわてて続けて言った。
「いや、ストレイトだったのが、良くなかったみたいだったな。その前に、ビールもずいぶん飲んでたしなあ」
「今日は、それ以上飲んでごらん？」
しかし、一杯目の水割りを口にしただけで、すでに亮二は気分が悪くなっていた。それでも、これでやめるわけにはいかなかった。
「今日さあ、一回映画館を出てからさっき戻って来るまでの間、どこに行ってたの？」
「横浜」
「……なにしに？」
「べつに。用なんかないじゃないの。坂口君が来ないから、川崎の駅までまた戻って、来た電

CamScannerでスキャン

車に乗っちゃったの」

久美子の横浜の時は、本当なのだろうか。

「それで、なにしてたの?」

「石川町まで行って、ぶらぶら歩いて海まで行ったの」

「それで?」

「海まで行ったら、もう先へ行けないから、またぶらぶら歩いて、駅まで戻って来たの。それで、また川崎まで来たの」

「横浜って、よく行くの?」

「そうね。だけど、いつも海まで行って、帰って来るだけね」

ほら、見ろ。久美子は海へ行って、帰って来るだけなんだ。本牧で踊ってたりなんか、するわけがないじゃないか。

久美子が二杯目の、水割りを作った。一杯目を最初に口にした時は気持ちが悪かったのだけど、飲み終わってみたらそれほどではないことに亮二は気がついた。気分は良いぐらいであった。

「こっちへ来いよ」

テーブルの向こう側にいた久美子を、亮二は隣の席に座らせた。

「なあに?」

「ズっと」

テーブルの下で、亮二は久美子の手を握った。

「なによ?」

「さっきね、映画館でね、久美子は一番だって、俺ははっきりと思ったね。怒ってる顔も、泣きそうな顔も、どんな顔も、久美子は一番なんだって、そう思ったね」

「酔ってきたな。よし、亮二。もっと酔っ払って、もっと醒めなさい」

久美子のミニ・スカートが、座ったためによけいに短くなっていた。亮二は手を、久美子の腿の上に置いた。久美子は黙って、機嫌良さそうに三杯目の水割りを作った。

久美子が隣に来たために、亮二の視界は広くなった。その亮二の広い視界を、懐かしい顔が横切った。その少女は奥のテーブルの、若い男の前の席に座った。テーブルの上には、各々のグラスがあって料理も置かれてあった。

ということは、その少女はだいぶ前から、この店にいたということになる。たぶん、化粧室に行ったのだろう。すると、亮二が気がつく前にも、このテーブルの前を通っているのだ。亮二に気がついているのだろうか、あの少女は。

久美子が亮二の視線に、気がついたようであった。

「どうしたのかね、亮二君?」

「ちょっと知ってる奴に、似てるひとがいるんでね。たぶん、人違いだと思うんだけど」

いつのまにか、店の中はいっぱいになっていた。

「男? 女?」

「……女」

「ひとりなの？」

「男とふたり」

「つきあってた子？」

「そういうわけじゃあないけどさ」

「本当かね、亮二君？」

久美子は笑って、四杯目を作った。久美子は酒が強いようだ。

しかし、あれは本当にみどりなのだろうか。みどりだとしたら、何故こんなところにいるのだろうか。

「ねえ、あの奥のテーブルにいる子でしょ？」

「いいじゃないか」

「むきになるなよ、亮二君」

亮二は頭の中が、ぼうっとしてきた。目の前にある手をつけていなかった水割りを、一気に飲んだ。久美子が初めて、心配そうな顔をした。

「大丈夫？」

「大丈夫だよ。これで、昨日と同じぐらい飲んだことになったぞ。さあ、昨日よりも、たくさん飲むんだ。水割りを作ってくれよ」

久美子は亮二の顔を見ながら、五杯目を作った。

「久美子、俺が他の女のことを考えてるなんて、心配するなよ?」
「心配なんかしてないわよ」
「俺はね、もう決めてるんだから」
「なにを?」
「俺はね、学校の踊り場でキスした時に決めたんだから」
「……だから、なにを?」
「俺がセックスする女の子は、久美子なんだ。久美子以外には、俺がセックスする女はいないんだ」
久美子の顔は赤くなっていた。黙って、亮二の顔を見ていた。
「だから、いやだって言ったって、駄目だぞ。俺は久美子と、セックスするんだからな」
亮二は久美子の、ミニ・スカートの中に手を入れた。パンティーの布を通して、久美子の陰毛のざらざらとした感触があった。そこで、亮二の意識はなくなった。

3

十月の更衣室

男子更衣室で体操服に着替えると、亮二はロッカーの中に学生服と鞄を入れた。そして、何気ない顔をして廊下を通り抜けて、ゆっくりと校門から外に出た。

生徒達がのんびりと、歩いて帰るところであった。運動部員が声をかけあいながら、走り過ぎて行く。あくまで、彼等の流れの中にいなければならない。ほんの少しでも、目立ってはいけないのである。

クラブ活動でもないのに、放課後生徒が体操服に着替えている。それどころか、校外を走っている。それがわかっただけでも、処分の対象に充分になってしまうだろう。絶対に、人目についてはならない。下を向いてゆっくりと、歩を進めなければいけないのである。

制服を着た生徒達が地下鉄の駅の階段を下って行ったところで、初めて亮二は顔を上げた。周囲を見まわしても、教師らしい姿はなかった。生徒達も誰も、亮二を見てはいなかった。あいつらは自分の行き先だけにしか、興味を持ってはいないのだ。秋風が吹いて、亮二は走り出した。

この放課後のランニングを始めてから、もう二か月近くにもなる。何故こんなことを始めたのか、亮二自身にもよくわかってはいなかった。ある日突然に、走ることにしたのである。

だいたいが、亮二は運動は好きではなかった。運動そのものよりも、その後に見え隠れしている、例えば体育の教師と生徒との関係や、運動部のコーチと部員との関係などが、気に入らなかったのであった。だから、これが授業やクラブであったら、絶対にやらなかっただろう。

地下鉄の一駅分ぐらい走ると、亮二はだんだんに周囲が気にならなくなってきた。頭の中がからっぽのようでもあり、またその逆になんでも考えられるような気分もした。ひょっとすると、考えるために、走っているのかも知れなかった。高校三年生になって、真剣に考えなければならないことが、やたらと多くなったように、亮二には思えていた。

このランニングのいいところは、走っていてもなんの制限もないというところであった。だいたい、学校を出てから戻って来るまで、三十分ぐらいのコースを亮二はとっている。

しかし、嫌になったり疲れたりしたら、歩いてもかまわないのである。近道をしても、いいのだ。途中でやめたって、誰もなにも言わないのであった。クラブ活動であったら、そういうわけにはいかない。

高校に入ってすぐに、亮二は文芸部に入った。その最初の部活の日に、新入部員は各々好きな作家の名前を挙げるように言われた。ひとりが堀辰雄と言うと、三年生の部長は笑った。そして、その新入部員を馬鹿にするように、からかった。亮二は少し腹が立った。内田百閒の名を亮二は挙げたのだけど、三年生の殆どはその名前さえも知らなかった。

そのうちに、その会合は三年生達の、悪口大会になった。新入部員が挙げた作家の批判から始まって、そこにいなかった顧問教師の批判にもなった。最後には投稿した原稿が雑誌に掲載されたという、自慢話になってしまった。

それでも、亮二は部室に通った。高校の文芸部がこれだけのはずはない、と思っていたのであった。もっと素晴らしいことが、あるはずではないか。しかし、なにもなかった。投稿が『高二時代』に一度と『高二コース』に二度載ったのが自慢な部長に、亮二は一か月後に退部を申し出た。

坂を下って赤坂見附に来たら、左に曲がって上りになる。中央線を右に見てのこの坂は、かなりきつかった。汗が吹き出してきて、体操服が身体にぴったりとくっついてしまう。髪の毛も、おでこにはりついている。

まるで、ステージの上の、ビートルズのようであった。これだ。これのために、亮二は走っているのかも知れなかった。ただただ汗をかくために、走り続けているのかも知れなかった。

亮二と久美子との関係は、進展してはいなかった。それどころか逆に遠くなって行くようにさえ、亮二には思えていた。亮二がランニングを始めたことも、久美子には不満のようであった。しかし、久美子はそれを、口には出さなかった。

久美子が知らない男と新宿を歩いているのを見たと、言いにくそうに直彦が話してくれたこともあった。当然、亮二も気にはなっている。しかし、どうすればいいのだろうか。久美子に直接、訊ねるようなことはしたくなかった。

先週の日曜日、亮二は久美子と池上の駅で待ち合わせて、本門寺の御会式に出かけた。休日に久美子と会うのは、三週間振りになっていた。学校の外での私服の久美子は、そこでも同年代の女の子達とは比べものにならなかった。

　学校の中では校則でおさげにしている髪が、さらさらとほおをつたわって肩まで流れている。色白の顔の中で眼だけがきりりと輝いていて、その周囲にそばかすがいくつかみえる。何十度も亮二がキスしたくちびるは、小さくふわりとしていて心持ち開いている。

　参詣客でいっぱいの駅前で、改札口を出て来る久美子の顔を亮二はじっと見ていた。嬉しかった。離したくなかった。そして、何故いまのような情況になってしまったのだろうかと、心の底から思った。

「昨日、クラブで残ってたでしょ」

　久美子も久し振りに学校の外で亮二と会うことを喜んでいるようで、会った途端に喋り始めた。

「そうしたらね、野球部の部員がひそひそ話をしてたの。坂口も少しやったほうがいいって」

「ふうん」

「気をつけたほうがいいわよ。なにをやっているの？」

「べつに」

「だって、野球部とか体操部とかにそういうことを言われるっていうのは、学校ににらまれてるっていうことじゃない」

「まあね。俺は要注意人物の中に入っているんだってさ」
「どうしてかな。知らないひとには、わりと真面目に見えると思うんだけどな」
参道には、露店がずっと続いていた。いっぱいの人込みの中で、亮二と久美子は久し振りに身体をぴったりとくっつけて歩いていた。
「うちの学校はさ、酒とか麻雀とかっていうのは罪が軽いんだよな。だけど、政治活動みたいなのは、すごく重いんだよ」
「政治活動、やってるの？」
「やってるわけないじゃん、俺が。そういう活動よりも学校が嫌がっているのは、なにを考えているんだかわかんない奴なんだってさ」
組んだ腕を引っぱって、久美子は笑った。
「なにを考えているんだかわかんない奴ね。なるほどね」
「だから、いくら殴られても髪の毛を切らないとか、倫理社会の授業に出ないなんていうのは、要注意人物に入れられちゃうんだよ」
「自分でもわかっているんじゃない」
「このまえ言われたんだよ、野球部の上田に。あいつとはさ、二年の時にけっこう仲が良かったからさ」
「へえ」
「要注意人物十人の中に入っているから、なにもしないほうがいいって。もしなにかあったら、

俺は野球部に入っているからおまえを殴らなきゃならないって」
「でも、なにもやっていないんでしょ?」
「まあな」
長く広く大きな石段の下に、亮二と久美子はようやくたどり着いた。参詣客の数は、ずっと多くなっていた。
「クラスにひとりはスパイがいるっていうの、久美子は知っているか?」
「くわしくは知らないけど」
「入学試験の時に点数ぎりぎりの奴を、お情けで入れてやるんだってさ。それで、クラスの中のことはなんでも言うようにって、頭を押さえつけるんだってさ」
「わたし達のクラスにもいるの?」
「いるよ。誰がそうなのかも、わかっているよ。クラスの中のことは、みんなそいつから教師に筒抜けなんだ。それから、野球部に話がいくんだよ」
三週間振りに学校の外で久美子と会っているというのに、何故こんな話をしているのだろうかと亮二は思った。たぶん、久美子もそう思っているだろう。
「隣のクラスに、ちょっと活動をしている奴がいるんだよ。こないだ、そいつが野球部の奴等に、裏庭に呼び出されたんだ」
「へえ。でも、よく知ってるわね」
「その時、ちょうど俺もそいつといっしょにいたんだよ。だから、俺もいっしょに行ったんだ。

バットを持った奴が、十人ぐらいいたな」
「それで、どうしたの？」
「にらみ合って、終わりさ」
亮二を見上げて、久美子が言った。
「わたしの知らないことばっかりね」
「知らないほうがいいんだよ、久美子は」
石段を登り切ったあたりから、久美子は黙ってしまった。明らかに、不機嫌になっていた。
それを見て、亮二も面白くなくなってきた。
新宿でいっしょにいた男というのは、いったい誰なのだ。だいたい、休日に新宿や渋谷へ行くのは馬鹿だと言っていたのは、久美子ではないか。
亮二がそのことに触れようかどうしようかと考えていた時に、久美子がぽつんと言った。
「原ひろみから、手紙を貰ったんだって？」
不意を突かれて、亮二はあわてた。
原ひろみは隣のクラスの、ちょっと肉感的な女の子であった。十日ほど前に突然手紙を渡されて、亮二は驚きながらも良い気分でいたのであった。しかし、このことは誰にも、話してはいないはずなのに。
「なにが書いてあったの？」
「……べつに、なにも……」

「好きだとか、つきあいたいとか?」
「まあ、そんなとこだな」
「返事は書いたの?」
「書くわけないだろ、わたし達のことを知っているくせに」
「……誰に聞いたの?」
「あの子が自分で、言い触らしているのよ」
なんとなく、亮二は久美子のことを言えないような状態になってしまった。気まずい沈黙が続いた。

その日、亮二は久美子とキスもしないで、別れることになった。駅の改札口の中に消えて行く久美子の背中を見ながら、亮二は何故こんなふうになってしまったのだろうかと考えた。

迎賓館の前を通り過ぎて左に曲がると、あとは道なりに進むだけであった。上り下りの坂はなくなって道は平になっているし、もう全体の三分の二以上は来ているはずである。

小学校の前を通ると、体操服を着た教師らしい男女がくす玉や紅白のテントを片づけていた。運動会が終わったところなのだろう。亮二の高校の文化祭も、もうすぐであった。その日は亮二も、なにかしなければならなくなるだろう。

政治活動をしているというのは、小沢という男であった。原ひろみと同じ隣のクラスなのだ

けど、それまでは口をきいたこともなかった。最初に逢って話をしたのは、新宿であった。

亮二は新宿という町は好きではなかったのだけど、毎週土曜日の夜に行なわれていた西口広場のフォーク集会に興味を持って出かけて行ったのであった。警官達に遠巻きにされてではあったけれど、そこにはたしかに熱気があった。

その輪からはずれた通路のところに、サングラスをかけた小沢達がいた。小沢以外の男達は、見たことがない顔であった。集会が警察に依って中止にさせられたあとに、亮二は小沢達としばらく話し合った。

小沢はある組織の名前を挙げて、自分はそこに所属していると言った。そこはこんなべ平連のような、子供だましではないとも言った。やる気があるのならと言って、小沢は亮二をその組織に入らないかと誘った。

亮二は自分が政治活動をするなどとは、いままで一度も考えたこともなかった。基本的に集団に入ることを、亮二は好まなかったのだ。亮二は断わった。それならばそれでいいけれど学校の中でなにかをやる時には協力してもらいたいと言って、小沢達は去って行った。

学校の中でなにかをやるというのは、どういうことなのだろうか。亮二は学校には、なにも期待してはいなかった。あと一年もないのだ。卒業してしまえば、もうどうでもいいのであった。こんな高校などは。

亮二は髪の毛が長いと言われて、殆ど毎日のように殴られていた。しかし、そのことについて、まともに教師達と遣り合うつもりはなかった。奴等には理解出来るわけがなかった。だか

らといって、髪を短くするつもりも、もちろんなかった。学校や教師などと大真面目に対応する気など、亮二の中にはこれっぽっちも残っていなかったのであった。

学校のやることは、納得のいかないことばかりであった。毎日の服装の検査はまだいいけれど、抜き打ちにされる本人に無断での鞄やロッカーの検査は堪えられなかった。クラスにひとりはスパイがいるということも、我慢が出来なかった。

しかし、亮二が一番気に入らなかったことは、学校に生徒会がないということであった。つまり、学校のすることには、生徒はなにも言えなくなっているのであった。それが、亮二には不満であった。

それでも、もう二年以上も、我慢をしてきたのである。あと半年で、卒業なのだ。おとなしく時間を過ごせば、それですむのである。しかし、もしなにかがあるというのなら、そういうわけにもいかないということが、亮二にはわかっていた。

亮二はビートルズを聴いていたのだ。真剣にジョン・レノンを、五年間聴き続けていたのである。なにかがあるというのなら、このまま黙ったままで卒業するわけにはいかなかった。

新宿駅の西口で逢ってから二週間ほど経ってから、小沢が文化祭で研究発表をするからそれを手伝ってくれと亮二に言ってきた。それがなになのかはわからなかったけれど、亮二は同意した。しかし、ただ研究発表を行なって、それで終わるはずはないと亮二は思った。

だいたいが、亮二の高校の文化祭というのは、すべてを学校側だけでお膳立てしたものであって、文化部の発表以外には、なにもなかったのである。そこにどうやって、小沢は自分の研

実行の場を得るつもりなのだろうか。

そのことについて、会合がもたれた。学校やその近くではまずいということで、お茶の水の駅の近くの喫茶店で話し合いが行なわれた。二年生と三年生で二十人近くが、そこには集まっていた。

文化祭を全校生徒が参加出来るものにすることというのが、このグループの目標であった。それには、亮二も賛成であった。そのためには、文化祭委員会に入り込まなければならない。いままではそんなものは誰もやりたがらなくて、結局教師が指名したクラス委員などのお利口さんの生徒達がやっていたのであった。それを今回はグループの中の各々が各々のクラスで、文化祭委員になることに決定した。

その結果、亮二も生まれて初めて立候補をして、クラスの文化祭委員になった。そして、文化祭委員の四分の一は、グループの人間が占めることになった。そこで全校生徒が参加出来る文化祭にしようということで、委員会は進み始めた。

教師達が警戒し始めた。グループの会合も多くなった。久美子とあまり会えなくなったのは、この頃からであった。亮二は直彦にはそれとなく話してはいたのだけど、久美子にはなにも言わなかった。危険過ぎるから、巻き添えにはしたくなかったのであった。

文化祭には文化部だけではなくて、クラス毎でもグループ毎でも参加出来るようになった。なにも知らない一般の生徒達は思いもよらなかったお祭り騒ぎの予感に、一時に活気づいてきた。いままでこの学校に足りなかったのは、これだったのである。

CamScannerでスキャン

亮二はもうこれでいいと思った。この活気は亮二が卒業したあとにも、きっと続いていくだろう。グループの中の二年生達は、みんな来年の春にはクラス委員に立候補をすると言った。これでまともな生徒会も、出来るはずである。

ところが、そのあたりから小沢やいつも彼の周囲にいる、いわゆる活動をしている数人の態度に変化が生じてきた。小沢は自分がリーダーになって、文化祭当日に学校を封鎖、占拠すると言い出したのだ。全都動員をするとも言った。

そして、各々に仕事を分担して、押しつけてきた。教師の言いなりにさせられているのが嫌だったから、こういうことを始めたのだ。それが一段落ついたと思ったら、今度はこっち側から命令なのか。

小沢はとうとう語り始めた。君達はもう脱けることは出来ない。このまま大学へ行くことも出来ない。我々は退学になる覚悟である。そして、検定試験を受けて、大学へいくつもりである。

亮二はそこで立ち上がって、自分はそれにはかかわらないと断言をした。亮二の他にも数人が、亮二の発言に同意をした。小沢はヒステリックに、裏切り者と叫んだ。亮二はそのまま、喫茶店から外へ出てしまった。

学校を封鎖するというのなら、それはそれでもいい。しかし、小沢がリーダーになって、指揮をとるというのは嫌であった。何故、他人に命令を下したがるのだろうか。亮二にはわからなかった。

CamScannerでスキャン

小沢の恐喝じみた喋り方も、気に入らなかった。検定試験を受けて大学へいくというのも、おかしい。それならば、大学へなどいかなければいいではないか。労働者になるべきではないか。どこかが狂っているのである。

絵画館が見えてきた。学校までもうすぐである。いつものように、亮二は煉瓦造りの青年館の前から、歩き出すだろう。そして、文化祭の当日は結局小沢達を、手伝うことになるのだろうと思った。

その日、亮二は自分達の教室と研究発表用に与えられた部屋とを、行ったり来たりしていた。クラスの文化祭委員でもあるのだから、教室から全く離れてしまうことは出来なかったのだ。他のメンバーも、それは同じことであった。

グループの全員が集まれないことで、小沢は怒りわめき散らしていた。そんなことは初めからわかりきっていたことではないかと亮二は言ったのだけど、小沢は聞こえないふりをしていた。

ある程度メンバーが集まって見学者もいなくなった時に、小沢が予定を発表した。午後三時に体育館で演劇部が発表している時に、みんな客席で観ているように。小沢とあと数人だけが体育館の裏口で、他の学校から動員されて来る三十人を待っている。

彼等がやって来たら、いっしょに裏口から体育館に入って、舞台に上がって、アジテーションをする。客席にいる者はそれに同意をして、そこで体育館を占拠する。そして、小沢はいっ

CamScannerでスキャン

しょに行く人間を、指名しようとした。
「待て、俺が行く」
亮二が声を出した。
「俺も行く」
佐山が言った。佐山は亮二と同じように、小沢に反対意見を言う男であった。空手の二段だそうだ。運動部員でこのグループに入っているのは、佐山だけであった。佐山はいつも小沢の周囲にいる、活動家達をにらみつけて言った。
「三人いれば、充分だな」
小沢は嫌な顔をしたけれど、なにも言わなかった。
問題はまず文化祭であった。その次は、生徒会である。小沢や彼の取り巻き連中だけで舞台に上げてしまったら、興奮してなにを言い出すかわかったものではない。
革命などと、口走りそうであった。「ナンセンス、異議ナシ」などという言葉も、そこでは使わせたくなかった。亮二はひとりでそれを阻止しようと思っていたのだけど、佐山がいっしょなら百人力である。
教室に戻ると、そこはお祭り騒ぎになっていた。どうということのない模擬店だけなのだけど、他の学校から呼んだ友達なども来ているせいか熱気が充満していた。
「おまえ、忙しそうだな」
直彦が寄って来た。

CamScannerでスキャン

「なにか、やるのか?」
「まあな。でも、どうなるかわからないな」
「そうか」
「三時に体育館だ」
「俺もなにか手伝おうか?」
「いいよ、面倒臭くなるから」
「そうか。じゃあ、俺は午前中で帰るよ」
「そうだな。夜になったら、電話をするからさ」
話をしている亮二と直彦の前を、久美子が通った。今日はまだ一言も、口をきいてはいなかった。久美子は同じ歳ぐらいの、私服の男といっしょであった。友達を呼んだのだろうか。久美子の後姿を見つめて、亮二は黙ってしまった。
一息ついてから、直彦がためらいながら言った。
「どうでもいいんだけどさ、新宿で見たのもあいつだよ」
直彦はじゃあなと言って、帰って行った。亮二は研究発表の部屋に向かった。
研究発表といっても、そこにはただ文字が書かれてある模造紙が壁に貼ってあるだけであった。書かれているのは、「社会主義の歴史」というものであった。
部屋の中には、佐山だけしかいなかった。
「ひとりなのか、佐山?」

「こんなとこ、誰も来ないよ。一時間おきぐらいに、教師かスパイが見まわりに来るだけだよ」
「他の奴等は？」
「さあね。自分のクラスで忙しいんじゃないか」
「小沢は？」
「応援の奴等とうまく連絡が取れないって言って、外に電話をかけに行ったままだよ」
「やれやれだな」
そこに久美子がさっきの男と、ふたりで入って来た。
「この部屋はねえ」
久美子はぐるっと見まわして言った。
「つまり、社研ごっこかな」
男が笑った。佐山が舌打ちをして、部屋から出て行った。久美子も男と、出て行った。亮二は少し大きな声を出して、久美子の名前を呼んだ。
「そんなに大きな声を出さなくても、聞こえるわよ」
「あいつ、誰なんだよ？」
久美子が部屋の中に戻って来て、亮二を挑戦的な眼でにらんだ。
「誰だって、いいじゃない」
「よくないよ。誰だよ？」
「友達よ」

「友達なら、紹介してくれたっていいじゃないか」

「しなくたっていいでしょ」

久美子のくちびるが、かすかにふるえていた。川崎の映画館で泣きそうになった時と、同じ眼になっていた。「カム・トゥゲザー」のシュッという音が、亮二には聴こえた。

久美子は顔を亮二からそらして、出口に向かって歩き始めた。亮二はその腕をつかんで、強引に引き戻した。そして、久美子のくちびるに、くちびるを重ねた。久美子はすぐに顔を離した。

「やめてよ、こんなところで」

しかし、その声にはさっきのような力はなかった。亮二はもう一度くちびるを重ねて、久美子の中に舌を入れた。久美子はもう顔を離そうとはしなかった。

いっしょにいた男が、入口から顔を覗かせた。

「悪いけど、もう帰ってくれないか」

亮二はそう言って、久美子の顔中にキスをした。久美子は黙って、亮二に抱かれていた。男はあわてて、顔を引っ込めた。

久美子のひたいに、久美子のまゆげに、久美子のまぶたに、久美子の鼻に、久美子の耳に、久美子のあごに、亮二はキスをした。久美子はずっと、だって……だって……と言っていた。

顔を離して、亮二はささやいた。

「三時に体育館なんだ。どうなるかわからないから、久美子はいないほうがいいと思うんだ。午前中で帰っちゃえよ。夜になったら電話をするから、家にいろよ」
久美子は黙ったまま、うなずいた。

三時二十分になった。体育館の裏口には、亮二と佐山と小沢の三人だけしかいなかった。
「おい、来ないじゃないか?」
「……おかしいな。連絡がうまく取れなかったんだけど……」
「じゃあ、来ないんじゃないか」
「いや、ひょっとしたら……」
「ひょっとしたらなんて、それで体育館占拠なんて出来るのかよ」
佐山と小沢の言い合いを聞きながら、亮二は思っていたとおりだと胸の中で呟いた。
「ともかく、やろうぜ」
佐山が言った。
「どうやって?」
亮二が訊ねた。
「そうだな。舞台に上がっても三人じゃすぐに追い出されちゃうだろうから、放送室を押さえるっていうのはどうだ。あそこなら、三〜四人しかいないはずだ」
「なるほどね。それでマイクで呼びかけるのか」

「そうだ」

「あそこだったら、三人でも占拠出来るもんな。中から鍵をかけちゃえば、もうこっちのもんだしな」

「いいか、小沢?」

黙って聞いている小沢に、佐山が言った。

「わ、わ、わかった」

三人は裏口から体育館に入って、階段を上がって放送室に行った。亮二がドアを開けると、放送部の顧問の教師がぎょっとした顔で見た。部屋の中にはあとは放送部員が、ふたりいるだけであった。

「こ、こ、こら。さ、さ、さかぐちに、さ、さ、さやまに、お、お、おざわだな。わ、わ、わかってるんだぞ」

教師は青ざめた顔で、必死に声を絞り出した。

亮二と佐山は一歩前に出て、部屋の中に入った。

「も、も、戻りなさい。も、戻りなさい」

亮二と佐山は、もう一歩前に出た。

「は、は、はい」

小沢の声が聞こえた。

振り向くと教師と同じように青い顔をした小沢が、あとずさりしてドアの外に消えて行った。

亮二は佐山と、顔を見合わせた。なんだ、これは。
放送部の生徒達は、ぽかんとした顔をしていた。亮二は馬鹿馬鹿しくなってきた。
佐山が投げ遣りな調子で言った。
「おい、坂口。行こうぜ、もう」
体育館の外に出ると、小沢がぼうっと立っていた。亮二と佐山の顔を見ると、あわてて言った。
「お、お、俺、電話してくる」
小沢は校門に向かって、走って行った。
「なんだ、あいつ」
「あいつ、みんなになんて説明するんだろうな」
「だけど、坂口。俺達は処分されるのかな?」
「平気だろ。ただ放送室の中を、覗いただけじゃないか、結局」
「そういえば、そうだな」
「これでもう、全部おしまいだよ」
「もう帰るよ、俺」
佐山は校門に向かって、歩いて行った。
亮二は自分の教室に戻った。教室には、誰もいなかった。あと片づけは明日することになっていたから、体育館に行っている者以外はみんなもう帰ったのだろう。祭はもう終わってしま

CamScannerでスキャン

ったのだろうか。

亮二がぼんやりと座っていると、教室に上田が走り込んで来た。

「おい、坂口。まずいよ、まずいよ」

息が乱れている。

「おまえと佐山と小沢を、野球部が校門のところで待っているんだ」

「佐山と小沢は、もう帰ったぞ」

「それじゃあ、よけいにまずいじゃないか。おまえ、ひとりなのか」

「そうだけど、どうしてなんだよ？」

「どうしてって、わかってるだろ」

「だって、俺はなにもやってないんだぜ」

「ともかくな、どっかから塀を乗り越えて、うまく帰れよ。わかったな、じゃあな」

上田は来た時と同じように、また走って行った。

教室の窓から覗くと、バットを持った数人の男達が校門に向かって走って行くのが見えた。

校門のところには、すでにバットを持った男が三人立っていた。

馬鹿馬鹿しい。なにもしていないのに、バットで殴られるのか。亮二は逃げる気にはなれなかった。しかし、この教室にいても、しょうがない。研究発表の部屋に行っても、同じことだ。どうすればいいのだろうか。

突然、亮二はいまの自分の立場が、わかったような気がした。いまここで、俺はいるところ

CamScannerでスキャン

がないのだ。亮二はだんだんに、狂暴な気分になってきた。頭の中で「アイ・ウォント・ユー」のイントロの、ギターのリフレインが鳴り始めた。
亮二は模擬店に使っていた角材を取り上げると、教室から廊下に出た。
廊下の向こうから、久美子が走って来るのが見えた。
久美子は息を切らせて言った。
「大変よ。野球部があなたを、校門のところで待ちかまえているわよ」
「知ってるよ。いまからそこに行くんだよ」
「駄目よ、そんなの」
「うるせえ、どいてろ」
亮二は久美子を、突き飛ばした。久美子は廊下に倒れた。膝小僧をすりむいたようで、少し血がにじんだ。亮二はその血を見ながら、そういえば久美子は帰ったのではなかったのかと思った。
「どうして、まだいるんだよ？」
「心配になったから、体育館で見てたの。だけど、三時半を過ぎても、なにもないでしょ。だから、あなたを探してたの。そしたら、上田君と逢って、上田君が……」
「知ってるよ。もう聞いたよ」
「それなら、どこかからうまく逃げようよ」
「なんで、俺がこそこそ逃げなきゃならないんだよ」

「そんなこと言ったって……」

「俺は逃げないぞ。だけど、いまここでいるところがないんだ。だから、こっちから出て行くしかないんだ」

「落ちついてよ。ねえ、坂口君」

少し考えてから、久美子は言った。

「ねえ、あと十分もすれば、演劇部の発表も終わるでしょ。それから三十分もしないうちに、みんな帰っちゃうでしょ。それから学校中を探しても見つからなかったら、野球部だって帰っちゃうわよ。そうね、いまから一時間、長くても二時間。隠れていようよ。何本ものバットに一本の棒切れじゃ、しょうがないじゃないの」

「隠れるところなんて、あるわけがないじゃないか」

「大丈夫よ」

久美子は亮二の腕につかまって、立ち上がった。

女子更衣室のドアを開けて、久美子は亮二といっしょに部屋の中に入った。

「今日はこの部屋は、もう誰も使うはずはないから」

久美子は内側から、ドアに鍵をかけた。部屋の中には、湿ったような女の匂いが漂っていた。

ロッカーとロッカーの間を、久美子は奥に入って行った。そして、一番はずれの窓の横の、床の上に座った。

「ここからなら、校門も見えるの」
校門には三人の坊主頭が、バットを持って立っていた。ということは、残りの奴等は亮二を探して、校内中を走りまわっているということなのか。
亮二の頭の中の熱が、少し冷めてきた。
「どう。落ちついた、坂口君？」
また湿った女の匂いが、流れてきた。きっと、この部屋中のロッカーの中には、どれにも汗にまみれた体操服が入っているのだろう。
「なんか、やたらと女の匂いがするな」
「しょうがないじゃない、女子更衣室なんだから」
「初めて入ったな、この部屋」
「あたりまえじゃない」
今日初めて、久美子が笑った。そういえば、久美子の笑顔を見るのは、何日振りのことなのだろう。いや、何週間振りになるのかも知れない。
少し余裕が出てきて、亮二は部屋の中を見まわした。壁に小さな穴を埋めた跡が、いくつもあった。
「なんだい、あれは？」
「時々穴があいてるの。覗いているんでしょ、きっと」
「へえ、知らなかったな。隣は実験室だろ？」

「そうよ。こっそり覗いているみたいね」
「久美子も覗かれているのかな？」
「さあねえ」
「とんでもない奴等だな」
また久美子が笑った。
ロッカーのはずれに、他のロッカーとは異なった小さな引き出しがあった。「なんだ、これは？」と言って亮二が手を伸ばすと、久美子が「駄目よ、それは」と言った。亮二がかまわずにあけると、そこには生理ナプキンが入っていた。
「ほう」
「駄目って言ったのに……」
「こんなものが、どうしてここにあるんだ？」
「急に始まっちゃう子もいるから、いつも置いてあるの」
久美子が引き出しをしめた。
「久美子も使ったことがあるのか？」
「いやあねえ。ないわよ」
廊下をばたばたと走る音が、近づいて来た。亮二は角材を持って、身がまえた。誰かが外から更衣室のドアの把っ手を、がちゃがちゃといわせた。ここは大丈夫だろうという声が聞こえて、またばたばたと足音が去って行った。

..

「大丈夫よ、落ちついてよ」
久美子が角材を取り上げて、亮二を床の上に座らせた。そして、久美子も亮二と向かい合って座った。ロッカーとロッカーとの間の通路だから、ふたりの膝はくっついていた。
「久美子、膝を見せろよ」
久美子は膝を立てて、座り直した。膝小僧には、まだ血がにじんでいた、亮二は指で、その傷に触わった。久美子が痛いと言った。
俺は赤チンだったのだ。膝小僧に赤チンを塗って走りまわっていた、赤チンだったのだと亮二は胸の中で呟いた。
また廊下を走る音がした。亮二が立ち上がろうとすると、久美子が肩を押さえた。
「大丈夫よ、落ちついてよ」
角材に手を伸ばすと、それもさえぎった。
亮二が顔を見ると、久美子は膝を立てて座っているスカートを引いた。白い脚とパンティーが見えた。
「おいで、亮二」
なんだ、これは。こんな時に、こんな場所で。
「亮二がセックスをするのは、わたしだけなんでしょ?」
いつ奴等がドアを破って入って来るか、わからないというのに。
「おいで、亮二」

久美子は亮二の手を取って、自分の制服の上着の胸の中に入れた。亮二は手を伸ばして、久美子を抱き寄せた。

遠くでガラスの割れる音がした。しかし、亮二はそんなものは、もうどうでもよくなっていた。

亮二はかすかにふるえている指で、一枚ずつ久美子の服を脱がせていった。亮二がいままで知らなかった久美子の白い身体が、少しずつ明らかになっていった。

そして、すべての服を脱がせ終わると、亮二の目の前には久美子がいた。亮二は初めて見る久美子の身体のいくつかのほくろにくちびるをつけて、久美子の中に入っていった。

久美子は湿っていて柔らかくて暖かかった。亮二の頭の中では、「アイ・ウォント・ユー」のエンディングが、だんだんに大きくなりながら、いつまでも鳴り続けていた。

4

苺畑よ永遠に

演奏が出来る曲のひととおりの練習が終わったのは、もう十一時に近かった。あまり遅くまで音を出していると近所からうるさいと苦情がくるからと、何度も鶴見は言っていた。しかし、練習が終わるのは、いつも午前一時か二時頃になってしまう。
だいたいが、この鶴見の父親の持っている荷物置場は、夜になると殆ど人通りのなくなる倉庫街にあるのだ。だから、苦情など、出るわけはない。それよりも気をつけなければならないのは、巡回に来る警官であった。
音の大きさに文句をつけられるのは、かまわない。そこで、やめればいいのだ。しかし、練習をしている時には、たいてい四人共酒を飲んでいる。それが警官にわかると、そこに停めてある自動車の運転手である斎藤と鶴見がまずいことになってしまう。
警官はだいたいいつも一時過ぎあたりに、見まわりにくる。だから、その前にやめてしまえば、問題はない。今日は六時から始めたのだから、もう五時間になる。今日はこれぐらいにしようかと、亮二は終了を告げた。

斎藤レイが高校の友達の鶴見と浜口とで組んでいたバンドに亮二が加入して、もうそろそろ半年になる。一番最後に入ったというのに、リーダーはいつのまにか亮二ということになっていた。

レパートリーも亮二の好みが強く出ていて、ドアーズの「ブレイク・オン・スルー」や「エンド・オブ・ザ・ナイト」、ステッペン・ウルフの「ボーン・トゥー・ビー・ワイルド」、ジャックスの「ラヴ・ジェネレーション」や「裏切りの季節」、そして亮二が作った「傷だらけのガラス玉」などであった。

歳は四人共同じであったから、亮二もすぐにメンバーに入ることが出来た。しかし、高校を退学になってアルバイトをしている亮二と、高校からそのまま大学に入ったあとの三人とは、やはりどこか違うところがあるように、亮二は思っていた。

斎藤が亮二よりも鶴見や浜口に聞こえるように、坂口はやらなくてもいいよと言った。三人が楽器を片づけて、二台の自動車に分けて積み込むのを、亮二は左手の吊ってある包帯を意識しながら、黙って見ていた。

昨日、鉄骨運搬の仕事をしていた時に、平和島でした怪我であった。たしかに血がどっと出たし痛みもあったのだけど、それほどの怪我ではなかった。しかし、アルバイトの責任者が管理責任を問われると思って、あわてて亮二を病院に連れて行ったのであった。

その仕事はちょうど今日までの、一週間のものであった。責任者は金は一週間分全部払うし、今日は休んでもいいと言った。その代わりに事故のことは黙っていてくれ、とも言っていた。

CamScannerでスキャン

怪我といっても、一週間もすれば治ってしまう程度のものであった。なおかつ、亮二の不注意から起きたようなものでもあって、事故とは呼べないようなものであった。亮二は得をしたような気分であった。

楽器を全部積み終わって戸締まりをしてから、鶴見が腹が減ったと言った。最後の缶ビールを飲み干して、浜口がラーメンでも食いに行こうと言った。亮二は斎藤の自動車に、浜口は鶴見の自動車に、各々乗り込んで、四人は真夜中の町に走り出した。

練習のあとには、亮二は必ず反省会をした。それが場合に依っては二時間三時間にもなって、時には実際の練習時間よりも長くなってしまうことさえあった。その前に腹ごしらえをしておこうとみんなが思っているのが、亮二にはわかった。

今日の練習で気になったことが、亮二にはいくつかあった。しかし、今日はあまり言わないほうがいいかなと、亮二は少し迷っていた。

このバンドの編成は、斎藤がリード・ギター、亮二がサイド・ギター、浜口がベース、鶴見がドラムスであった。そして、亮二がリード・ヴォーカルで、斎藤と浜口がバック・コーラスをつけていた。つまり、ビートルズの形であったのだ。

四人共好きなロック・バンドは、各々異なっていた。しかし、根本的には全員が、ビートルズが大好きであったのだ。だから、初めのうちは、ビートルズのコピーばかりをやっていた。

たしかに、ビートルズは大好きである。しかし、自分が演奏する立場になったら、ビートルズのようにはやらない、というような意識を、だんだんに亮二は持ち始めていた。

演奏する立場とは、つまりプロになるということである。亮二とあとの三人との違いは、どうもここにあるようであった。三人には亮二ほどには、プロになるという気はないように思えた。

亮二はプロになると意識し始めた時から、コピーをやらなくなった。きちんとアレンジをして、レパートリーを増やす、という方向に向かったのであった。そこにビートルズの曲が一曲も入っていないことにも、三人には不満もあるようであった。

今日の練習では、亮二は左手の怪我のために、ギターは弾かないで、ヴォーカルだけをやることになった。そのギターが一本少なくなった分だけを埋めるためにか、今晩の三人の演奏はかなり気合いが入っていた。

練習をしながら、これからはずっとこの形でやろうと亮二は決心していた。亮二はヴォーカルだけで、あとのメンバーは各々の楽器だけに集中をする。バック・コーラスも、もう入れない。

そのことをミーティングで三人に言おうかどうしようか、亮二は迷っていたのであった。

終夜営業のチェーン店のまずいサッポロ・ラーメンを食べ終わったところで、斎藤が言った。

「どうせさ、これからいつものように俺んちへ来てミーティングをして、それで明け方になったら帰るんだろ。だったらさ、今日はいっそのこと、泊まってっちゃえよ」

鶴見と浜口は、すぐに同意をした。亮二はどちらでも、かまわなかった。いくら真夜中であ

っても、斉藤の家からなら三十分も歩けば家に帰れるのだ。

　時計を見ると、十二時を過ぎていた。亮二は家に、電話をかけた。バンドの練習のある日は、帰宅するのはいつも明け方であったから、電話をする必要はなかったのだけど、気にかかることがあった。父が風邪をひいて、寝込んでいるのであった。

　ただの風邪ならば、どうということはない。しかし、どうもただの風邪のようには、亮二には思えなかった。寝込んでから三日目になるのだけど、医者もあまりはっきりとしたことは言わなかった。

　父は糖尿病になっていた。だから、糖をとらないようにしていた。そのために、逆に身体の中の糖が少なくなり過ぎて、低血糖というのになってしまうことがよくあった。突然、倒れたりするのであった。だから、いつも氷砂糖を持ち歩いていた。少しでも様子がおかしくなったら、すぐにそれを口に含むのであった。

　ここのところ、父はかつてのように、酒を飲み続けることもなくなっていた。去年の亮二の高校退学の時の騒動も、少しは関係があるような気もしていた。めっきりと年寄り臭くなったようにも思えた。

　電話には、母が出た。斉藤の家に泊まることを告げると、気をつけるようにと言った。父の様子はあまり変わらないようであった。明日もなるべく早く帰って来るようにと、母は言った。

　それじゃあと言って亮二が電話を切ろうとした時に、母が八時ぐらいに藤原さんから電話があったわよと言った。久美子は亮二が不在と聞くと、お誕生日おめでとうございますと言った

そうだ。今日は亮二の誕生日であったのだ。
久美子は就職しているはずである。もうこの時間では、電話はかけないほうがいいだろう。
久美子とも、しばらく会っていなかった。亮二が退学になった直後には、殆ど毎日のように会っていたのだけど、それが今年になって高校を卒業して就職ということになって、久美子もあわただしくなってきたのであった。もともとは、久美子は大学進学のはずだったのだ。それが、いつのまにか就職に、変わっていた。
亮二は退学になって、すぐにアルバイトを始めた。大学に進学する気はなくなっていたけれど、とりあえずは一年間ぐらいは働きながら考えるつもりでいた。
亮二が提案したバンド編成の話は、亮二の予想とは全く逆に三人に受け入れられた。そして、いい奴がいたらキーボード奏者を入れよう、というような話にまでなった。
「明大前にキドアイラク・ホールっていう店があるんだよ」
話が一段落したところで、斎藤が言った。
「小さな店なんだけどさ、そこで出してくれるっていうんだよ」
亮二も言った。
「銀座にスリー・ポイントっていうところがあってさ、そこも出られるかも知れないよ」
ウイスキーを飲みながら、四人は車座になって話していた。
「秋になれば、大学祭もあるしな。うちの学校で教室をとればいいんだからな」
三人は同じ大学に通っていた。亮二はうなずいて言った。

「だからさ、早くワン・ステージ分ぐらいの、レパートリーを作ろうぜ。ちゃんと週に二回のペースで練習をしていけば、夏までには出来るんじゃないかな」

三人が演奏したい曲を、各々挙げ始めた。グランド・ファンク・レイルロードの「孤独の叫び」、ローリング・ストーンズの「ジャンピング・ジャック・フラッシュ」……。

亮二はこれからは、自作の曲を増やすつもりであった。「傷だらけのガラス玉」の他にも「飛んだ時のこと」や「黒い鳥」や「苺畑のヒッチハイカー」など、何曲かがすでに出来上がっていたのであった。

しかし、今日は黙っていることに、亮二は決めた。

話が落ちついたところで、亮二は今日が誕生日であったことを三人に告げた。

「へえ、そうか。じゃあ、今日は朝まで飲もうか」

どちらかというと無口な浜口が、楽しそうに言った。それを斎藤が押さえた。

「それよりかさ、ハッパがあるんだよ、ハッパが」

斎藤は部屋の奥から、ビニール袋に入ったマリファナを持ってきた。

鶴見が嬉しそうに言った。

「へえ、ずいぶんあるじゃない」

「種から植えて育てた奴がいてさ、そいつがくれたんだ」

「気前のいい奴だな」

「まあそれほど質は良くないらしいけどな」

鶴見は部屋のカーテンを、もう一度閉め直した。

斉藤がセブン・スターの葉を七分目ぐらいまで出してフィルターを折って捨てて、マリファナを入れた。

「坂口、そのレコードはなあに？」

隣に座っていた浜口が、亮二が持っていたレコード袋を指さして言った。

「これね、『ボブ・ディランのグレイテスト・ヒッツ』」

仕事が怪我で休みになったので、今日の昼間亮二は銀座で直彦に会ったのであった。直彦は大学生になっていた。今日は誕生日だと亮二が言うと、それならプレゼントにレコードを買ってやると直彦は言った。

ふたりでヤマハへ行くと、直彦はリンゴの『センチメンタル・ジャーニー』の輸入盤を取り出した。

「これはいいよ」

「どうして、リンゴじゃないか。持っているのか？」

「持っていないけどさ……」

「じゃあ、いいじゃないか」

「もうビートルズばっかり聴くのは、やめようかって思っているんだ」

「どうして？」

「いままであまりにもビートルズに、とらわれ過ぎていたような気がしてね」
そして、亮二が選んだのが、『ボブ・ディランのグレイテスト・ヒッツ』であったのだ。
マリファナが二本目になった時に、つけっぱなしにしていたラジオの深夜放送のDJがおかしなことを言った。ステレオの近くにいた鶴見と斉藤が、亮二の顔を見た。
「聞いたか?」
「聞いたよ」
ベッドの上に座っている浜口が、亮二達を見た。
「どうしたの?」
亮二が答えた。
「ポールがビートルズを脱退したんだってさ」
「なに、それ。どういうこと?」
「だから、ポールが四月十日に、ビートルズ脱退を発表したんだってさ」
自分で言っておきながら、亮二はそれがどういうことなのかよくわからなかった。
ということは、ビートルズは終わったのだろうか。そこいらへんの普通のバンドと同じように、ビートルズも終わってしまったのだろうか。ジョージやリンゴならともかくとして、ジョンかポールかどちらかが脱けたら、それでビートルズは終わりではないか。
真っ暗な部屋の中で、ステレオの青いパイロット・ランプだけが光っていた。斉藤が「レット・イット・ビー」のシングルを、繰り返し繰り返し何度も何度もかけていた。インドのお香

の匂いが、漂っていた。

亮二は薄暗い列車の中にいた。列車は満員であった。乗っている人間達は、やたらと汚ない奴ばかりであった。向こうの座席には、ライオンの夫婦が座っている。その席の横の通路を歩いていた男の頭を、オスのライオンが真赤な口を開けて齧った。顔の上半分がなくなった男は、そのまま亮二の前を通って歩いて行った。

そこで初めて、亮二はこれは走っている列車の中などではなくて、トンネルの中だということに気がついた。トンネルの内側に、列車の内部が作りつけられているだけだったのである。どおりで窓ガラスに顔をくっつけてみても、なにも見えないはずである。もう騙されないぞ。

亮二は窓を開けて、外へ飛び出した。そこはシベリアの荒れ果てた平原であった。振り返ると、いままで乗っていた列車がスロウ・モーションで走っていた。ということは、あれはトンネルではなかったのか。

レット・イット・ビー……レット・イット・ビー……レット・イット・ビー……レット・イット・ビー……。

列車の窓から、ひとりの女が亮二に向かって花を投げた。花はベル・フラワーであった。女は久美子であった。列車は行ってしまった。亮二はひとりぼっちで、荒野を歩きまわった。

レリビー……レリビー……レリビー……レリビー……。

環七の通りまで走って来て、亮二はもうその必要がないことに気がついた。もうあわてて走

りまわる必要はないのだ。病院のドアからここまで、走ってくることはなかったのだ。

この何日間か、いつもせかされて、あわてふためいていた。斎藤の家に泊まった次の日に、父の入院が決まった。部屋がなかったので、父は大部屋に入れられた。翌日、個室に移された。それが昨日だ。そして、今朝。たったいま、父は死んだのだ。

母も兄も亮二も、殆ど寝ていなかった。この三日間に、いろいろなことがあった。苦しがっている父の隣のベッドで、ラジオをかけながら煙草を吸っていた大部屋の同室者達。やたらと集まって来ては、無神経な話をする親類達。しかし、もう終わったのだ。父は死んでしまったのだ。

あとは家に帰って、通夜、葬式、火葬、納骨、と順序どおりにやればいいのだ。ともかく、いま亮二はみんなよりも一足先に家に帰って、掃除をしなければならないのだ。

亮二が掃除をやり終わってから一時間も経たないうちに、父の遺体と母と兄が帰ってきた。そして、いっしょに十人ほどの人間が、家にやって来た。午後になると、家の中は人間でいっぱいになった。父の遺体が置いてある部屋はもちろんのこと、二階の兄の部屋も亮二の部屋もひとでいっぱいになってしまった。

亮二の胸の中に、なにかむしゃくしゃしているものがあった。それがなになのかは、亮二自身にもよくはわからなかった。もう少しのところではっきりとしそうになるのだけど、雑用を片づけたり悔やみ客の相手をしたりしているうちに、それは実体のないもやもやとしたものになってしまった。

夕刻近くになってやって来た直彦の顔を見て、亮二はなんとなくはっとした。直彦も去年、父親をなくしていた。直彦はきちんとした黒の礼服を着ていた。亮二もダブルの礼服で、身を包んでいた。これは今朝死んだ、父の服であった。

父の服は亮二には大きかった。身長も体重も亮二のほうがあったはずだから、それだけ父は大きめの服を着ていたのだろうか。いや、この服を作った時には、これだけ大きかったのだろう。その父が糖尿病になって、低血糖になって、あわてて氷砂糖を口に含んで、風邪で死んでしまったのである。

家の中は人出で、ごったがえしていた。ちょっと外に出て来てもいいかと、亮二は母に訊ねた。しぶしぶながらも、すぐに帰って来るようにと、念を押して、母は許してくれた。

「直彦、外に出よう」

「いいのか？」

「うん」

「どこへいくんだ。どこか喫茶店か？」

近所の喫茶店は、もう父の死のことは知っているだろう。そこに亮二が入っていったら、ちょっとうるさいことだなあ。

「近くに神社があるんだ。そこへ行こうぜ」

亮二と直彦が家の玄関を出たところに、久美子が立っていた。

久美子は紺のおとなしいスーツを着ていた。たぶん、入社試験の面接か入社第一日目かに、

着たものなのだろう。着るのは今日で、まだ数回目といったふうであった。
久美子はどんな洋服を着ても、似合った。このスーツも、うまく着ていた。しかし、なにかが違うと、亮二は思った。このスーツの久美子は、亮二が知っている久美子ではなかった。
亮二は商店街を左に曲がって、神社の参道を進んだ。久美子は黙ったまま、ついて来た。直彦が口を開いた。
「まあ、なんて言えばいいのかな。大変だったな」
「まあな」
「だけど、ずいぶんひとが来てるなあ、おまえんちは」
「そうか。おまえんちと同じぐらいじゃないか。俺んちはおまえんちの半分ぐらいの大きさだから、多く思えるんじゃないか」
文化祭の騒ぎの翌日、亮二と佐山と小沢は自宅待機ということになった。学校との交渉や処分になった生徒の親同士での相談など、いろいろとあったらしい。学校から自主退学にすると通知が来た時、父はただ黙っていただけであった。
すべてが片づくまでの間、父は亮二に対して批難がましいことは一言も口にしなかった。事実関係を説明した時だけ、そんなことはするもんじゃないと淋しそうに一回言っただけであった。そして、淡々と事後処理をしてくれた。
三年前、亮二が高校入試に受かって、合格の通知が来た時、ビールを一口飲んで亮二の手をとって、下を向いて良かった良かったと言って泣き出した父を、亮二は思い出した。

CamScannerでスキャン

その時はなんて大袈裟なのだろうと思ったのだけど、そうするとあの退学騒動の時の父の気持ちはいったいどうなっていたのだろうか。糖尿病には心配事が一番良くないというのも、亮二の頭の中に浮かんだ。

鳥居をくぐると、夕方になっていた。

「この神社、子供の頃は毎日のように、遊びに来ていたんだ。それが、こんな近くにあるのに、もう何年も来ていなかったんだよな」

久美子はずっと黙ったままであった。

石段を登り切って、三人はベンチに座った。境内には他には、誰もいなかった。

直彦がポケットからケントを出して、一本くわえた。

「おまえのお父さん、いくつだったの?」

「五十」

「そんならいいほうだぜ。うちなんか四十五で死んだんだぜ」

「どういう仕事をしてたの?」

今日初めて、久美子が喋った。

「さあなあ、なんだったんだろうなあ?」

「知らないの、自分のお父さんの仕事を?」

「学校から来た家庭調査には、会社役員って書いていたな」

CamScannerでスキャン

父は毎年のように、新しい名刺を作っていた。いつも違う会社名であった。半年間酒を飲み続けるのだから、毎日仕事に出かけるわけでもなかった。銀座の喫茶店は、顔パスであった。
さっき、右翼の大物から、香典が届いていた。
そういえば、久美子の父親の職業を、亮二はまだ一度も聞いたことがなかった。うつむいて隣に座っている久美子に、亮二は自分と似た匂いを覚えた。
「何年か前にオキナワに、親父が行ったことがあったんだよ。その時に珍しいからさ、パスポートを見せてもらったんだ。そうしたらさ、顔写真が貼ってあるところに、『肉体上の特長』っていうのがあってさ、親父のにはそこに、"ホオニナナメニキズ"って書いてあったな」
直彦がふうんというような声を出して、ため息をついた。久美子は黙っていた。
その時、久美子が薄く化粧をしていることに、亮二は初めて気がついた。香料の匂いがした。眼やくちびるが、色づいていた。化粧をした久美子を見るのは、亮二は初めてであった。
鉛灰色の空から、ぽつんとひとしずく落ちて来た。
「雨かな」
直彦が空を見上げた。
久美子も顔を上げた。髪が揺れて、小さな白いイヤリングが覗いた。
直彦が立ち上がった。
「寒くなってきたから、俺は帰るよ」
「まだ、いいじゃないか。寒いんだったら、うちに寄ってってくれよ」

「わかった」
直彦はそのまま、石段を下りて行った。気を利かせてくれたのだろう。
直彦の姿が見えなくなってから、亮二は訊ねた。
「どんな仕事をしているんだ、久美子は？」
「――仕事じゃないの」
「なに、それ。どういうこと？」
久美子は新劇の、ある劇団の名前を言った。
「そこの研究生になったの」
「――ふうん」
久美子が舞台女優か。亮二は思ってもいなかったことで驚きはしたけれど、それもちっともおかしいことではないなと思った。
「びっくりした？」
「まあね」
亮二は久美子の耳の後に手をかけて、引き寄せた。そして、くちびるが重なったと思ったら、久美子は離れてしまった。
「ちょっと待って」
「どうして？」
「どうしてって――」

もう一度亮二は手を伸ばしてみたのだけど、今度ははっきりと拒絶されてしまった。久美子は立ち上がって、今日はいやよと呟いた。

初めてセックスをした時から、抱いてくちびるを重ねると、いつも久美子からはかすかな体臭が漂ってきた。その久美子の体臭が、亮二は好きであった。何故か、不思議に心が落ちつくのであった。

ところが、今日はなにも匂わなかった。化粧の香料のせいもあるのだろうか。亮二は今日の久美子は、亮二が知っている久美子ではないと思った。

亮二の手の平に、白いイヤリングがひとつ残っていた。亮二はおいと言って、それを久美子に渡そうと手を伸ばした。久美子はあげると言って、向こうを向いてしまった。

亮二の伸ばした手の親指の付け根に、久美子の口紅の跡が赤く残っていた。

久美子も直彦も、帰って行った。しかし、まだ人間はあふれるほどにいた。なにがおかしいのか、親類達が笑っている声が聞こえた。母と兄はその親類達との応対で、忙しそうであった。

亮二はジージャンとジーパンに着替えて、父の遺体の前に座り込んで、ひとりで酒を飲んでいた。そして、時々一座をにらみまわして、〝てめえら、見てろよ〟と呟いた。なにが〝てめえら、見てろよ〟なのかは、亮二自身にもよくはわからなかった。

一年のうち半年間、酒を飲み続ける男。銀座の映画館が顔パスの男。右翼の大物から香典が来る男。ホオニナナメニキズと書かれる男。俺はその子供なのだ。

髪の毛を肩まで伸ばした男なのだ。ジョン・レノンふうの丸い眼鏡をかけた男なのだ。高校を退学になった男なのだ。そして、ビートルズを聴いてきた男なのである。てめえらとは、違うのだ。よく、見てろよ。

串間家がみんな帰って、母も兄も疲れて寝てしまった。亮二だけが酒を飲んで、いつまでも起きていた。

ちょっとうとうととした時に、電話が鳴った。時計を見ると、五時であった。

「もしもし」

「あっ、ごめんね。起きていた？」

久美子の声であった。

「うん。だけど、どうしたんだよ？」

「御通夜だから、起きているとは思ったんだけど」

「どうしたんだよ、いったい？」

「ちょっと、外に出られない？」

「――なんだよ？」

「近くまで来てるの」

「こんな時間に、どうして？」

「自転車で来たの」

「――うちからか？」

「そう」
「……」
「ねえ、ちょっと外に出られない？」
「……出られるけど……」
「じゃあ、さっきの神社で、五分後ね」
亮二がおいと言う前に、電話は切れてしまった。
これはいったい、どういうことなのだろうか。
亮二は外に出た。空は少しずつ、明るくなり始めるところであった。
亮二は参道を歩いた。そういえば、今日は一日中、礼服を着ていたのであった。ジーパンで外を歩くのは、実に久し振りのような気がした。
石段の下には、たぶん久美子のものであろう自転車が置かれてあった。
石段を登り切ると、薄明るい朝の空気の中で、外灯に照らされて、久美子が立っていた。久美子は亮二を認めると、にこっと笑った。久美子は亮二も見慣れていた、緑のミニ・スカートをはいていた。
いったいどうしたんだよと亮二が言う前に、久美子は抱きついてきた。その格好で自転車に乗って来たのかと言おうとしたら、くちびるを重ねてきた。
久美子からは、化粧の香料の匂いはしなかった。その代わりに、亮二が好きな久美子の体臭が、かすかに漂ってきた。

亮二はすべてがわかったように思えた。亮二は久美子を抱き上げて、神楽殿の後の草むらの中に入って行った。

久美子がミニ・スカートのポケットの中からひとつしかない白いイヤリングを取り出して、草むらの中に投げた。

あの白いイヤリングは、何年も草むらの中にいることになるだろう。泥に汚れて、金具は錆びて……。少年が見つける時には、青いナイフになっているはずである。

たしかに、ビートルズは終わった。たしかに、親父は死んだ。しかし、いま亮二は久美子を抱いている。

空が明るくなってきて、久美子の顔に影を作っていた。久美子の顔は、ハーフ・シャドーになった。亮二が一枚服を脱がすたびに、久美子の体臭は強くなってきた。

朝の光と久美子の体臭に包まれて、亮二はゆっくりと久美子の中に入って行った。

どこか遠い空の彼方から、ウェシェゲロベペアンという声が、はっきりと亮二には聴こえた。

松村雄策（まつむら　ゆうさく）
1951年4月，東京都大田区に生まれる。
雑誌編集，演奏活動などを行いながら，『ロッキング・オン』を中心に，音楽をめぐるエッセイを書きつづけている。
著書に『アビイ・ロードからの裏通り』『岩石生活入門』（ともにロッキング・オン社）がある。

苺畑の午前五時

1987年3月5日　初版第1刷発行

913.6
マツ

著　者　松村雄策

発行者　布川角左衛門

発行所　株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2-8
郵便番号　101-91
電話　291-7651（営業）　294-6711（編集）
振替　東京　6-4123

©1987 ISBN4-480-80264-9　C0093
印刷・多田印刷　製本・積信堂

CamScannerでスキャン